ISSN 1343-4225

ERINA REPORT

ECONOMIC RESEARCH INSTITUTE FOR NORTHEAST ASIA

ERINA REPORT 90

シリーズ：世界金融危機と北東アジア経済（第１回）
Special Series: The Global Financial Crisis and the Northeast Asian Economy (Part 1)
■シリーズ「世界金融危機と北東アジア経済」掲載にあたって　西村可明
On the Publication of "The Global Financial Crisis and the Northeast Asian Economy" Series
NISHIMURA, Yoshiaki
■世界金融危機とロシア経済の現状　田畑伸一郎
The Russian Economy amid the Global Financial Crisis (Summary)
TABATA, Shinichiro

特集：吉林省経済と図們江地域開発の進展（2）
Special Feature: Developments in the Economy of Jilin Province and in the Development of the Tumen River Area (2)
■中国吉林省における外国直接投資の実態分析　廉暁梅
An Analysis of the Current Status of the Introduction of Foreign Direct Investment in China's Jilin Province (Summary)　LIAN, Xiaomei
■中国吉林省における労働力の海外派遣事業　王彦軍
The Project of Dispatching Labor Overseas in China's Jilin Province (Summary)　WANG, Yanjun
■日中間における地方経済の連携の可能性－新潟県と延辺朝鮮族自治州のビジネス交流事例－　穆尭芋
The Potential for Regional Economic Coordination between China and Japan: The case example of business exchange between Niigata Prefecture and Yanbian Korean Autonomous Prefecture (Summary)　MU, Yaoqian
■中国東北三省における優先開発区の現状と課題－吉林省の事例を中心に－　常艶
The Current Status of and Challenges for the Priority Development Zones in the Three Northeastern Provinces of China: Taking Jilin Province as an example (Summary)　CHANG, Yan

2009
NOVEMBER
vol.90

目　　次

シリーズ：世界金融危機と北東アジア経済（第１回）
Special Series: The Global Financial Crisis and the Northeast Asian Economy (Part 1)

■シリーズ「世界金融危機と北東アジア経済」掲載にあたって…… 01
ERINA所長　西村可明
On the Publication of "The Global Financial Crisis and the Northeast Asian Economy" Series… 01
NISHIMURA, Yoshiaki, Director-General, ERINA
■世界金融危機とロシア経済の現状…… 02
北海道大学スラブ研究センター教授　田畑伸一郎
The Russian Economy amid the Global Financial Crisis (Summary) …… 15
TABATA, Shinichiro, Professor, Slavic Research Center, Hokkaido University

特集：吉林省経済と図們江地域開発の進展（２）
Special Feature: Developments in the Economy of Jilin Province and in the Development of the Tumen River Area (2)

■特集にあたって　ERINA調査研究部研究員　朱永浩 …… 16
On the Special Feature　ZHU, Yonghao, Researcher, Research Division, ERINA …… 17
■中国吉林省における外国直接投資の実態分析…… 18
吉林大学東北アジア研究院副教授　廉暁梅
An Analysis of the Current Status of the Introduction of Foreign Direct Investment in China's Jilin Province (Summary)…… 27
LIAN, Xiaomei, Associate Professor, Northeast Asian Studies Academy of Jilin University
■中国吉林省における労働力の海外派遣事業…… 28
吉林大学東北アジア研究院講師　王彦軍
The Project of Dispatching Labor Overseas in China's Jilin Province (Summary) …… 35
WANG, Yanjun, Lecturer, Northeast Asian Studies Academy of Jilin University
■日中間における地方経済の連携の可能性－新潟県と延辺朝鮮族自治州のビジネス交流事例－… 36
ERINA経済交流部兼調査研究部研究員　穆尭芋
The Potential for Regional Economic Coordination between China and Japan: The case example of business exchange between Niigata Prefecture and Yanbian Korean Autonomous Prefecture (Summary) …… 42
MU, Yaoqian, Researcher, External Relations Division and Research Division, ERINA
■中国東北三省における優先開発区の現状と課題－吉林省の事例を中心に－…… 43
中国人民大学区域与城市経済研究所博士課程　常艶
The Current Status of and Challenges for the Priority Development Zones in the Three Northeastern Provinces of China: Taking Jilin Province as an example (Summary) … 49
CHANG, Yan, Ph.D. Student, Institute of Regional and Urban Economics, Renmin University of China

■会議・視察報告
◎第３回太平洋経済会議　ERINA調査研究部部長代理　新井洋史 …… 50
◎2009（フホホト）日中経済協力会議　ERINA特別研究員　鈴木伸作 …… 51
◎中国黒龍江省チチハル市産業調査　ERINA調査研究部研究員　朱永浩 …… 54
◎ERINA・JRIワークショップの開催　ERINA調査研究部研究主任　中島朋義 …… 56
■北東アジア動向分析 …… 58
■研究所だより …… 65

シリーズ「世界金融危機と北東アジア経済」掲載にあたって

ERINA 所長　西村可明

昨年９月のリーマンショックに始まる世界金融危機は、金融面だけでなく、世界の実体経済にも大きな影響を及ぼしている。北東アジアの経済もその影響を免れていない。シリーズ「世界金融危機と北東アジア経済」は、この世界金融危機が北東アジアの経済にどのような影響を及ぼしているのか、各国別に考察しようとするものである。

周知の通り、一口に北東アジア経済といっても、その構成は同質ではない。それ故、この地域に対する世界金融危機の影響も一様ではないと推測される。たとえばそこには、社会主義の北朝鮮、市場経済への移行を推進してきた中国・ロシア・モンゴル、先進経済入りを果たそうとしている韓国と、経済体制自体が多様である。また対外依存の強い経済もあれば、そうでない経済もある。前者の場合でも、対外依存が貿易面にとどまる国もあれば、金融面にまで及ぶ国もある。またロシアや中国のような大国の場合、世界金融危機が国全体に及ぼす影響と、ロシア極東や中国東北部など地域に及ぼす影響とは必ずしも同じでないかもしれない。さらに北東アジア地域内部の二次的な相互作用もあり得る。

したがって、世界金融危機が北東アジア５カ国にどのような影響を及ぼしているのか、ロシアや中国のこの地域への影響の特徴はなにか、これらの点についての検討が必要になるのである。この検討は、北東アジア経済の現状に関する時宜を得た情報提供になるだけでなく、この地域の経済の理解をいっそう深めるためにも有益であろう。

本シリーズでは、このような観点から、北東アジア各国経済の代表的専門家による現状分析を掲載し、さらに地域的特殊性を明らかにするために、現地に踏み込んだ分析も添えることを予定している。

On the Publication of "The Global Financial Crisis and the Northeast Asian Economy" Series

NISHIMURA, Yoshiaki
Director-General, ERINA

The global financial crisis that began with the Lehman shock of September last year has greatly influenced not just the financial sphere but the real economy of the world as well. The Northeast Asian economy has also not been immune to that influence. "The Global Financial Crisis and the Northeast Asian Economy" series attempts to examine, for each nation separately, in what way the global financial crisis is influencing the Northeast Asian economy.

As is well known, the "Northeast Asian economy" does not have a homogenous composition. For that reason it is inferred that the influence of the global financial crisis on this region is not uniform. Within it the economic systems are diverse, with, for example, the socialist DPRK; China, Russia and Mongolia, which have promoted a transition to a market economy; and the ROK, which is attempting to achieve entering the ranks of the advanced economies. Furthermore, there are both economies which are strongly dependent on other countries and those which are not. In the case of the former, there are both countries where dependence on other countries stops at trade and those where it extends to finance. Moreover, in the case of large countries like Russia and China, the influence the global financial crisis has on the country as a whole and its influence on regions, such as the Russian Far East and China's Northeast, may not necessarily be the same. And furthermore there is also the possibility of secondary mutual interaction inside the Northeast Asian region.

Consequently, investigation will become necessary on the following two points: what kind of influence the global financial crisis is having on the five countries of Northeast Asia, and what the characteristic features are of the influence on the parts of Russia and China in this region. This investigation will be of advantage for not only coming to the timely provision of information relating to the current situation of the Northeast Asian economy, but also for further deepening the understanding of the economy of this region.

In this series, from such viewpoints, we publish analysis of the current situation by specialists on the economies of each country of Northeast Asia, and additionally, in order to elucidate the regional specificities, we are planning the adding of analysis based on the situation on the ground.

[Translated by ERINA]

世界金融危機とロシア経済の現状

北海道大学スラブ研究センター教授　田畑伸一郎

はじめに

本稿では、2008年９月に表面化した世界金融危機がロシア経済に与えた影響について考察する。ロシアにおいては、世界金融危機の影響は、直接的には、外国からの資金の引き上げ、ルーブルの減価、原油価格の急落などの形で現れた。しかし、2008年９～10月時点では、この影響は軽微という見方があり、筆者自身もこうした見方を取っていた（田畑、2008c）。その根拠としては、外貨準備の大きさ、ロシア経済における金融セクターの役割の小ささ、原油価格が下がることによる輸入代替の可能性、その際の外資系企業の役割への期待などがあった。ところが、このような予想に反して、2008年11月から2009年１月にかけて、生産の低下や資本の流出、ルーブル・レートの低下などが深刻化していくこととなった。2009年２月以降は、若干の回復の兆しが見えているものの、2009年の経済予測は次第に、より悲観的な方向に修正されている。すなわち、世界金融危機の影響は長く続くと見られている。本稿では、こうした状況について統計データをもとにマクロ経済の観点から検討する。

１．生産の低下

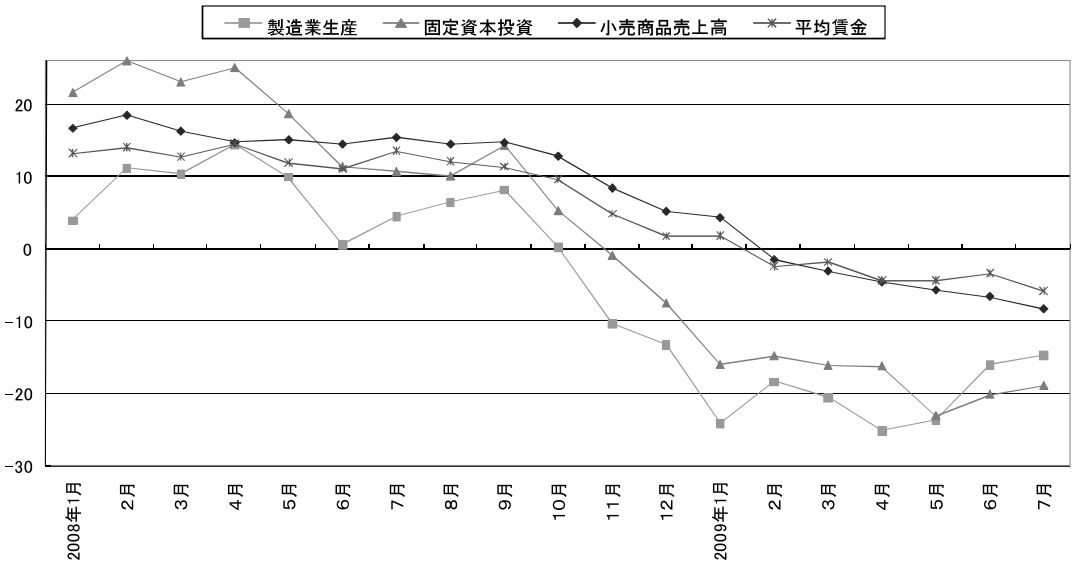
ロシアでは、1999年から2007年まで年平均７％の経済成長が続いた（田畑、2008b）。2008年には世界金融危機の影響を受けたものの、同年上半期に原油価格の空前の高騰を背景に成長率が高まったために、2008年全体の実績としては、それほど悪くはなかった（田畑、2009）。GDPは5.6％

表１　ロシアの主要経済指標

	2007年	2008年	2008年 10－12月	2009年 1－3月	2009年 1－7月
GDP	8.1	5.6	1.2	▲ 9.8	▲ 10.4[1)]
鉱工業生産	6.3	2.1	▲ 6.1	▲ 14.3	▲ 14.2
うち；製造業	9.5	3.2	▲ 7.7	▲ 20.8	▲ 20.3
固定資本投資	21.1	9.8	▲ 2.3	▲ 15.6	▲ 18.8
小売商品売上高	16.1	13.5	8.7	▲ 0.1	▲ 3.8
可処分所得	12.1	2.9	▲ 5.8	▲ 0.2	▲ 0.9
平均賃金	17.2	11.5	5.0	▲ 0.8	▲ 3.0

（注１）2009年1-6月。
（出所）ロシア統計局ウェブサイト。

図１　ロシアの月別主要経済指標の推移（2008～2009年）
（対前年同月比増加率 %）



（出所）ロシア統計局ウェブサイト。

増加し、投資や消費も10％程度の増加となった（表１）。ただし、鉱工業生産、とくに、製造業生産は、前年と比べて、成長率が大きく低下した。

しかし、2008年の第４四半期だけの数値を見ると、すべての指標について成長の鈍化は明らかである。とりわけ、鉱工業生産は第４四半期に対前年同期比6.1％の減少となり、固定資本投資も同2.3％の減少となった。2008年10月以降経済状況が悪化したことは、月別の指標（対前年同月比の指標）を示した図１から明らかである。とくに、製造業生産は、10月時点で対前年同月比ゼロ成長となり、11月以降、対前年同月比で減少となった。

経済状況は、2009年に入ってさらに悪化した。2009年第１四半期のGDPは対前年同期比9.8％の減少、第２四半期は同10.9％の減少となり、2009年上半期全体でも10.4％の減少となった。鉱工業生産や投資の落ち込みはさらに大きくなった（表１）。小売商品売上高や平均賃金も2009年に入ると対前年同期比でマイナスとなり、マイナス幅は、第２四半期以降いっそう大きくなった。

2008年第４四半期のGDPの成長率低下に対する生産部門別の寄与度を見てみると、2008年第３四半期までと比べて、製造業の落ち込みがもっとも大きく寄与したことが分かる（表２）[1]。次いで、商業（卸売業・小売業・修理業）の成長率低下が寄与した。2009年第１四半期におけるGDPのマイナス成長についても、製造業の寄与がもっとも大きく、商業、建設業、不動産業、運輸・通信業がそれに次いでいる。これらの諸部門は、まさに近年のロシアの高成長を支えていた部門である。

次に、GDP成長に対する支出項目別の寄与度を見ると、2008年第４四半期については、第３四半期までと比べて、輸出と投資（総固定資本形成）の減少がもっとも大きく成長率低下に寄与したことが分かる（表３の下段）。家計と在庫品増加がそれに次いでいる。2009年第１四半期については、GDPの減少をもたらした最大の要因は在庫品増加である。GDPの減少（9.8％）の87％を在庫品増加の減少がもたらしたことになる。名目値で見ると、在庫品増加は、2008年第１四半期の2,395億ルーブル増加から、2009年第１四半期の3,400億ルーブル減少に大きく変動した。この2008年と2009年の第１四半期を比べた場合の在庫品増加の減少の58.8％は生産在庫（原材料在庫）増加の減少、22.2％は商品在庫増加の減少によるものであった[2]。生産在庫の大幅減少は、後述する資金繰りの悪化にも関係すると見られる。

図２は、支出項目別の成長寄与度を図示したものである。2001年から2007年までほぼ同じような構造（成長メカニズ

表２　ロシアGDP成長の生産部門別寄与度（％）

	2008				2009
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q1
GDP（市場価格）	8.7	7.5	6.0	1.2	▲ 9.8
農林業	0.1	0.2	0.7	0.4	▲ 0.0
鉱業	0.1	0.2	0.1	▲ 0.4	▲ 0.2
製造業	1.0	0.9	0.7	▲ 1.6	▲ 3.7
電気・ガス・水道業	0.2	0.1	0.1	▲ 0.2	▲ 0.2
建設業	1.1	0.9	0.5	0.2	▲ 0.9
卸売業・小売業・修理業	2.6	1.7	0.9	1.0	▲ 0.9
ホテル・レストラン業	0.1	0.1	0.1	0.1	▲ 0.1
運輸・通信業	0.9	0.8	0.5	0.3	▲ 0.6
金融業	0.4	0.3	0.3	0.2	0.0
不動産業・物品賃貸業・事業サービス業	0.8	1.1	1.0	1.2	▲ 0.7
公務・国防・強制社会保障事業	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1
その他	▲ 0.0	0.0	▲ 0.0	0.0	▲ 0.3
純生産物税	1.3	1.1	0.9	▲ 0.1	▲ 2.3

（出所）ロシア統計局ウェブサイトからの計算値。

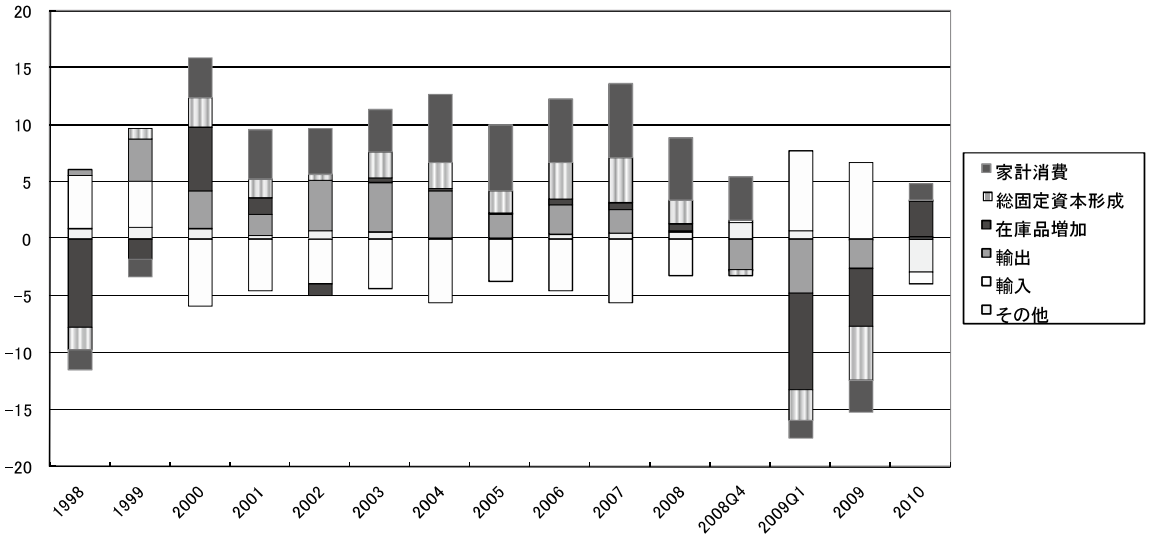
[1] たとえば、製造業の寄与度がマイナス1.6％であることは、製造業だけでGDPの1.6％の減少をもたらしたことを意味する。
[2] ロシア統計局国民勘定局のイリーナ・マサコワ局長からの聞き取り（2009年８月４日）に基づく計算値である。商品在庫は、名目値で見る限り、2009年第１四半期にも増加を記録している。

表３　ロシアGDP成長の支出項目別増加率・寄与度（%）

	2008					2009			2010
	Q1	Q2	Q3	Q4	年間	Q1	Q2	年間	年間
増加率									
GDP（市場価格）	8.7	7.5	6.0	1.2	5.6	▲ 9.8	▲ 10.9	▲ 8.5	1.0
最終消費支出	9.3	10.3	9.7	6.6	8.9	▲ 1.9	▲ 2.3	▲ 4.3	▲ 1.8
家計	12.2	13.4	12.2	8.0	11.3	▲ 3.2	…	▲ 5.9	2.5
政府	2.6	2.3	2.5	2.4	2.5	1.3	…	0.3	▲ 13.2
非営利組織	▲ 3.2	▲ 0.8	▲ 0.8	▲ 0.9	▲ 1.4	▲ 1.3	…	▲ 2.0	▲ 2.0
総蓄積	17.2	21.0	13.4	▲ 2.1	11.1	▲ 56.0	▲ 66.4	▲ 38.3	18.2
総固定資本形成	23.5	17.4	12.1	▲ 2.0	10.0	▲ 16.3	▲ 15.2	▲ 21.5	0.4
在庫品増加	▲ 8.6	44.5	17.1	1.4	18.4	…	…	…	…
純輸出	▲ 9.5	▲ 43.4	▲ 59.4	▲ 39.9	▲ 36.0	17.2	72.9	45.2	▲ 14.8
輸出	9.8	0.3	2.0	▲ 8.7	0.5	▲ 14.5	▲ 4.5	▲ 8.3	0.8
輸入	20.9	19.4	21.5	0.9	15.0	▲ 34.3	▲ 41.1	▲ 30.6	5.0
寄与度									
GDP（市場価格）	8.7	7.5	6.0	1.2	5.6	▲ 9.8	▲ 10.9	▲ 8.5	1.0
最終消費支出	6.6	6.9	6.1	4.2	5.9	▲ 1.3	▲ 1.5	▲ 2.8	▲ 1.4
家計	6.1	6.5	5.7	3.8	5.4	▲ 1.5	…	▲ 2.8	1.4
政府	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.2	…	0.1	▲ 2.8
非営利組織	▲ 0.0	▲ 0.0	▲ 0.0	▲ 0.0	▲ 0.0	▲ 0.0	…	▲ 0.0	▲ 0.0
総蓄積	3.1	4.8	3.8	▲ 0.6	2.7	▲ 11.1	▲ 17.1	▲ 9.8	3.3
総固定資本形成	3.4	3.4	2.5	▲ 0.5	2.1	▲ 2.6	▲ 3.2	▲ 4.7	0.1
在庫品増加	▲ 0.3	1.3	1.2	▲ 0.0	0.6	▲ 8.5	▲ 13.9	▲ 5.1	3.2
純輸出	▲ 1.0	▲ 3.8	▲ 4.3	▲ 3.5	▲ 3.1	2.1	7.6	4.1	▲ 0.8
輸出	3.0	0.1	0.6	▲ 2.7	0.2	▲ 4.8	▲ 1.5	▲ 2.6	0.2
輸入	▲ 4.4	▲ 4.3	▲ 4.6	▲ 0.2	▲ 3.3	7.0	9.1	6.7	▲ 1.1

（出所）ロシア統計局ウェブサイトからの計算値。2009年第２四半期はVedomosti（August 12, 2009）からの計算値。2009～2010年の年次データは経済発展省の予測値からの計算値。

図２　ロシアの支出項目別GDP成長寄与度（%）



（注）2009～2010年の年次データは、経済発展省の予測値からの計算値。
（出所）ロシア統計局ウェブサイトから作成。

表４　ロシアの鉱工業部門別生産増加率

（対前年同期比増加率　%）

	2007	2008	2008 10-12月	2009 1-3月	2009 1-7月
鉱工業全体	6.3	2.1	▲ 6.1	▲ 14.3	▲ 14.2
鉱業	1.9	0.2	▲ 1.0	▲ 3.8	▲ 3.1
燃料・エネルギー	1.9	▲ 0.2	▲ 1.2	▲ 3.8	▲ 2.4
その他	1.6	1.5	▲ 2.4	▲ 7.8	▲ 9.5
製造業	9.5	3.2	▲ 7.7	▲ 20.8	▲ 20.3
食品、飲料、タバコ	6.1	1.1	▲ 6.3	▲ 3.3	▲ 2.2
繊維、縫製	▲ 1.3	▲ 4.5	▲ 16.2	▲ 11.2	▲ 22.1
皮革・同製品、製靴	0.0	1.7	▲ 7.1	▲ 17.0	▲ 8.0
木材加工・同製品	6.2	1.4	▲ 16.4	▲ 29.2	▲ 25.3
紙パルプ、出版・印刷	9.1	0.8	▲ 11.1	▲ 18.0	▲ 16.2
コークス、石油製品	2.9	2.7	1.2	▲ 3.7	▲ 1.8
化学工業	6.0	▲ 4.2	▲ 21.5	▲ 22.4	▲ 15.4
ゴム・プラスチック製品	22.1	12.5	1.0	▲ 17.3	▲ 15.8
その他の非金属鉱物製品	10.3	▲ 0.9	▲ 13.6	▲ 33.2	▲ 30.2
治金、完成金属製品	2.1	▲ 0.2	▲ 5.3	▲ 27.3	▲ 24.3
機械・設備	19.1	4.0	▲ 12.0	▲ 25.7	▲ 34.2
電気・電子機器、光学機器	11.8	▲ 7.9	▲ 13.0	▲ 43.4	▲ 37.8
輸送機器	15.3	9.5	▲ 8.7	▲ 35.5	▲ 39.6
その他	5.1	4.6	▲ 4.6	▲ 20.7	▲ 23.2
電気・ガス・水道業	▲ 0.2	1.4	▲ 5.4	▲ 5.1	▲ 5.9

（出所）ロシア統計局ウェブサイト。

ム）であったのに対し、2008年第４四半期に大きく様変わりし、2009年第１四半期にも大きく変化したことが明瞭である。また、2009年第１四半期については、1998年と類似していることも明らかである。すなわち、1998年のGDPの減少についても、在庫品増加の寄与度が大きく、輸入の大幅減少がGDP成長のほぼ唯一のプラス要因となったことも共通している。

GDPの落ち込みにもっとも大きく寄与した製造業生産について見ると、2008年第４四半期には、化学、木材加工、繊維などで、生産減少が大きかった（表４）。2009年については、機械・設備、電気機械、輸送機器の機械工業3部門における30％を超えるような大幅減少が際立っている。

２．生産低下の要因

2008年第４四半期については、既述のように、輸出と投資の減少がGDPの低下にもっとも大きく寄与した。このうち、輸出については、第４四半期に実質で対前年同期比8.7％の減少となったが、これにもっとも大きく寄与したのは、天然ガスの輸出量の減少であったと見られる。欧州への天然ガス輸出価格は、先行９カ月間の石油製品価格の平均値にリンクされているため、原油価格に連動する石油製品価格が低下傾向にあるなかで、欧州諸国は天然ガスの備蓄分を利用して、高価格の天然ガスの購入を先送りしたとのことである[3]。このほか、鉄鋼、非鉄金属などの輸出量減少の寄与も大きかったと見られる[4]。

しかし、このような輸出や投資の減少が、2008年第４四半期において表４に示されたような多くの製造業部門の生産低下を直接的に引き起こしたとは考えにくい。こうした部門のすべてが輸出や投資の減少に直接的に関わっているわけではないからである。また、第４四半期においては、最終消費支出が対前年同期比で4.2％の増加であったことも想起する必要がある（表３）。こうした点からも、ロシアの生産低下は、少なくとも当初の段階においては、需要

[3] 石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の本村真澄主席研究員からの聞き取りによる。

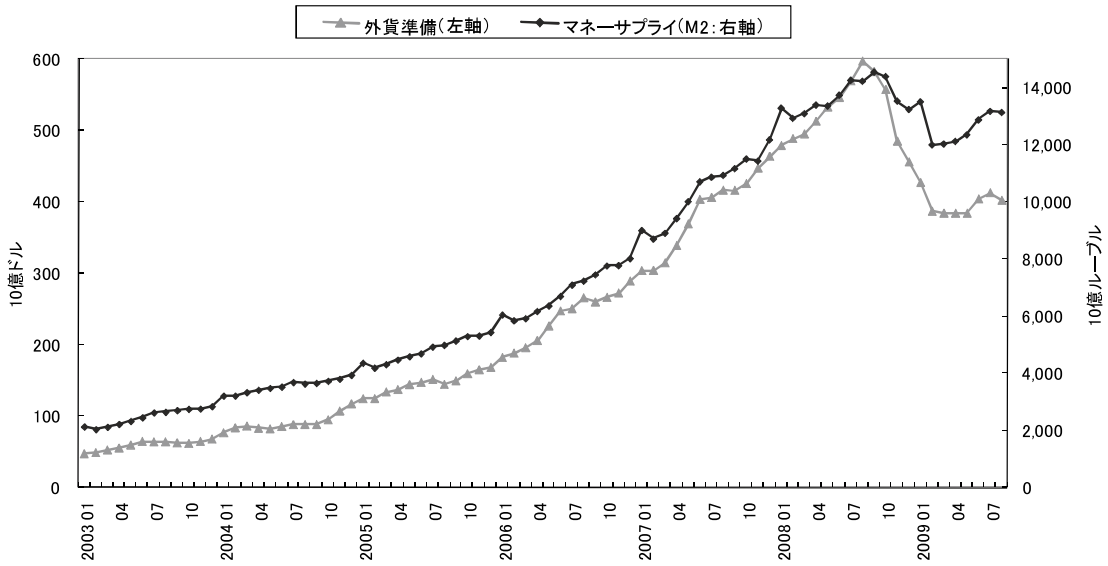
[4] こうした傾向は、2009年第１四半期についても変わっていない。第１四半期には、輸出が実質で対前年同期比14.5％減少したが、同期に天然ガスの輸出量は同58.3％の減少を記録し、これが輸出量の減少のほぼ半分くらいをもたらしたと見られる。鉄鋼（銑鉄、鉄合金、スクラップを除く）の同47.6％の減少も大きく寄与したと考えられる。一方、原油の輸出量の減少は同1.2％に留まっている。

の減少によって引き起こされたというよりは、企業の資金繰りの悪化など、資金面での制約によるところが大きかったのではないかと考えられる（田畑、2009；金野、2009a）。資金繰りの悪化については、その要因として、マネーサプライの増加率の鈍化、外国への資本の流出、そうした状況の下での銀行･企業の外貨選好などが挙げられる。

(1)マネーサプライの減少

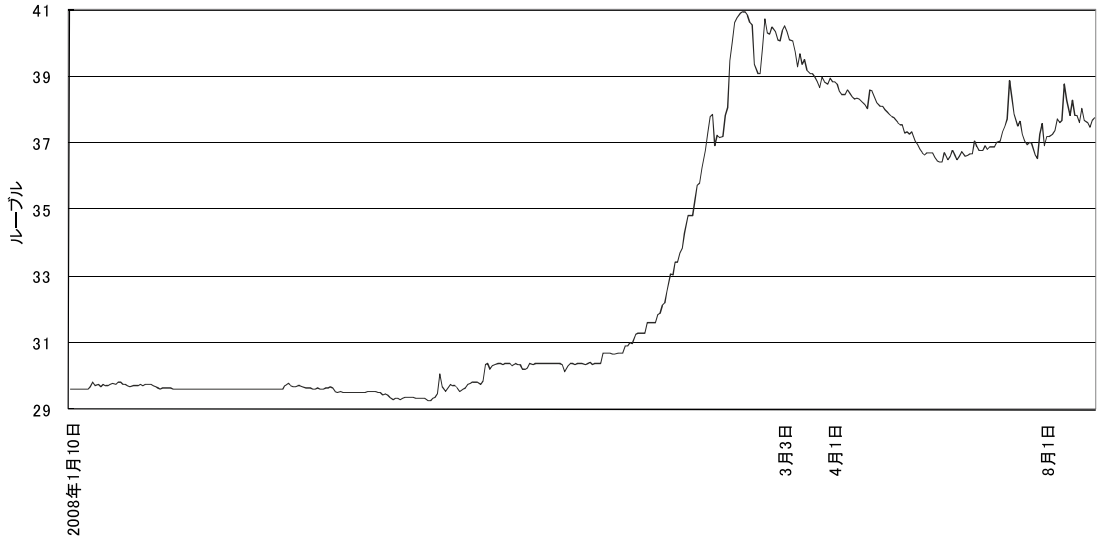
マネーサプライは、図３に示したように、近年、毎年30～50％程度も増加していたが、2008年８月以降、増加率が鈍化あるいは減少するに至った。ロシアのマネーサプライの動態は､外貨準備の動態と極めて強い相関を示していた。すなわち、中央銀行の為替市場におけるドル買い＝ルーブル売りが直接的にマネーサプライを増加させていた。これには、ロシアでは、いわゆる不胎化政策の余地が限られていたことが関係している。2008年７月頃まで、中央銀行は為替市場で強力なドル買い介入を繰り返していたが、その後、ドル売り介入に転じたことが、マネーサプライの動態変化をもたらしている。そこで、次に、為替政策の変化とルーブル・レートの変動について見てみよう[5]。

図３　ロシアの外貨準備とマネーサプライ（M2）の推移



（注）月初データ。
（出所）ロシア中央銀行ウェブサイト。

図４　ルーブル公定レート（対通貨バスケット）の推移



（注）通貨バスケットの構成はドルが55％、ユーロが45％。
（出所）ロシア中央銀行ウェブサイトの対ドル・レートとユーロ・レートからの筆者による計算値。

[5] より詳しくは、田畑（2009）pp. 6-8参照。

ロシアでは、2005年以降、ドルとユーロから成る通貨バスケット（2007年２月以降、ドルが55％、ユーロが45％で構成されている）に対する名目レートをほぼ一定に保つという政策が取られてきた。2007年８月から2008年６月までのこの通貨バスケットに対するレートは29.61～29.91ルーブルとされ、ほぼ固定されていたと言える（図４）。2008年６月から７月にかけては、空前の原油価格の高騰により、為替市場へのドルの流入が増えたために、変動枠が３回にわたって10カペイカずつ双方向に広げられた。その結果、ルーブル・レートが、ルーブル高の方向に若干シフトしたことが図４から分かる。

８～９月以降、為替市場の様相は一変した。原油価格が下がり始めたこともあるが、それ以上に、ルーブルをドルに換える動きが強まったことによるものである。当局は、ドル売りにより上記の変動枠を維持しようとしたが、ドル買いの圧力が強かったため、11月にかけて、この変動枠を10カペイカずつ何回か広げたと見られる。このような政策の結果、外貨準備は９月に254億ドル、10月に722億ドル減少した。これでは対処できないことが明らかになり、11月11日に中央銀行は声明を出し、この変動枠を30カペイカ拡大した。しかし、ドル買い圧力は収まらず、12月にかけてこのような30カペイカの拡大を５～６回繰り返すこととなった（図４）。こうした措置が繰り返されたことは、中央銀行がルーブル減価の継続を容認しており、ルーブルが今後次第に安くなるとの期待をもたせることになり、12月半ばからの急速なルーブル減価を引き起こすこととなった。11～12月の２カ月間で、外貨準備は575億ドル減少した。

ついにこの政策も維持できなくなり、2009年１月22日にイグナチエフ中央銀行総裁が声明を出して、こうした段階的な変動枠の拡大措置を打ち切ると宣言した。その代わりに、通貨バスケットに対するレートの上限を41ルーブルに設定し、これを今後数カ月間は変更しないと述べた。その後、ルーブルはこの上限まで一時的に減価したが、３月以降ルーブル高の方向に推移し、急速なルーブル減価に歯止めがかかった形となっている。

こうした為替政策の結果として、外貨準備は、2008年８月から2009年１月までの半年間に2097億ドル、率にして35.1％減少した。ここまでしてルーブル・レートを維持する必要があったのかという議論もあるし、また、11月以降の段階的な引き下げ措置がいっそうのルーブル減価を引き起こしたという指摘もある。図３で示したように、このような外貨準備の減少とともに、マネーサプライの減少が生じたのである。ここで想起すべきことは、ロシアの場合、マネーサプライ（M2）の対GDP比は、近年のマネーサプライの顕著な増加にもかかわらず、決して高くなく、2007年に31.4％、2008年に32.8％程度であったということである[6]。このようななかで、それまでのマネーサプライの増加傾向が急に止まったために、経済における金回りの逼迫が強く感じられるようになったのであろう。

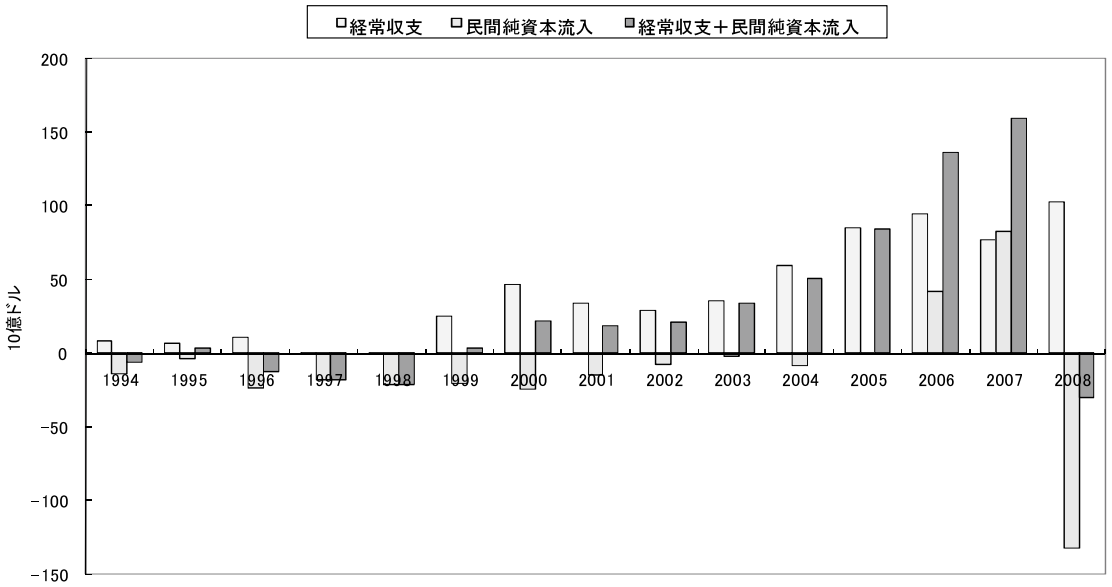
⑵資本の流出

図５には、ロシアの経常収支と民間純資本流入を示した。原油等のエネルギー輸出収入が大きいために、ロシアでは経常収支は基本的に常に黒字基調であったが、とくに、2000年代に入って、経常収支の黒字が大きくなった。一方、民間純資本流入の方は、資本逃避（キャピタル・フライト）が大きく、また、直接投資などの外国投資の流入も少なかったために、ロシアでは赤字基調（流出超過）であった。ところが、2006年と2007年には、ロシアの銀行・企業（表５では、「その他部門」）による外国からの借入が著しく増え、ロシアへの外国投資が増えたために、民間純資本流入がそれぞれ414億ドル、824億ドルという大きさの黒字になった。ロシアでは利子率は決して高くなかったが、後述するように、ルーブルが実質で年に10％以上も高くなったために、ドルで借りて、ルーブルで運用することの利益が大きかったのである。

2008年には、上半期の原油価格の高騰により、経常収支は史上最大の1,024億ドルの黒字となった。一方、民間純資本流入の動態は劇的に変化した。1,328億ドルもの赤字となり、2006年と2007年の２年間に入ってきたものがすべて出て行った勘定となる（図５、表５）。2006～2007年には外国からの資金流入によりルーブルが潤沢に流通していたのに対し、2008年には状況が一変したわけである。四半期ごとのデータを見ると、2008年第４四半期の民間純資本流入の赤字が1,306億ドルであり、2008年の資本流出が、実際にはすべて第４四半期に生じたことが分かる。第４四半期には、原油価格の低落により経常収支の黒字も激減したので、経常収支と民間純資本流入の合計も大幅な赤字となった。これが、ルーブルの大きな引き下げ圧力をもたらしたのである。第４四半期における民間資本流出額（1,305億ドル）は、同期における外貨準備の減少額（1,297億ドル）に照応している。民間純資本流出の内訳を見ると（表５）、

[6] 各月初データの単純平均として、年のマネーサプライの値を求め、その対GDP比を求めた。

図５　ロシアの経常収支と民間純資本流入



（出所）ロシア中央銀行ウェブサイト。

表５　ロシアの経常収支と民間純資本流入

（単位　10億ドル）

	2006	2007	2008	2008 10-12月	2009 1-6月
経常収支＋民間純資本流入	136.1	159.4	▲ 30.4	▲ 121.9	▲ 10.4
経常収支	94.7	77.0	102.4	8.6	17.2
貿易収支	139.3	130.9	179.7	24.7	43.2
輸出	303.6	354.4	471.6	98.0	125.5
輸入	▲ 164.3	▲ 223.5	▲ 291.9	▲ 73.3	▲ 82.2
貿易収支以外の収支	▲ 44.6	▲ 53.9	▲ 77.3	▲ 16.1	▲ 26.0
民間純資本流入	41.4	82.4	▲ 132.8	▲ 130.5	▲ 27.6
資産	▲ 71.4	▲ 119.4	▲ 225.5	▲ 91.7	▲ 19.1
銀行	▲ 23.6	▲ 25.1	▲ 65.1	▲ 27.0	14.5
直接投資	▲ 0.3	▲ 0.7	▲ 1.8	▲ 0.2	…
貸付	▲ 23.0	▲ 21.9	▲ 60.2	▲ 22.8	…
その他	▲ 0.4	▲ 2.5	▲ 3.1	▲ 4.0	…
その他部門	▲ 47.8	▲ 94.3	▲ 160.4	▲ 64.7	▲ 33.6
直接・証券投資	▲ 23.5	▲ 50.7	▲ 53.0	▲ 9.3	▲ 28.3
外貨現金	10.1	15.6	▲ 25.0	▲ 27.0	▲ 0.7
貿易信用	▲ 0.6	▲ 0.9	▲ 8.1	▲ 8.6	4.7
輸出代金・輸入品未受取り・未払い	▲ 19.9	▲ 34.5	▲ 38.8	▲ 7.6	▲ 7.4
その他	▲ 13.8	▲ 23.8	▲ 35.4	▲ 12.2	▲ 2.0
負債	103.4	215.6	105.3	▲ 34.7	▲ 6.5
銀行	51.2	70.9	8.2	▲ 28.6	▲ 28.3
直接投資	2.5	7.2	10.1	2.8	…
借入れ	47.6	51.0	11.4	▲ 24.6	…
その他	1.0	12.7	▲ 13.3	▲ 6.9	…
その他部門	52.2	144.7	97.1	▲ 6.1	21.8
直接投資	27.2	47.9	63.0	9.1	17.3
証券投資	8.6	6.5	▲ 16.0	▲ 14.5	3.3
借入れ	16.8	90.8	49.4	▲ 1.6	1.1
その他	▲ 0.4	▲ 0.5	0.7	0.9	0.0
誤差脱漏	9.5	▲ 13.8	▲ 12.6	▲ 4.0	▲ 2.0

（出所）ロシア中央銀行ウェブサイト。

2008年第４四半期には、銀行・企業による外国からの借入が激減し（銀行では返済がなされている）、ルーブルの外貨への交換が増えた(「外貨現金」のマイナス値が拡大した)ことが分かる。

このような資本流出の影響は、株価の低落に明瞭に現れている。ロシアの代表的な株価指数の１つであるRTS指数で見ると、2008年５月19日に引値として史上最高の2,488となった後、急落し、2009年１月23日には498にまで下がった。ピーク時と比べて、丁度８割下がったことになる。ロシアの株式市場では、石油・ガス企業株のシェアが大きいので、このような株価の動きの背景には、2008年８月以降の原油価格の急落があったと考えられる。

⑶銀行・企業の外貨選好

外国への資本流出やルーブルの減価が生じるなかで、銀行・企業は外貨資産を選好するようになり、そのことが、ルーブルが逼迫する状況をさらに悪化させることとなった。銀行・企業は、外国からの借入の返済に備える必要もあった。ロシアにおいても、他の諸国と同様に、銀行や企業に対する公的資金の注入が行われたが、多くの銀行・企業はこうしたルーブル資金を即座に外貨に換えたと伝えられている。金野（2009a、p. 81）によれば、2008年９月からの４カ月間に政府・中央銀行から銀行部門に対して４兆ルーブル（約1,300億ドル）を超える資金が供給されたが、銀行部門の対外資産が同期に4兆ルーブル近く増加した。結果的には、為替市場における売買を通じて、国の外貨準備の一部が、民間の外貨保有に転換されたことになる。このように、銀行部門への資金供給は、企業への融資、資金繰りの改善にはつながらなかったわけである。そもそも、銀行としては、これまでの企業への貸付がきちんと返済されるという見通しが立たないなかで、新規の貸付を考えるような状況ではなかった。ルーブルの減価が予測されるなかで、銀行・企業のこうした行動は極めて合理的であったとも言えよう。既述のように、2008年11月～2009年１月の通貨政策はこのようなルーブル減価予測をもたらすものであった。

３．今後の経済予測

経済発展省による2009年の経済成長率の予測は、１月以降、より悪い方向に改訂されてきた。すなわち、１月後半に出された予測では、GDPは2.2％の減少とされていたが[7]、４月後半に出された予測では、6.0％の減少とされた。さらに、７月15日に2010～2012年連邦予算策定の基礎として経済発展省が公表した2010～2012年の経済予測（Minekonomrazvitiia, 2009）では、2009年のGDP成長率はマイナス8.5％とされた。

この8.5％の予測の支出項目別増加率・寄与度は、表３のとおりである[8]。同表あるいは図２から、この予測が2009年第１～第２四半期の実績に大きく影響されていること、言い換えると、第１～第２四半期とほぼ同様の傾向が１年間続くと仮定されていることが分かる。より具体的には、GDPの減少率8.5％に対してもっとも大きく寄与するのは、在庫品増加（マイナス5.1％の寄与度）と総固定資本形成（同マイナス4.7％）であり、家計最終消費支出（同マイナス2.8％）がそれに次いでいる。このうち、在庫品増加は、2009年下半期に大幅減少が止まることが想定されている[9]。在庫品増加は、1998年の通貨･金融危機の際には、４四半期連続で大幅減少が記録されたが、今回は、2009年第１四半期から２四半期あるいは３四半期で大幅減少が止まると想定されているようである。投資や消費は、下半期に、減少幅がより大きくなると予測されている。輸出については、下半期にもわずかな改善しかないとされているが、輸入については、かなりの改善があると見なされている。下半期に、内需がより縮小するなかで輸入が伸びるというのは、若干辻褄が合わない感がある。

2010年については、プラス成長が予測されているが、1.0％という低い予測となっている。成長をもたらすのは、主として、在庫品増加（3.2％の寄与度）と家計最終消費支出（同1.4％）であり、政府最終消費支出の減少（同マイナス2.8％）が大きなマイナス要因とされている。輸出入については、輸入の増加率が輸出の増加率を上回るという想定である。この結果、2010年の寄与度を図示すると（図２）、前例のない、極めて奇妙な様相となっている。

2009年については、３月以降に出されたIMFなど国際機関の予測も概ねマイナス5～10％程度で、低い経済予測と

---

[7] これについては、３月25日付で経済発展省のサイトに詳しい説明が掲載された。

[8] 寄与度算定の基礎となる支出項目別増加率のデータは、2010～2012年の経済予測（Minekonomrazvitiia, 2009）には掲載されておらず、同表の2009～2010年の予測値は、ロシア経済発展省マクロ経済予測総局のゲンナジー・クラノフ局長からの聞き取り（2009年８月６日）に基づく計算値である。

[9] 在庫品増加は、増加から減少に転じたり、減少から増加に転じたりするとき、増加率がマイナスになり、解釈が困難になるので、表３の増加率の一部の欄には数値を記入していない。なお、在庫品増加の大幅減少が止まるということは、在庫の増加が始まることを必ずしも意味するのではなく、少なくとも在庫の減少の鈍化が起きることを意味する。

なっている。現在のところ、こうした予測が大勢を占めていると言える。これに対して、トロイカ・ダイアログ（ロシア大手投資会社）のエフゲニー・ガブリレンコフ主任研究員は、経済発展省の予測は、第１四半期の実績の機械的な外挿であり、政府の経済危機対策の効果を何ら反映していない点などを批判している（Vedomosti, April 27, 2009）[10]。筆者は、ガブリレンコフの考え方に与するものであり、以下で説明するような経済の回復状況などを考慮すると、今年の成長率は悪くてもマイナス5％程度ではないかと考える。

４．経済の回復状況

⑴原油価格の回復

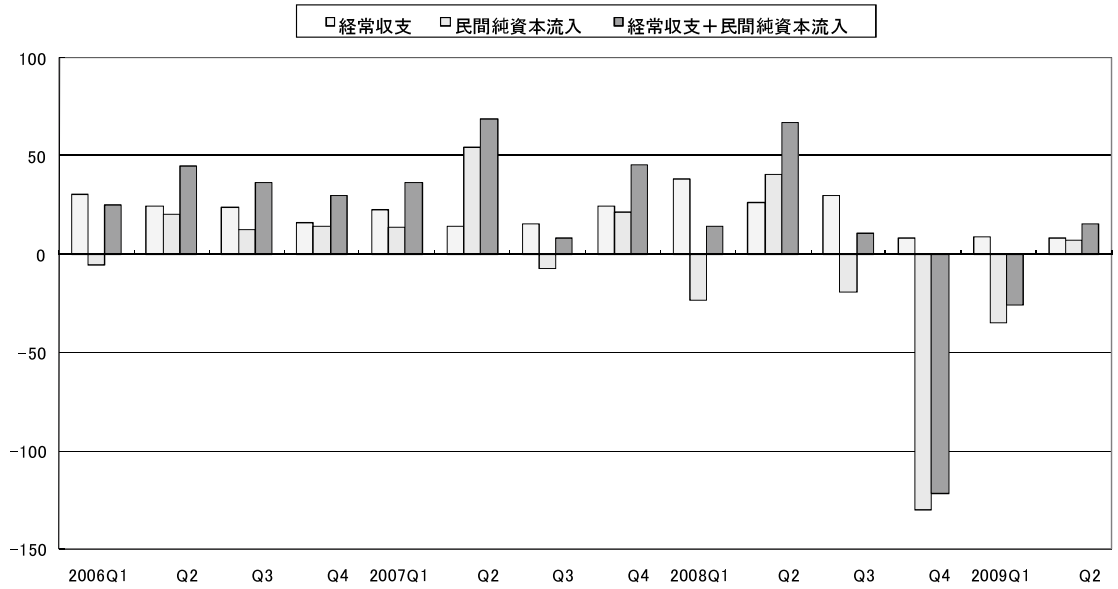
既述のように、2000年代のロシア経済の高成長は、原油価格の高騰によってもたらされた。その原油価格は、2009年３月以降、明らかに回復基調にある。これは、株価が３月以降回復傾向にある理由の１つとなっている。2009年１～７月の原油の平均価格は１バレル＝53.5ドルであり、ほぼ2005年の水準に等しい。ロシアの経済成長率と原油価格の水準との間に単純な相関関係を見出すのは困難であるが（図６）、高い経済成長を記録した2005年と同じだけの輸出外貨収入を、2009年においてロシアが得ることは、考慮に入れておく必要がある。ロシア通貨・金融危機の生じた1998年とはこの点だけでも状況が大きく異なる。筆者が消費と投資について経済発展省の予測ほどは下半期に減少しないと考える根拠の１つである。

原油価格の回復とともにロシアの輸出額も回復するが、輸出量についても、既述のような昨年後半から今年初めにかけての天然ガスの輸出量減少をもたらした要因が消滅し、逆に、備蓄向けを含めた輸出が増加すると予測されるので、急速に回復する可能性がある。経済発展省の予測では、2009年の輸出は8.3％の減少、寄与度はマイナス2.6％とされているが（表３）、減少率が５％程度に留まり、寄与度もマイナス1.6％程度に留まる可能性は十分にあると考えられる。

⑵ルーブル減価と資本流出の終結

１月22日に通貨バスケットに対して41ルーブルの上限を定めた措置が功を奏して、とくに３月以降、ルーブル・レートの低下に歯止めがかかった（図４）。しかも、当局はドル売り介入をほとんどしておらず、２月以降、外貨準備はほとんど減少していない（図３）。昨年８月以降外貨準備は大幅に減少したが、それでも2009年８月１日現在4,020億ドルで、依然として世界第３位の水準にある。こうしたルーブル・レートの一定の安定化と同時に、第２四半期には民間純資本流入が黒字となり、資本流出も一段落した形となった（図５）。

図６　ロシアの経常収支と民間純資本流入（四半期データ）



（出所）ロシア中央銀行ウェブサイト。

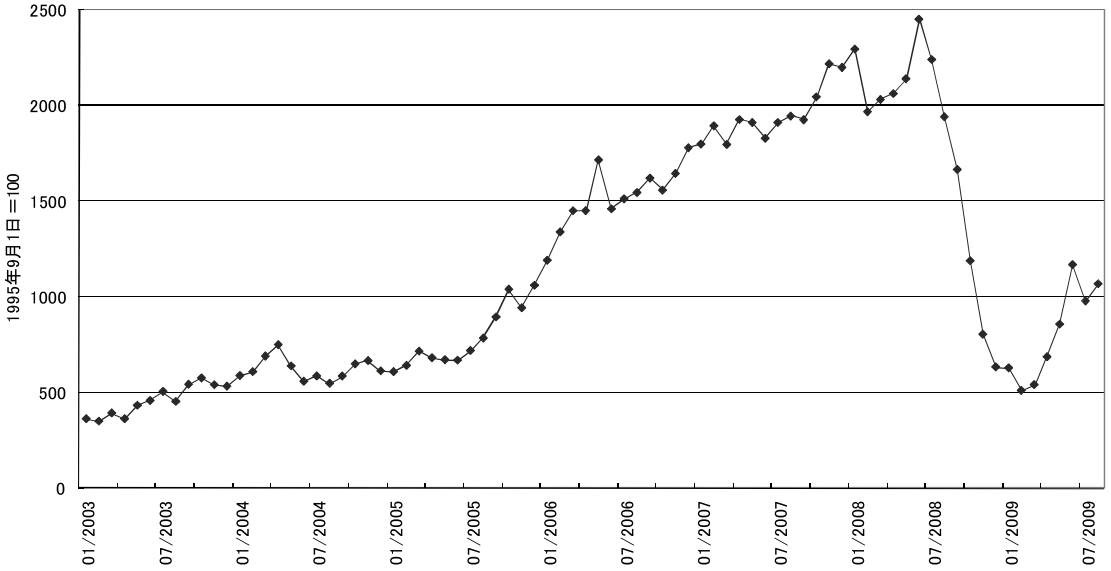
[10] この批判は、４月後半に出されたGDPの6.0％減少という経済発展省の予測に対するものであるが、８月６日のモスクワでの聞き取りの際にも、同氏は同様の考えを述べ、今年の予測についてマイナス５％程度との見方を示した。こうした見方は、トロイカ・ダイアログのRussia Economic Monthly各号にも示されている。

ルーブルは、2008年７月末から2009年１月末までの半年間に対通貨バスケットに対して、29.3ルーブルから40.0ルーブルへと26.7％減価した。対ドル・レートは、23.4ルーブルから35.4ルーブルへと33.8％、対ユーロ・レートは、36.5ルーブルから45.7ルーブルへと20.0％切り下がった。この期間のロシアの物価上昇率（CPI）が6.1％なので、これでデフレートするならば、この期間におけるルーブルの実質減価率は、対通貨バスケットが22.2％、対ドルが29.7％、対ユーロが15.1％である。

ロシアでは、これまでオランダ病が問題となってきた（田畑、2008a）。石油・ガスなどの輸出収入が大きいために、ルーブルの実質レートが高くなる傾向にあり、製造業製品の競争力が失われてきたのである。1990年代初期以降の実質レートの推移は図7のとおりである。1998年までルーブル高が続いたが、同年のロシア通貨･金融危機により、ルーブルが実質で50％減価した。しかし、その後、原油価格の高騰を背景に再びルーブルの実質レートが上昇した。2000年以降の対ドル・レートを見ると、名目では１ドル＝25～30ルーブル程度で推移する一方で、インフレ率が年間10％を超えていたので、実質では年に10％以上、ルーブルが強くなっていたのである。高いインフレ率の継続はマネーサプライの著しい増加によるところが大きく、マネーサプライの増加は、既述のように、中央銀行の為替市場でのドル買いによるところが大きかった。すなわち、当局はルーブル高とインフレのジレンマに悩まされていたわけである。

これらを考慮に入れると、ロシアではルーブル安は決して悪いことではないことが分かる。実際、1998年にルーブルが実質で50％程度切り下がった後、1999年の経済成長をもたらした要因の１つは、輸入代替であった。これまで輸入品に圧倒されていた一部の製造業部門の生産が伸びたのである。しかし、その後のルーブル高により、この効果は長続きしなかった。したがって、今回のルーブル安も同じような傾向を少なくとも一時的に生む可能性を持っている。実際、2009年第１四半期には、輸入が実質で34.3％減少し、輸出の減少率を上回ったために、純輸出がプラスと

図７　ロシアの株価指数（RTS）の推移（月初データ）



（出所）RTSウェブサイト。

表６　ロシア連邦予算案と実績

（単位　10億ルーブル）

	2008		2009		
	年間実績	1-5月実績	当初予算	修正予算	1-5月実績
歳入	9,274.1	3,700.2	10,927.1	6,713.8	2,641.4
石油・ガス外収入	5,128.2	1,983.4	6,234.6	4,656.6	1,787.9
石油・ガス収入	4,145.9	1,716.8	4,692.5	2,057.2	853.5
歳出	7,566.6	2,388.5	9,024.7	9,692.2	3,118.0
黒字	1,707.5	1,311.6	1,902.5	▲ 2,978.4	▲ 476.5

（出所）SEP, 2008, No. 6; 2009, Nos. 1, 6; 2009～2011年連邦予算法・同改訂法。

なり、成長のプラス要因となった（表３）。経済発展省の予測では、この傾向は2009年の年間を通じて続くとされている。ただし、今回のルーブルの実質減価率は、上記のように、大体25％程度、1998年と比べると半分程度に留まっている。

2009年下半期の輸入の予測については、こうしたルーブル・レートの変化を考慮に入れた場合、大変困難である。経済危機以前と比べてルーブル・レートが下がっているので、経済発展省の予測のように、輸入の方が輸出よりも下半期に大きく回復するとはなかなか想定できない。経済発展省は、2010年についても、輸入の増加率が輸出の増加率を上回ると予測している。他方で、1998年においても輸入の実質減少率は17.4％であり、30％を超えるような実質での減少も予測しづらいところがある。

⑶連邦予算歳出の拡大

ロシア政府は、2008年後半以降、様々な経済危機対策を取ってきたが[11]、大幅な歳出拡大と財政赤字の拡大で特徴付けられる2009年連邦予算の採択が、その集大成とも言えるものである[12]。ロシアでは、2008年から3年間の連邦予算が策定されるようになり、2009年連邦予算は、2009～2011年連邦予算法として2008年11月24日に採択された。しかし、この予算の原案は2008年夏に作成されており、原油価格について1バレル＝95ドルの想定に基づくものであった。表６では「当初予算」として示した。このような想定となっていたため、11月の採択直後から修正は必至とされたが、原油価格や経済成長率の見通しが立たないこともあって、実際に修正が行われたのは、2009年４月28日付連邦法第76号によってであった。これに先立ち、2009年４月９日付連邦法第58号により、予算法典などの改訂がなされ、2009年については３カ年予算を止めて単年度予算とすること、2009～2012年は特別体制として、石油・ガス収入の運用や財政赤字の大きさについて、例外措置を講じること、とくに、予備基金による財政赤字補填を柔軟に認めることなどが決められた[13]。

修正された2009年連邦予算では、原油価格が１バレル＝41ドルと想定された。そのため、当初予算と比べて、歳入は、石油・ガス収入を中心に、38.6％減少した（表６）。一方、経済危機対策などを盛り込んだため、歳出は当初予算と比べて7.4％増やされた[14]。この結果、連邦予算の赤字はほぼ3兆ルーブルに達することとなった。対GDP比で見ると、歳入は2008年の22.3％から2009年の16.6％へと5.7％ポイントの減少となっている。歳出は同じく18.2％から24.0％へと5.8％ポイントの増加である。2008年には対GDP比4.1％の財政黒字であったが、2009年には同7.4％の赤字になるという大きな変化となった。この財政赤字は、基本的にすべて予備基金によって賄われるとされている。2008年末現在の予備基金の残高は４兆276億ルーブルであり、予算で想定されている財政赤字額（２兆9,784億ルーブル）の1.35

表７　ロシアの安定化基金、予備基金、国民福祉基金（各期末）

	2004	2005	2006	2007	2008	2009年7月
	（単位　10億ドル）					
安定化基金	18.8	43.0	89.1	156.8	…	…
予備基金	…	…	…	…	137.1	88.5
国民福祉基金	…	…	…	…	88.0	90.0
合計	18.8	43.0	89.1	156.8	225.1	178.6
	（単位　10億ルーブル）					
安定化基金	522.3	1,237.0	2,346.9	3,849.1	…	…
予備基金	…	…	…	…	4,027.6	2,811.3
国民福祉基金	…	…	…	…	2,584.5	2,858.7
合計	522.3	1,237.0	2,346.9	3,849.1	6,612.1	5,670.0

（出所）ロシア財務省ウェブサイトより作成。

[11] 詳しくは、塩原（2009a; 2009b）、金野（2009a）参照。
[12] ロシアの国家予算は、連邦予算、地域（連邦構成体）予算、予算外基金（年金基金など）から成るが、以下では、連邦予算のみを扱う。
[13] 石油・ガス収入とは、原油・天然ガスの採掘税と原油・天然ガス・石油製品の輸出関税の合計である。この収入が、連邦予算、予備基金、国民福祉基金に繰り入れられる。このうち、連邦予算繰り入れ分は、石油・ガス移転と呼ばれる。予備基金は、原油価格が下落するなどして、石油・ガス移転額が十分でないときに使われる。国民福祉基金は、年金の補助や経済発展のための制度化に使われる。こうした制度は、2004年に創設された安定化基金の制度を受け継いで、2008年から導入された。詳しくは、田畑（2008a; 2008b; 2009）参照。
[14] 2009年連邦予算について、詳しくは金野（2009b）参照。

倍である。

表６には、１～５月の連邦予算の実績も示した。それによると、歳入は、前年同期と比べて、石油・ガス収入が半減するなど、28.6％減少するなかで、歳出は同30.5％もの大幅増加となっている。なお、１～５月の歳出は、年間の歳出の32.2％に留まっており、６月以降、さらに歳出が拡大していくことになる。以上のような2009年連邦予算の修正による政府支出の大幅な増加は、常識的に考えるならば、消費と投資の増加に一定の影響を与えるはずであるが、既述のように、経済発展省の予測ではそうなっておらず、同予測が悲観的であると筆者が考える理由の１つである。

１～５月の連邦予算の財政赤字は4,765億ルーブルとなっている。この赤字補填はすべて予備基金によってなされた模様で、１～５月に予備基金は、8,997億ルーブル（361億ドル）減少した。１～７月で見ると（表７）、予備基金はドル換算で486億ドル（35.4％）、ルーブル換算では１兆2,163億ルーブル（30.2％）の減少となっている。2004年の安定化基金の創設に始まる石油・ガス税収の備蓄が、所期の目的を果たし始めたとも言える。

おわりに

世界金融危機のロシア経済への影響が大方の予想よりも大きかった理由、あるいは、筆者自身を含めて、その影響を過小評価していた理由としては、次の２点を挙げられよう。第１に、ロシアの金融セクター、とくに銀行部門が脆弱であり、ロシアの経済発展のなかで果たす役割が小さいことは従来から指摘されていたことであるが、そのことが世界金融危機のロシアへの影響を小さくする方向で作用するのではなく、資金が回らず、資金繰りを急速に悪化させるという形で、生産部門にも大きな影響を与えるという方向で作用したことである。2006～2007年においては、外国から借り入れられた資金によってロシア経済は資金が潤沢となり、銀行部門が脆弱であるという問題が解決されたかのような様相を呈していたわけであるが、実際には、生産部門にきちんとした融資のできるような銀行はそれほど育っておらず、企業が融資をきちんと返済するという金融秩序とも言うべきものも確立されていなかったことが、2008年下半期以降、露呈してしまったと言えよう。

第２に、統計の観点からすると、ロシアではこのような経済危機の際に在庫品増加がGDP成長に対して極めて大きな影響を及ぼすことが看過されていた。在庫変動が景気の後退あるいは回復の局面で、GDPの動向に無視できない影響を及ぼすことは日本などでもよく見られることである。ロシアの特異性は、その寄与度が極めて大きいことにあり、たとえば、1998年の在庫品増加のGDP成長に対する寄与度はマイナス7.8％、2000年には逆にプラス5.6％という大きさであった（図２）。既述のように、2009年の第１四半期、第２四半期における寄与度も、それぞれ、8.5％、13.9％という大きさであった（表３）。在庫品増加は、こうしたGDPの減少あるいはその回復の局面で、GDP成長率の最大の規定要因になっているのである。このようなロシアの特異性は、銀行部門が弱いために、企業が資金繰りに困ると、まずは在庫を大幅に減少せざるを得ないということに関係するのかもしれない。このような在庫品増加の動態に関する検討は今後の課題の１つである。

以上の２点は今後十分に考慮しなくてはならないとしても、ロシア経済の原油価格への依存の大きさと原油価格の回復傾向、輸入代替の可能性、外資系企業の増大（少なくとも、ロシア史上最大の大きさになっていること）などを想起するならば、2009～2010年について、経済発展省の予測よりは楽観的に考えてもよいように思われる。

参考文献

金野雄五（2009a）「金融危機下のロシア経済」みずほ総合研究所『みずほ総研論集』第II号［http:// www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/argument/］。

――――（2009b）「最近のロシア経済情勢：2009年連邦予算と経済危機対策」『みずほ欧州インサイト』６月25日号［http://www.mizuho-ri.co.jp/research/economics/euro-insight/］。

塩原俊彦（2009a）「ロシアの金融・経済危機」『三田評論』No. 1120, ２月号。

――――（2009b）「ロシア経済危機への国家支援策：ミクロレベルの分析」法政大学イノベーション・マネジメント研究センター『ワーキングペーパーシリーズ』No. 65（７月15日）。

田畑伸一郎（2008a）編著『石油・ガスとロシア経済』北海道大学出版会。

――――（2008b）「プーチン政権下のロシア経済成長―油価高騰に基づく成長メカニズムとその行方―」『ロシアNIS調査月報』５月号, pp. 13-29.

――――（2008c）「『新冷戦』・世界株安下のロシア経済」（経済教室）『日本経済新聞』10月3日。

――――（2009）「岐路に立つロシア経済― マクロ経済と財政の視点から」『ロシアNIS調査月報』５月号, pp. 1-17.

Kratkosrochnye ekonomicheskie pokazateli Rossiiskoi Federatsii（ロシア連邦短期経済指標）, Moscow:

Rosstat（ロシア統計局），月刊。

Minekonomrazvitiia（経済発展省）(2009) Stsenarnye usloviia funktsionirovaniia ekonomiki Rossiiskoi Federastsii, osnovnye parametry prognoza sotsial'no-ekonomicheskogo razvitiia Rossiiskoi Federastsii na 2010 god i planovyi period 2011 i 2012 godov（ロシア連邦経済の機能のシナリオ条件，2010年と2011～2012年計画期におけるロシア連邦社会・経済発展予測の主要パラメータ）[http://www.economy.gov.ru/].（7月15日発表）

RSE（Rossiiskii statisticheskii ezhegodnik，ロシア統計年鑑），Moscow: Rosstat，各年版。

SEP（Sotsial'no-ekonomicheskoe polozhenie Rossii，ロシアの社会・経済状況），Moscow: Rosstat，月刊。

ロシア経済発展省ウェブサイト：http://www.economy.gov.ru/

ロシア財務省ウェブサイト：http://www.minfin.ru/ru/

ロシア中央銀行ウェブサイト：http://www.cbr.ru/

ロシア統計局ウェブサイト：http://www.gks.ru/

IMFウェブサイト：http://www.imf.org/external/data.htm

RTSウェブサイト：http://www.rts.ru/ru/index/rtsi

The Russian Economy amid the Global Financial Crisis

TABATA, Shinichiro
Professor, Slavic Research Center, Hokkaido University

This piece analyzes, from the macroeconomic perspective, the influence on the Russian economy of the global financial crisis which emerged in September 2008. Since the fourth quarter of 2008, the growth rate of Russian GDP has declined significantly. In the first half of 2009, GDP decreased by 10.4 percent in comparison with the corresponding period of 2008. In particular, in some branches of manufacturing industry, such as the manufacturing of machinery, decreases in production exceeded 30 percent in the first half of 2009.

These production decreases were caused mainly by the liquidity problems of enterprises, which were, in turn, brought about by decreases in the money supply, increases in the capital outflow abroad, and the increasing preference of banks and enterprises for foreign currencies. The money supply, which increased by 30-50 percent annually in the preceding years, stopped increasing and began to decrease in the latter half of 2008. This was due to the intervention of the Central Bank of the Russian Federation in exchange markets. When the ruble began to depreciate suddenly in September 2008, the Central Bank defended the ruble by selling its foreign reserves, causing a decrease in the money supply. The huge outflow of private capital from Russia, which erupted in the fourth quarter of 2008, implied a complete change from the situation in 2006-2007, when a great amount of foreign capital entered the Russian economy in the form of bank loans and foreign investment, increasing the circulation of the ruble. The Russian government, in the same way as the governments of other countries, injected considerable amounts of public money into the banks in order to promote the financing of the real sector. The banks, however, converted the money into foreign currencies and assets with the expectation of a further depreciation of the ruble.

In July 2009, the Ministry for Economic Development of the Russian Federation revised downwards its economic forecast for 2009, according to which Russian GDP is to decrease by 8.5 percent in 2009. This revision seems to have been made taking into consideration the bad GDP performance of the first half of 2009, caused by a sharp decline in inventories, and the continuing shortage of liquidity. Good news for the Russian economy is that: in March 2009 oil prices began to increase; the depreciation of the ruble and the decrease in foreign reserves subsequently ceased; and in the second quarter of 2009, the net inflow of private capital became positive. Moreover, the federal budget for 2009 was revised in April with considerable increases in expenditure. This good news, together with the possibility of import substitution due to the depreciation of the ruble, seems to suggest that the Russian economy would fare somewhat better in 2009 than was anticipated in the forecast of the Ministry for Economic Development.

特集：吉林省経済と図們江地域開発の進展（２）
特集にあたって

ERINA 調査研究部研究員　朱永浩

図們江地域開発国際協力プロジェクトに積極的に参画している中国吉林省は、経済高成長を続けており、2003年から６年連続の二桁成長を実現した。世界同時不況の影響で2009年1～3月期の域内総生産の前年同期比成長率は9.1％と一桁成長に減速したが、上半期の成長率は同11.7％増となり、経済回復の兆しをみせている。今後、持続的発展が可能な経済成長を目指す同省にとって、隣接する北東アジアとの経済連携を強化していくことが不可欠であろう。

本誌第88号の特集では、「北東アジアとの連携」と「地域開発と環境保全」という２つの視点から、吉林省経済と図們江地域開発の進展に関する実態分析を行った。今号は第88号に続き中国吉林省に焦点を当てた特集第２弾である。特集の内容は、「カネ（対内投資）、ヒト（海外労働力派遣事業）、モノ（ビジネス交流）の流れ」、「地域政策における基本構想の策定」という側面から吉林省経済を解説する４つの論文によって構成されている。

最初の廉論文「中国吉林省における外国直接投資導入の実態分析」は、吉林省の外資受入の現状をサーベイし、投資産業分野・地域分布・投資方式の特徴を詳細に分析している。最後に、今後の対内投資拡大に向けて「北東アジア諸国による投資の促進」などの提言を行っている。

続く王論文「中国吉林省における労働力の海外派遣事業」は、吉林省の労働者海外派遣の現状と特徴を明らかにした上で、派遣元企業と受入側（日本、韓国、ロシアなど）の課題及び今後の展望について分析を行っている。

三番目の穆論文「日中間における地方経済の連携の可能性－新潟県と延辺朝鮮族自治州のビジネス交流事例」は、新潟県と吉林省延辺朝鮮族自治州の具体的な取り組み事例をもとにビジネスマッチングに関する分析を行い、日中企業間連携の可能性及び克服すべき課題について論じている。

最後の常論文「中国東北三省における優先開発区の現状と課題－吉林省の事例を中心に」は、吉林省の事例を中心に中国地域政策の一環として推進されている「優先開発区」について、その取り組みと目標を詳しく分析している。最後に、今後の理論的・政策的な諸課題に対しても言及している。

以上の各論考を通して、内陸省・吉林省の対外開放と地域政策をめぐる具体的な取り組みと今後の可能性についてさらに理解を深め、本特集が日本と吉林省の経済交流の一助となれば、これ以上の喜びはない。

Special Feature: Developments in the Economy of Jilin Province and in the Development of the Tumen River Area (2) On the Special Feature

ZHU, Yonghao
Researcher, Research Division, ERINA

China's Jilin Province, which has been actively participating in international cooperation projects on the development of the Tumen River area, has continued high economic growth, and from 2003 has realized double-digit growth for six years in a row. Under the influence of the simultaneous global slowdown, the growth rate for overall production within the region for the period of January to March 2009 slowed to single-digit growth of 9.1% on the same period for the previous year, but the growth rate for the first half of the year was an increase of 11.7% on the same period in the previous year, and it is showing signs of economic recovery. In the future, for this province which is aiming for economic growth in which sustainable development is possible, the continued strengthening of economic coordination with neighboring Northeast Asia will be vital.

In the special feature of Volume 88 of this report, analysis pertaining to the evolution of the economy of Jilin Province and of the development of the Tumen River area was carried out, from the two viewpoints of "coordination with Northeast Asia" and "regional development and environmental protection". This volume, continuing on from Volume 88, is the second special feature to have focused on China's Jilin Province. The content of the special feature is made up of four papers which expound on the economy of Jilin Province from the aspects of "the flow of money (investment into the region), people (the project to dispatch labor abroad) and goods (business exchange)" and "the formulation of a basic concept in regional policy".

In the first paper, "An Analysis of the Current Status of the Introduction of Foreign Direct Investment in China's Jilin Province", Lian Xiaomei has surveyed the current situation of the acceptance of foreign capital in Jilin Province, and has analyzed in detail the characteristics of the investment industry sector, geographical distribution, and investment methods. Lastly, she has made recommendations, including "promotion of investment from the countries of Northeast Asia", toward the expansion of inward investment in the future.

In the following paper, "The Project of Dispatching Labor Overseas in China's Jilin Province", Wang Yanjun, in addition to clarifying the current situation and characteristics of Jilin Province's dispatch of labor abroad, has carried out an analysis of the challenges and future prospects for the source companies of dispatched labor and the receiving side (Japan, the ROK, and Russia, etc.).

In the third paper, "The Potential for Regional Economic Coordination between China and Japan: The case example of business exchange between Niigata Prefecture and Yanbian Korean Autonomous Prefecture", Mu Yaoqian has carried out analysis pertaining to business matching based on the case example of the concrete efforts of Niigata Prefecture and Yanbian Korean Autonomous Prefecture in Jilin Province, and has discussed the potential for coordination between Chinese and Japanese firms and the challenges to overcome.

In the last paper, "The Current Status of and Challenges for the Priority Development Zones in the Three Northeastern Provinces of China: Taking Jilin Province as an example", Chang Yan has carried out detailed analysis of the efforts and objectives regarding the "priority development zone" being promoted as a part of China's regional policy, centered on the example of Jilin Province. Lastly she has made reference to the various theoretical and political challenges in the future.

It would give me the utmost pleasure if this special feature is of some help to the economic exchange between Japan and Jilin Province, further deepening, via the discussion in each of the above papers, the understanding concerning the concrete efforts and future possibilities surrounding the opening up to the outside world and the regional policy of the inland provinces and Jilin Province.

[Translated by ERINA]

中国吉林省における外国直接投資の実態分析

吉林大学東北アジア研究院副教授　廉暁梅

１．はじめに

外国直接投資（FDI）受け入れの急拡大は、中国経済の高成長をもたらした大きな要因である。中国各省･直轄市･自治区における経済成長の格差は、多くの場合、FDIの格差によって解説できる。吉林省は中国東北部に位置する内陸省であり、対外開放の度合いは東部沿海部に比べて比較的遅れており、外国からの直接投資受け入れの規模も小さい。

1984年、吉林省は初めて外資を導入した。それ以来20数年間、とりわけ2003年10月に「東北地区等旧工業基地振興戦略の実施に関する若干の意見」が公表されてから、吉林省への直接投資が飛躍的に増えている。2007年12月までに、吉林省への直接投資累計契約件数は2,734件で、累計投資額（実行ベース）は68億2,228万ドルとなった。

本稿では、直接投資受け入れ規模の変化や、投資産業分野・地域分布の特徴、今後の課題など、吉林省への直接投資の基本状況を分析することにしたい。

２．吉林省における直接投資受け入れ規模の変化

吉林省では、初めて外資導入が決まった1984年から現在に至るまでのプロセスを４段階に分けることができる（図１）。

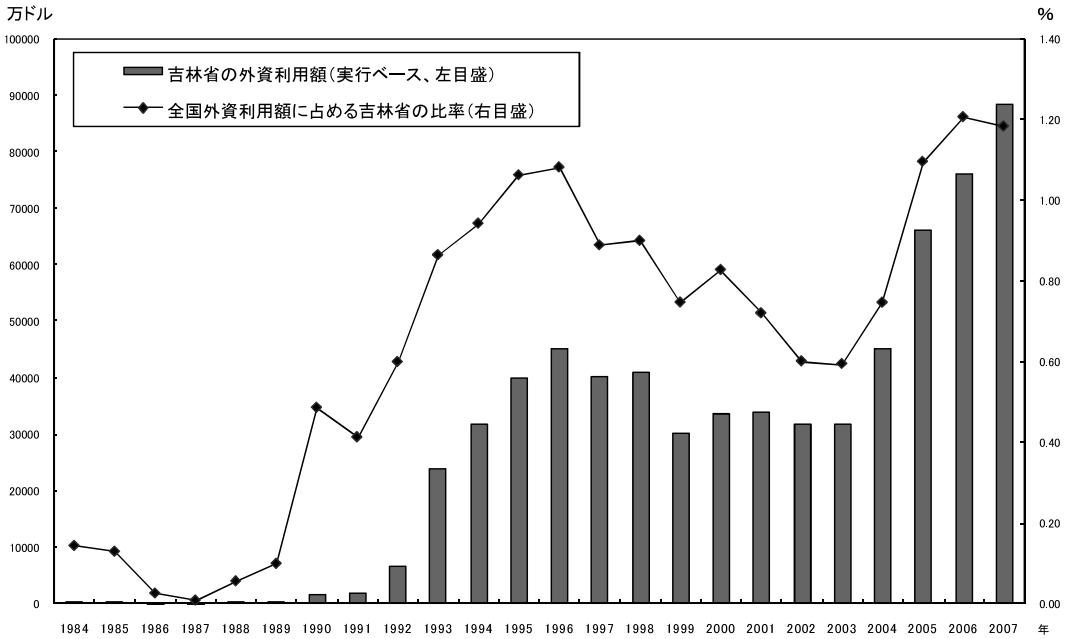
２．１．初期段階（1984～1991年）

1979年に『中華人民共和国中外合資経営企業法』、1986年に『外商投資の奨励に関する規定』が公布され、中国の外国直接投資誘致の法的根拠となった。しかし、改革・開放初期、インフラ施設の未整備や、改革・開放政策の見通しに対する外資の懐疑的な見方などの問題から、外資受け入れの規模は小さく、伸び率も緩やかであった。1991年には、中国の外資受入契約件数が１万2,978件、投資額（実行ベース）が43.66億ドルとなった。

中国全体の状況に比べると、この時期の吉林省の外資誘致は遅れており、1984年に初めて外資誘致に成功した。その後、吉林省の外資導入件数・額が次第に増えるようになった。吉林省の外資受入件数（契約ベース）は、1984年の８件から1991年には122件に増加し、契約ベースの投資額は1984年の531万ドルから1991年に1億8,000万ドルとなり、実行ベースの投資額は1984年の203万ドルから1991年の1,802万ドルへと拡大した。

この時期、吉林省の外資導入額（契約ベース、実行ベースとも）の伸び率は全国平均値より高かったが、1984年の吉林省の外資導入額（実行ベース）が中国全体に占める比率は0.14％しかなく、1987年（同0.01％）も、1991年（同0.41％）も低水準にとどまった。

図１　吉林省の外資利用額（実行ベース）と全国に占める比率（1984～2007年）



（出所）『中国統計年鑑』1985～2008年版、『吉林統計年鑑』1985～2008年版より作成。

２．２．高度成長段階（1992～1996年）

1992年以降の中国の外資導入策は明らかに改善された。その要因として、次の３点が挙げられよう。第一に、1992年の鄧小平の「南巡談話」により、対外開放の範囲と領域が拡大し、中国は全面的な改革･開放という局面に入った。第二に、中国の外資受入政策に重大な調整が行われ、対外借款に代わって海外からの直接投資が外資導入の主なルートとなった。第三に、「市場と引き換えに外資による技術移転を積極的に推進しよう」という戦略が提起された。

この時期には、中国外資導入の規模が急拡大し、1991年には直接投資受入件数が１万2,978件であったが、1996年には２万4,556件となった。投資額（実行ベース）を見ると、1991年の43.66億ドルから1996年の417.26億ドルへと拡大した。

1992～1996年には、吉林省の外資導入額も全国的な傾向と同様、飛躍的に伸びた。1991年における吉林省の外資導入件数（契約ベース）は122件だったが、1996年には407件に増え、年平均伸び率は27.25％であった。外資導入額（契約ベース）は、1991年の１億8,000万ドルから1996年の６億5,420万ドルに増え、年平均伸び率は29.45％であった。そして、実行ベースの外資導入額は1991年の1,802万ドルから1996年には４億5,155万ドルに拡大し、年平均伸び率は90.45％であった。

小規模投資の初期段階に比べ、高度成長段階の吉林省の外資導入は急成長を遂げた。しかし、吉林省の外資受入額が中国全体に占める比率が低い状況は変わっておらず、高度成長段階の最高値を記録した1996年においても僅か1.08％であった。

２．３．停滞段階（1997～2003年）

1997年のアジア金融危機は、東アジアの貿易と投資に大きな打撃を与えた。この国際環境の変化を背景に、中国の外資導入額は減少した。他方､内需拡大策の実施によって、中国経済は1999年から回復し、アジア金融危機の影響が次第に薄れていった｡その後､中国の外資導入は回復に向かった。とりわけ、2001年に中国は念願のWTO加盟を実現し、外資導入の規模拡大を促した。

1997～1999年の中国の外資導入件数（契約ベース）を見ると、1996年の２万4,556件から1999年の１万6,918件へと31.1％も減少した。外資導入額（契約ベース）は1996年の732.76億ドルから1999年の412.23億ドルへと43.74％減少した。実行ベースの投資額を見ても、1996年の417.26億ドルから1999年は403.19億ドルに下がった。

2000～2003年の中国の外資導入件数（契約ベース）を見ると、1999年の１万6,918件から2003年には４万1,081件に増え、年平均伸び率は24.83％であった。投資額（契約ベース）は1999年の412.23億ドルから2003年の1,150.69億ドルに増え、年平均伸び率は29.26％であった。実行ベースの投資額は1999年の403.19億ドルから2003年の535.05億ドルへと32.7％増えた。

この時期の吉林省の外資導入も全国的なトレンドと同様に停滞状態が数年間続いた。1997～1999年の吉林省の外資導入件数（契約ベース）を見ると、1996年の407件から1999年の355件へ減少した。外資導入額（契約ベース）は1996年の６億5,420万ドルから1999年の４億5,049万ドルへと減少し、年平均伸び率では11.69％減となった。実行ベースの投資額を見ると、1996年の４億5,155万ドルから1999年の３億,120万ドルへ減少した。ここで留意すべき点は、停滞段階にも関わらず、1998年には82.59％という史上最高の投資実行率（実行額／契約額）を記録した。

2000～2003年には、中国のFDI拡大と対照的に吉林省のFDI導入額はむしろ減少した。吉林省のFDI契約は、1999年の355件から2003年の340件へ減少した（4.23％減）。契約ベースの投資額は1999年の4億5,049万ドルから2003年の７億2,591万ドルに拡大した（61.14％増）。実行ベースの投資額は1999年の３億120万ドルから2003年の３億1,808万ドルに増えた（5.6％増）。2000～2003年の投資実行率は低下傾向にあり、2003年には43.82％までに下がった。吉林省のFDI受入額が全国に占める比率は減り続け、2003年には0.59％へと低下した。

２．４．快速発展段階（2004～2007年）

長期にわたる外資に対する奨励や優遇政策の実施によって、中国FDIは引き続き急速な発展を遂げている。FDI受入額（実行ベース）は2003年の535.05億ドルから2007年の747.68億ドルへ増加した（39.74％増）。

2003年に「東北地区等旧工業基地振興戦略の実施に関する若干の意見」が公表されてから、東北地区における対外貿易の拡大、インフラ施設の整備が推進されるようになった。吉林省の経済発展及び旧工業基地の振興を加速化させるため、2005年に「投資牽引戦略」の実施が定められ、同省の外資導入は快速発展段階に入った。

この時期の吉林省のFDI受入件数（契約ベース）は、2003年の340件から2007年の342件に増え、年平均伸び率は0.15％となった。契約ベースの投資額は2003年の７億2,591万ドルから2007年の15億5,610万ドルまで増加し、年平均伸び率は21.0％となった。実行ベースの投資額は3億1,808万ドルから2007年の８億8,495万ドルまで増え、年平均伸

び率は29.15％となった。投資実行率は年平均50.17％となり、2005年には70.16％まで跳ね上がった。

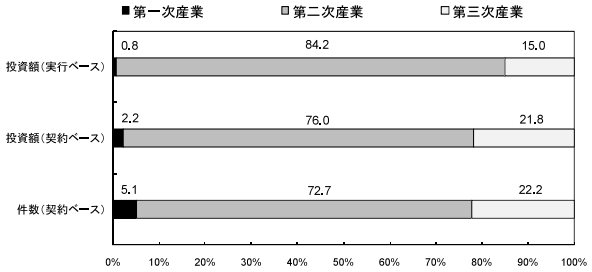
快速発展段階において、吉林省のFDI受入額（実行ベース）が全国に占める比率は徐々に上昇する傾向であった。しかし、その比率は依然として小さく、2007年はわずか1.18％にすぎなかった。

３．吉林省における産業・業種別の外資利用状況

３．１．産業別の状況

2007年までの累計を見ると、吉林省の第一次、第二次、第三次産業における外資受入件数（契約ベース）はそれぞれ136件、1,988件、610件で、全体に占める比率は5.4％、72.7％、22.2％である。契約ベースの投資額を見ると、それぞれ1億7,925.7万ドル、62億5,195.2万ドル、17億9,237.1万ドルで、全体に占める比率は2.2％、76.0％、21.8％となっている。実行ベースの投資額は5,421万ドル、57億5,088万ドル、10億1,718万ドルで、全体に占める比率は0.8％、84.2％、15.0％である。つまり、吉林省の外資利用は主に第二次産業に集中しており、次いで第三次産業で、第一次産業の比率は最も小さい（図２）。

図２　産業別でみる吉林省の外資利用状況（2007年までの累計）



（出所）吉林省商務庁資料より作成。

2001～2007年では、産業別でみる吉林省の外資利用状況に大きな変化は見られなかった。外資受入件数（契約ベース）から見ると、全体に占める第二次産業の比率は高いが、減少の傾向が見られ、2001年の83.98％から2007年は60.30％に下がった。他方、全体に占める第三次産業の比率は小さいが、2001の年11.87％から2007年は32.24％に上がり、上昇傾向が見られた。また、第一次産業が占める比率は最も低いが、2001年の4.15％から2007年7.46％に微増した。

契約ベースの投資額も同様な傾向が見られ、全体に占める第二次産業の比率が高いものの、2001年の85.99％から2007年の75.00％へと低下した。第三次産業が占める比率は相対的に少ないが、2001年の12.92％から2007年の21.81％に上昇した。第一次産業が占める比率は低く、最も高かった2006年でも僅か5.21％にすぎなかった。

実行ベースの投資額の傾向を見てみると、第二次産業が占める比率が最も高く、2001年の80.98％から2007年の87.92％に上昇している。第三次産業が占める比率は比較的少なく、2001年は18.28％であったが、2007年は11.28％に低下した。第一次産業が占める比率は１％未満で最も低かった（表１）。

３．２．業種別の状況

2007年までの吉林省の外資利用は主に製造業と不動産業に集中した。投資件数（契約ベース）を見てみると、製造業への投資件数は1,833件に上り、全業種の67.0％を占めている。次いで不動産業は139件、全体の5.1％を占める。投資額（契約ベース）では、製造業が53億7,381万ドルで、全業種の65.3％を占めており、不動産業が７億3,545万ドルで、全体の8.9％を占める。また、実行ベースの投資額では、製造業が52億7,020万ドルで、全体の77.2％を占めており、不動産業が３億8,285万ドルで、全体の5.6％を占める。吉林省は中国有数の農業大省であるにもかかわらず、農業関連への投資額（実行ベース）が全業種の第10位にとどまっており、全体に占める比率は僅か0.8％である（表２）。

３．３．製造業の内訳

吉林省の外資利用においては、製造業が絶対的な優位性を持っている。これは既存の産業基盤と緊密に関連するほか、2006年に実施された「装備製造業振興の加速化に関する国務院の若干意見」とも深く関わっていると考えられる。

鉄道運輸設備および農業機械設備は、吉林省の装備製造業にとって最も重要な部分として位置づけられている。また、東北旧工業基地振興政策の方針に従って、吉林省は「自動車及び自動車部品、石油化学工業、農産品加工業、現代漢方薬とバイオ製薬産業、電子情報産業などの五大産業の発展を加速させる」という新たな目標を定めた。この政策方針は、吉林省製造業の外資導入に大きな影響を与え、製造業へのFDI拡大に重要な役割を果たしたと考えられる。

2007年までの吉林省製造業の外資利用は、主に交通運輸設備製造業、農産品加工・食品製造業に集中した。投資件数（契約ベース）を見ると、交通運輸設備製造業の投資件数は201件、製造業全体の11.0％に相当している。農産品加工・食品製造業は364件、製造業全体の19.8％を占めた。また、投資額（契約ベース）では、交通運輸設備製造業が11億5,415万ドル、製造業全体の24.1％に相当し、農産品加

表１　産業別からみる吉林省の外資利用状況（2001～2007年）

単位：％

年	投資件数（契約ベース）			投資額（契約ベース）			投資額（実行ベース）		
	第一次産業	第二次産業	第三次産業	第一次産業	第二次産業	第三次産業	第一次産業	第二次産業	第三次産業
2001	4.15	83.98	11.87	1.09	85.99	12.92	0.76	80.96	18.28
2002	5.78	74.57	19.65	0.38	70.95	28.67	0.59	83.05	16.35
2003	4.42	77.58	17.99	0.55	82.69	16.77	0.75	82.88	16.37
2004	6.21	75.82	17.97	0.89	65.07	34.04	0.39	95.27	4.34
2005	4.31	71.26	24.43	1.02	81.20	17.78	0.78	83.55	15.67
2006	4.96	68.67	26.37	5.21	78.12	16.66	0.96	90.87	8.17
2007	7.46	60.30	32.24	3.19	75.00	21.81	0.79	87.92	11.28

（出所）図2に同じ。

表２　業種別でみる吉林省の外資利用状況（2007年までの累計）

業種＼指標	投資件数（契約ベース）			投資額（契約ベース）			投資額（実行ベース）		
	累計（件）	比率（％）	順位	累計（万ドル）	比率（％）	順位	累計（万ドル）	比率（％）	順位
合　計	2,734	100.0	-	822,358.0	100.0	-	682,228	100.0	-
農林水産業	136	5.0	3	17,925.7	2.2	5	5,421	0.8	10
鉱山採掘業	33	1.2	11	15,297.3	1.9	7	8,420	1.2	7
製造業	1,833	67.0	1	537,381.4	65.3	1	527,020	77.2	1
電力・ガス・水道水の生産供給業	51	1.9	8	55,465.2	6.7	3	28,107	4.1	4
建築業	71	2.6	6	17,051.3	2.1	6	11,541	1.7	5
交通運輸・倉庫・郵政業	16	0.6	14	3,139.5	0.4	14	3,374	0.5	11
情報メディア・コンピュータサービス・ソフトウェア業	98	3.6	5	43,243.0	5.3	4	6,927	1.0	9
卸売・小売業	42	1.5	10	11,462.4	1.4	9	9,771	1.4	6
ホテル・レストラン業	129	4.7	4	10,149.7	1.2	10	2,424	0.4	12
金融業	1	0.0	17	7.0	0.0	18	0	0.0	18
不動産業	139	5.1	2	73,545.2	8.9	2	38,285	5.6	2
リース・商業サービス	60	2.2	7	6,321.7	0.8	13	947	0.1	14
科学研究・技術サービス・地質測量業	25	0.9	13	9,218.0	1.1	11	7,268	1.1	8
水利・環境・公共設備管理業	11	0.4	15	7,881.1	1.0	12	4	0	17
住民サービス、その他のサービス業	33	1.2	11	957.5	0.1	15	30,374	4.5	3
教　育	1	0	17	10.0	0	17	1,190	0.2	13
衛生・社会保障・社会福祉	4	0.1	16	410.5	0	16	376	0.1	16
文化・スポーツ・娯楽業	51	1.9	8	12,891.5	1.6	8	778	0.1	15

（出所）図2に同じ。

工・食品製造業が11億4,222万ドル、製造業全体の21.4％を占める。実行ベースの投資額を見ると、交通運輸設備製造業が19億744万ドルで、製造業全体の36.3％に相当し、農産品加工・食品製造業が９億2,830万ドル、製造業全体の17.6％を占めた（表３）。

ここで留意すべき点は、契約ベースの投資件数と投資額に占める医薬製造業の比率が相対的に高く、それぞれ6.7％、7.8％となっているが、実行ベースの投資額に占める比率は僅か4.1％にすぎない。これは、医薬製造業への外資投資意向が読み取れる一方、実際には実行することが難しいことを示している。

４．吉林省における地域別の外資利用状況

2007年までの吉林省に対する外資の投資先は、主に長春市、延辺朝鮮族自治州、吉林市に集中しており、とりわけ長春市への投資が多かった。

投資件数（契約ベース）を見ると、長春市には1,121件が投資され、省全体の46.63％を占めた。延辺朝鮮族自治州は770件で省全体の32.03％に相当し、吉林市は192件で省全体の7.99％を占めた。この他、通化市、白山市、松原市、四平市、遼源市、白城市への投資件数（契約ベース）は、それぞれ105件（省全体の4.37％）、72件（同3.00％）、42件（同1.75％）、39件（同1.62％）、34件（同1.41％）、29件（同1.21％）であった。

投資額（契約ベース）を見ると、長春市は41億2,923万

表３　吉林省外資利用における製造業の内訳（2007年までの累計）

業　種	投資件数（契約ベース）			投資額（契約ベース）			投資額（実行ベース）		
	件数（件）	比率（%）	順位	金額（万ドル）	比率（%）	順位	金額（万ドル）	比率（%）	順位
製造業合計	1,833	100.0	−	537,381.4	100.0	−	527,020	100.0	−
農産品加工・食品製造業	364	19.8	1	114,221.8	24.1	2	92,830	17.6	2
紡績業	46	2.5	6	12,315.4	2.3	5	16,441	3.1	7
木材加工及び木・竹・藤・棕櫚・草製品業	110	6.0	5	9,255.8	1.7	6	31,335	6.0	3
化学原料・化学製品製造業	116	6.3	4	32,925.5	6.1	4	29,531	5.6	4
医薬製造業	123	6.7	3	41,904.8	7.8	3	21,630	4.1	6
交通運輸設備製造業	201	11.0	2	115,415.3	21.4	1	190,744	36.3	1
通信設備・コンピュータ及びその他の電子設備製造業	45	2.5	7	7,907.5	1.5	7	23,266	4.4	5

（出所）図２に同じ。

ドルで省全体の60.15％を占めた。延辺朝鮮族自治州は７億8,151万ドルで、省全体の11.38％に相当している。吉林市は５億2,137万ドルで、省全体の7.60％を占めた。また、松原市、通化市、白山市、四平市、白城市、遼源市への投資額（契約ベース）は、それぞれ４億5,901万ドル（省全体の6.69％）、２億8,129万ドル（同4.10％）、２億3,138万ドル（同3.37％）、１億5,722万ドル（同2.29％）、１億5,541万ドル（同2.26％）、１億4,801万ドル（同2.16％）であった。

実行ベースの投資額について、長春市は28億5,099万ドルで、省全体の55.00％を占めた。延辺朝鮮族自治州は８億1,534万ドルで、省全体の15.73％に相当している。吉林市は６億8,371万ドルで、省全体の13.19％を占めた。また、松原市、四平市、白山市、通化市、遼源市、白城市への投資額（実行ベース）は、それぞれ１億9,339万ドル（省全体の3.73％）、１億8,907万ドル（同3.65％）、１億8,010万ドル（同3.47％）、１億4,496万ドル（同2.80％）、7,118万ドル（同1.37％）、5,506万ドル（同1.06％）であった。

2001～2007年では、吉林省の外資利用は投資額ベースで長春市に集中した。投資件数（契約ベース）の場合、延辺朝鮮自治州が省全体に占める比率は最も高く、2001年の36.08％から2007年の44.65％へと上昇した。長春市の場合、2001年の32.91％から2007年の26.57％に低下した。吉林市は第三位となり、2001年の18.04％から2007年の8.49％に減少した。他方、通化市、白山市、松原市は顕著な増加傾向を示した（表４）。

投資額（契約ベース）を見ると、長春市が省全体に占める比率は最も高いが、2001年の49.25％から2007年の42.91％へと低下した。次いで延辺朝鮮族自治州の比率は、2001年の21.36％から2007年の13.59％に減少した。第３位の吉林市も同じ傾向にあり、2007年の省全体に占める比率は8.87％にとどまった。他方、白山市と松原市の比率は上昇傾向にあり、2007年の省全体に占める比率は、それぞれ10.37％、10.28％であった。

実行ベースの投資額の場合、長春市が占める比率が最も高く、2001年の57.16％から2007年の60.36％に増加した。一方、第２位の吉林市は減少傾向にあり、その比率は2001年の20.51％から2007年の10.29％へと減少した。延辺朝鮮族自治州が占める比率も減少傾向にある。他方、四平市、白山市と松原市の比率は上昇している。2007年には、延辺朝鮮族自治州が省全体に占める比率は4.81％で、四平市は同5.86％、白山市は同5.63％、松原市は同5.65％となった。

５．投資国・地域から見る吉林省の外資利用状況

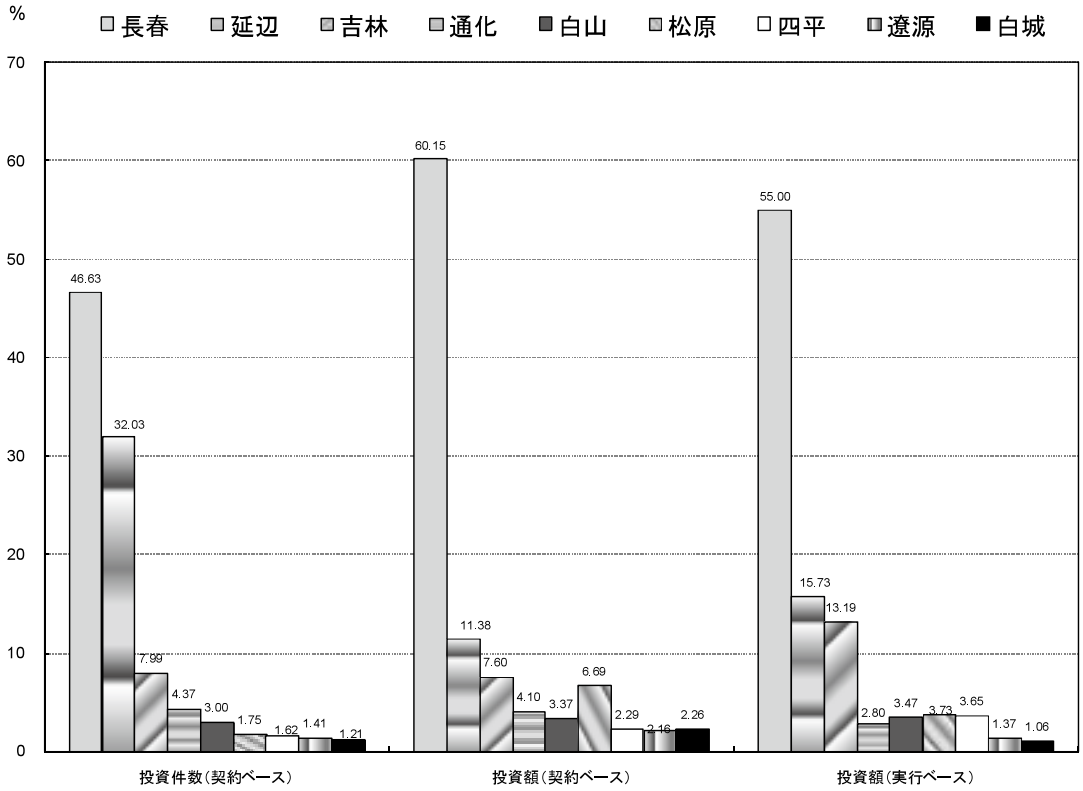
2007年までの吉林省への投資国･地域は、少数特定の国･地域に集中する傾向があった。まず、投資件数（契約ベース）の場合、首位の韓国は1,071件で省全体の39.17％を占めた。次いで香港が614件（同22.46％）、日本が286件（同10.46％）、アメリカが255件（同9.33％）、台湾が122件（同4.46％）となった。

投資額（契約ベース）を見ると、首位の香港は29億5,734万ドルで、省全体の35.96％を占めた。次いで英領バージン諸島が14億679万ドル（同17.11％）、アメリカが９億3,605万ドル（同11.38％）、韓国が７億784万ドル（同8.61％）、ドイツが４億9,797万ドル（同6.06％）、日本が３億6,790万ドル（同4.47％）となっている。

実行ベースの投資額において、首位の香港は18億1,310万ドルで、省全体の26.58％を占めた。第２位のドイツは10億9,614万ドル（同16.07％）であった。英領バージン諸島が７億8,275万ドル（同11.4％）で、第３位を占めた。第４位の韓国は７億7,252万ドル（同11.32％）であった。アメリカが第５位を占め、６億708万ドル（同8.90％）であった。第６位の日本は５億4,581万ドル（同8.00％）であった（表５）。

2001～2007年における吉林省への投資国･地域を見ると、

図３　各市・自治州の外資利用が吉林省全体に占める比率（2007年までの累計）



（出所）図2に同じ。

表４　地域別からみる吉林省の外資利用の変化（2001～2007年）

単位：％

		2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
投資件数（契約ベース）	長春市	32.91	41.07	33.33	39.64	32.28	32.82	26.57
	吉林市	18.04	10.34	12.23	8.57	11.23	8.36	8.49
	延辺朝鮮自治州	36.08	39.18	38.23	35.36	39.30	36.84	44.65
	通化市	3.48	3.13	4.89	4.29	4.56	4.64	7.75
	四平市	3.80	3.13	3.36	5.00	2.46	3.41	2.21
	白城市	0.95	0.94	1.83	1.43	2.11	4.33	1.11
	遼源市	0.32	0.31	0.92	1.79	2.11	2.48	0.74
	白山市	3.48	0.94	2.45	2.14	2.11	4.33	5.54
	松原市	0.95	0.94	2.75	1.79	3.86	2.79	2.95
投資額（契約ベース）	長春市	49.25	48.89	53.53	81.57	48.45	36.12	42.91
	吉林市	18.28	19.03	14.12	4.06	13.93	10.31	8.87
	延辺朝鮮自治州	21.36	18.29	5.33	7.51	19.05	12.52	13.59
	通化市	0.52	1.56	2.03	1.25	5.49	6.70	8.57
	四平市	6.73	9.58	5.12	2.71	1.92	7.30	1.24
	白城市	0.07	0.26	0.16	0.07	2.47	6.41	3.63
	遼源市	1.92	0.28	3.63	1.09	4.10	6.89	0.55
	白山市	1.85	1.28	1.97	1.31	2.01	1.39	10.37
	松原市	0.02	0.85	14.12	0.43	2.59	12.35	10.28
投資額（実行ベース）	長春市	57.16	55.55	55.11	55.03	61.71	66.06	60.36
	吉林市	20.51	21.36	20.10	18.07	10.70	11.11	10.29
	延辺朝鮮自治州	11.93	12.40	14.26	13.68	7.91	8.01	4.81
	通化市	3.08	2.16	1.81	3.10	2.78	2.77	3.77
	四平市	2.38	2.90	0.96	3.02	2.67	3.92	5.86
	白城市	2.27	1.00	0.11	0.27	0.93	1.27	1.30
	遼源市	1.23	1.97	1.50	1.81	1.07	1.60	2.32
	白山市	1.22	1.32	1.95	2.22	1.87	2.10	5.63
	松原市	0.23	1.34	4.19	2.80	10.37	3.17	5.65

（出所）図２に同じ。

表５　吉林省への主な投資国・地域（2007年までの累計）

投資件数（契約ベース）			投資額（契約ベース）			投資額（実行ベース）		
国・地域	件数（件）	比率（%）	国・地域	金額（万ドル）	比率（%）	国・地域	金額（万ドル）	比率（%）
韓国	1,071	39.17	香港	295,734	35.96	香港	181,310	26.58
香港	614	22.46	英領バージン諸島	140,679	17.11	ドイツ	109,614	16.07
日本	286	10.46	アメリカ	93,605	11.38	英領バージン諸島	78,275	11.47
アメリカ	255	9.33	韓国	70,784	8.61	韓国	77,252	11.32
台湾	122	4.46	ドイツ	49,797	6.06	アメリカ	60,708	8.90

（出所）図２に同じ。

表６　吉林省へのトップ５位の投資国・地域（2001～2007年）

単位：%

	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
投資件数（契約ベース）	韓国（53.71）	韓国（47.40）	韓国（44.12）	韓国（39.22）	韓国（42.53）	韓国（33.42）	韓国（41.52）
	香港（17.21）	香港（19.94）	香港（15.29）	香港（16.34）	香港（17.82）	香港（24.80）	香港（23.98）
	台湾（7.42）	日本（8.67）	アメリカ（10.00）	日本（8.50）	アメリカ（11.21）	アメリカ（11.49）	アメリカ(7.02)
	アメリカ(5.64)	アメリカ(8.09)	日本（9.71）	アメリカ(8.17)	日本（10.34）	日本（8.09）	日本（6.43）
	日本（4.45）	台湾（4.05）	台湾（4.12）	英領バージン諸島（3.92）	台湾（2.59）	英領バージン諸島（5.74）	英領バージン諸島（5.56）
投資額（契約ベース）	香港（38.46）	香港（26.99）	香港（29.20）	英領バージン諸島（30.17）	香港（37.61）	香港（55.90）	香港（45.01）
	韓国（17.31）	韓国（21.94）	アメリカ（15.72）	香港（22.83）	アメリカ（16.81）	英領バージン諸島（13.24）	英領バージン諸島（17.98）
	アメリカ（13.12）	英領バージン諸島（16.25）	韓国（15.67）	ドイツ（15.12）	日本（7.58）	アメリカ(9.90)	韓国（7.28）
	英領バージン諸島（8.65）	アメリカ(9.36)	英領バージン諸島（13.50）	アメリカ(8.67)	英領バージン諸島（6.31）	日本（6.21）	アメリカ(7.16)
	台湾（3.28）	日本（6.07）	台湾（8.95）	韓国（8.66）	ドイツ（5.91）	韓国（3.43）	シンガポール（2.38）
投資額（実行ベース）	香港（28.11）	香港（36.42）	香港（34.83）	ドイツ（17.70）	ドイツ（24.48）	香港（26.92）	香港（36.24）
	英領バージン諸島（25.00）	韓国（15.88）	韓国（15.50）	香港（15.25）	アメリカ（20.10）	ドイツ（20.37）	英領バージン諸島（17.58）
	アメリカ（17.37）	英領バージン諸島（15.85）	日本（13.71）	韓国（13.81）	香港（16.32）	英領バージン諸島（15.77）	日本（15.08）
	韓国（12.94）	日本（8.75）	英領バージン諸島（13.25）	英領バージン諸島（12.25）	韓国（10.44）	韓国（7.36）	アメリカ(6.71)
	シンガポール（4.22）	アメリカ(6.30)	シンガポール（7.03）	アメリカ（11.62）	英領バージン諸島（7.25）	日本（6.79）	韓国（4.69）

（注）括弧内は全体に占める比率である。
（出所）図２に同じ。

幾つかの変化が見られる。まず、投資件数（契約ベース）の場合、これまで首位を占めていた韓国が全体に占める比率は、2001年の53.71％から2007年の41.52％へと減少した。第２位の香港が全体に占める比率は、2001年の17.21％から2007年の23.98％に上昇している。また、日本とアメリカは順位が入れ替わり、2007年はアメリカが第３位、日本が第４位であった。台湾は2006年からトップ５位内に入れなかった（表６）。

投資額（契約ベース）を見た場合、2004年を除けば香港は常に投資国・地域の首位を占め、全体に占める比率は2001年の38.46％から2007年の45.01％に上がっている。韓国が全体に占める比率は減少傾向にあり、2001年の17.31％から2007年の7.28％へと減少した。一方、アメリカの順位と比率は余り変化が見られない。日本はトップ５位内に入ったのが３回のみ（2002年、2005年、2006年）であった。台湾の場合は一回もトップ５位内に入らなかった。

実行ベースの投資額を見ると、香港は高水準を維持しており、2007年に全体の36.24％を占めた。ドイツは2004～2006年に上位を占め、比較的高い比率を占めた。一方、韓国とアメリカが占める比率は大幅に減少し、2001年にはそれぞれ12.94％、17.37％であったが、2007年には4.69％、6.71％へと大きく減少した。それと対照的に、日本が全体に占める比率は上昇傾向にあり、2007年は15.08％となり、吉林省に対する第３位の投資国・地域となった。

６．吉林省の外資利用方式

外資利用方式には、中外合弁、中外合作、外商独資という３種類がある。2007年までの投資件数（契約ベース）を見ると、外商独資は1,381件で全体の50.5％を占める。中外合弁は1,156件（同42.3％）、中外合作は197件（同7.2％）となっている。投資額（契約ベース）の場合、外商独資は40億3,532万ドル（全体の49.1％）、中外合弁は31億6,379万ドル（同38.4％）、中外合作は10億2,647万ドル（同12.5％）であった。

実行ベースの投資額において、中外合弁が占める比率は高く、43億4,066万ドル（全体の63.6％）であった。次いで外商独資は20億1,637万ドル（同29.6％）であった。中外合作が占める比率は最も低く、僅か6.8％しかなかった。このように、３種類の外資利用方式のうち、中外合弁の可能性は高いが、外資は外商独資という方式に強い意向を示していると言えよう（表７）。

2001～2007年では、吉林省の外商直接投資の利用方式に幾つかの変化が見られた。投資件数(契約ベース)を見ると、外商独資が全体に占める比率は高い水準を維持し、2001年の179件から2007年の189件へと上昇している。次いで中外合弁は、2001年の122件から2007年の127件へと、安定的に推移している。中外合作は最も少なく、2001年の36件から2007年の26件へと、減少傾向にある。

投資額（契約ベース）を見ると、外商独資は増加傾向にある。とりわけ、「東北地区等旧工業基地振興戦略の実施に関する若干の意見」が公表されてから増え、2001年の１億7,187万ドルから2007年の９億6,625万ドルへと急増した。中外合弁の変動は小幅にとどまり、2001年の２億4,841万ドルから2007年３億8,269万ドルへと上昇している。他方、中外合作が全体に占める比率は低いが、上昇傾向にある。中外合作による投資額は、2001年の１億5,742万ドルから2007年の２億716万ドルへと増加した。

実行ベースの投資額については、中外合弁、中外合作と外商独資はいずれも上昇した。2001年はそれぞれ２億1,702万ドル、9,988万ドル、2,076万ドルであったが、2007年は３億3,962万ドル、４億9,415万ドル、5,117万ドルへと拡大した（表８）。

表７　吉林省の外資利用方式（2007年までの累計）

	中外合弁	中外合作	外商独資
契約ベースの投資件数（件、％）	1,156（42.3）	197（7.2）	1,381（50.5）
契約ベースの投資額（万ドル、％）	316,378.6（38.4）	102,647.3（12.5）	403,532.0（49.1）
実行ベースの投資額（万ドル、％）	434,066.1（63.6）	46,525.0（6.8）	201,636.9（29.6）

（注）括弧内は全体に占める比率である。
（出所）図２に同じ。

表８　吉林省の外資利用方式の推移（2001～2007年）

単位：件、万ドル

		2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
投資件数（契約ベース）	中外合弁	122	122	110	102	110	134	127
	中外合作	36	39	34	40	26	27	26
	外商独資	179	185	196	164	212	222	189
投資額（契約ベース）	中外合弁	24,841	23,556	24,913	50,208	33,417	46,315	38,269
	中外合作	15,742	13,805	10,748	20,158	15,915	27,548	20,716
	外商独資	17,187	19,949	36,930	88,351	44,907	94,731	96,625
投資額（実行ベース）	中外合弁	21,702	16,488	23,252	27,158	52,453	40,177	33,962
	中外合作	2,076	4,148	1,785	3,318	1,628	2,279	5,117
	外商独資	9,988	11,067	6,771	14,790	12,034	33,608	49,415

（出所）図２に同じ。

７．吉林省における外商直接投資利用の加速化の課題

近年、吉林省の外資利用は拡大しており、同省経済の発展をけん引してきた。しかし、他の先進地域と比べ、吉林省の外資利用は依然として規模が小さく、レベルも低い。2007年、吉林省への外資投資額（実行ベース）は8.9億ドルで、全国に占める比率が僅か1.2％であったが、経済先進地域の広東省への投資額（実行ベース）は171.3億ドルで、吉林省の19.4倍となっている。同じ東北部に位置する遼寧省の外資受入額（実行ベース）は91.0億ドルで、吉林省の10.2倍となっている。今後、吉林省の外資利用の規模を拡大させるためには、以下の４点のように多くの課題が残されており、包括的に解決していく必要がある。

７．１．投資環境の改善

近年、吉林省における外資誘致の効率が向上し、ある程度投資環境が改善されたとはいえ、交通インフラの整備、信用システムの確立、金融システムの健全化、政府サービスの向上などの課題が残されている。これらの問題は、吉林省にとって外資利用を拡大させるための重要な課題である。

７．２．外資利用における産業合理化の促進

吉林省の外資利用は、産業別・地域別に見ると不合理な部分がある。たとえば、第三次産業への投資が全体に占める比率は極めて小さい。第一次産業への投資も少なく、農業大省の吉林省にとって相応しくない。吉林省の外資利用を一層拡大させるために、既存の産業優位性を発揮し、農業・農産品加工業、自動車産業、石油化学工業、医薬品製造などへの投資を促すことや、交通インフラ整備の問題を解決することなどが、今後の重要な政策課題である。

７．３．外資利用の地域不均衡是正

地域別に見ると、吉林省における外資利用の地域不均衡が生じており、主に長春市に集中している。2001年に長春市が省外資導入額（実行ベース）の57.16％を占めたが、2007年には60.36％へと上昇した。他方、その他の市・自治州が占める比率の合計は40％未満の水準であった。とりわけ、白城市、遼源市、通化市が占める比率はいずれも５％未満にとどまった。今後の重要課題として、①引き続き長春市、吉林市への投資規模を拡大させること、②延辺朝鮮族自治区への投資効率を向上させること、③各自の産業優位性を活かしつつ、通化市、四平市、白城市、遼源市、白山市、松原市などの外資誘致活動を強化させることなどが挙げられよう。

７．４．北東アジア諸国による吉林省への投資促進

吉林省への投資国・地域において、韓国と日本は第4位と第６位となっている（実行額ベース）。北東アジア地域経済協力という視点から言えば、吉林省は韓国、日本と地理的に非常に近いという優位性を発揮し、両国による投資促進を一層強化すべきである。特に機械設備製造業など相対的に優位性を持つ吉林省の産業に、日本企業と韓国企業による投資の利用を加速化させていくことが重要である。

参考文献

⑴張慧智「走出外資引進的困境――以吉林省外資企業為中心的調査報告」『吉林大学社会学科学報』、2007年第６期。
⑵張淑娟「東北老工業基地産業結構演進中FDI因素的分析与比較」『財貿経済』、2007年第８期。
⑶呉昊･劉丹「中国東北地区与周辺国家的貿易和投資関係」『東北亜論壇』2005年第６期。
⑷王勝今「東北老工業基地振興与東北亜区域合作」『東北亜論壇』2004年第２期。
⑸張平宇『東北区域発展報告2008』科学出版社、2008年７月。

【2009年６月付の中国語原稿をERINAにて翻訳】

An Analysis of the Current Status of the Introduction of Foreign Direct Investment in China's Jilin Province

LIAN, Xiaomei
Associate Professor, Northeast Asian Studies Academy of Jilin University

Summary

Jilin Province is an inland province located in the northeast of China. It has lagged behind the eastern coastal regions in the stages of its opening. Not only was the start in taking advantage of foreign direct investment late, but also the scale was small. It was not until 1984 that Jilin Province accepted its first foreign direct investment. Over the past 20 years, and especially after the adoption of "Some Opinions on Implementing the Strategy of the Revitalization of the Northeast Old Industrial Base" in October 2003, a pace of rapid development in the use of foreign direct investment has come into being. To December 2007, 2,734 foreign direct investment contracts had been signed, and contracted foreign direct investment amounted to US$ 8,223,580,000. The actual use of foreign direct investment reached US$ 6,822,280,000. The use of foreign direct investment has passed through four stages—start-up, development, stagnation, and rapid development—since the first foreign direct investment was introduced in 1984. It was characterized by being concentrated in secondary industries, particularly the manufacturing industry and real estate, mainly located in Changchun, and the main sources of the investment were Hong Kong, Germany, the British Virgin Islands, the ROK and the United States. The investment patterns were centered on joint partnerships. In order to expand the scale of foreign direct investment in Jilin Province and speed up the development phases, we need to improve the investment environment, promote a rational distribution of industry and the regional distribution of foreign direct investment, and enhance investment cooperation with Japan, the ROK, and the other countries in Northeast Asia.

中国吉林省における労働力の海外派遣事業

吉林大学東北アジア研究院講師　王彦軍

１．はじめに

経済のグローバル化が進むなか、サービス貿易の主な分野として、国際労働力移動の規模が拡大し続けている。北東アジア地域においても、活発な労働力移動が見られる。韓国、日本、ロシアが労働力の受入国となっている一方、膨大な人口を抱えている中国はその主な供給国となっている。本稿では、吉林省の労働力海外派遣事業を中心に国際労働力移動問題について検討していきたい[1]。

まず、中国全国における労働力派遣の概況を説明しておきたい。中国では、労働力の海外派遣事業は「労務派遣」と称されており、対外経済協力の一環として行われている。1949年から1970年代後半までに、中国政府は鉄道や発電所など大型建設プロジェクトを支援する目的で友好国に対してのみ労働者の派遣を行った。この時期の中国政府は「労務派遣」を正式に認めたわけではなかった。

改革・開放期に入ってから、中国政府は労働力派遣事業の役割を評価し、積極的に推進するようになった。とりわけ、1990年代以降、派遣先国が増え、派遣者数も急増した。2000年以降になると、「走出去」（海外に進出せよ）という政策の下で、モノ（対外投資・貿易）、ヒト（労働力派遣）の両分野において、急速な成長が続いている。

中国の労働力派遣事業[2]は主として、①海外工事建設の請負に伴う技術者や労働者の派遣、②外国の派遣先との契約に基づく労働者の派遣、という二種類がある。中国商務部（元対外経済貿易合作部）の統計によると、2008年における労働者の海外派遣事業の売上高は、対前年比19.1％増の80.6億ドルに達し、新規派遣者数は2007年に比べて5.5万人増の42.7万人となった。2008年末現在の在外労働者総数は74万人となり、年々増える傾向にある。

中国の労働力の派遣先は東アジアに集中しており、シンガポール、日本、韓国、香港などが上位を占めている。その他の派遣先として、アメリカ、ロシア、イスラエル、ヨルダンなどもあり、合計で180の国や地域に労働力が派遣されている。

近年、中国の労働者海外派遣事業は大きく伸びてきた。しかし、沿海部に比べて、内陸部労働者の海外派遣事業が大きく立ち遅れている。内陸部の中では、吉林省の労働力派遣事業が進んでいるとされるが、様々な課題を抱えているのも事実である。本稿は、吉林省における労働力の海外派遣事業の実績と特徴を明らかにした上で、その課題と展望について分析していきたい。

２．吉林省の労働力海外派遣の実績と特徴[3]

中国では、労働力の派遣事業を扱うためには、政府管理機関[4]の許可が必要となる。そして、日常的な管理業務は地方政府によって担われ、たとえば吉林省の場合、商務庁がその役割を担う。この他、労働者を海外へ派遣する際、派遣元企業が商務庁で契約書と派遣労働者の基本情報を登録することが義務付けられている。これにより、商務庁は労働者派遣の実態を把握し、派遣元企業への指導も容易に行うことができる。

２．１．吉林省労働力派遣の拡大

既述したように、内陸部に位置する吉林省は、対外開放のレベルが沿海部に比べて遅れているものの、労働者の海外派遣事業においては「労務大省」と称されるほど実績がある。

1992年における吉林省の海外労働者派遣者数は１万人を超えた。その後、労働力派遣事業が順調に伸びており、派遣者数が増え続けてきた。特に2004～2008年の５年間において、新規派遣者数の延べ人数は７万人を超え、平均で毎年約１万4,000人増加した（表１）。

中国の海外労働者派遣事業が急速に拡大したことには、沿海部の貢献が最も大きい。表２で示したように、沿海部の各省が労働者派遣者数の上位を占めている。2008年における吉林省の新規派遣労働者数は、対前年比6.1％増の１万9,163人[5]となり、全国第７位であったが、首位の江蘇省の半分にも及ばなかった。また、2003年に全国第５位、

---

[1] 本稿の執筆にあたり、吉林省対外経済貿易公司の呉印文氏より多大なご協力を頂き、この場を借りて深く感謝を申し上げたい。
[2] 中国の場合、海外への労働力派遣に関しては、政府管理部門から経営の許可を受けた企業の実績のみが統計対象となる。改革・開放期以降、出国管理が緩和されたために、実態として個人による海外出稼ぎは大幅に増えたが、そのデータは集計されていない。
[3] 本稿で取り上げる吉林省の労働力派遣事業に関するデータは、脚注または出所の表記がない場合、全て吉林省商務庁の統計資料によるものである。
[4] かつては商務部と社会労働保障部の２つの行政機関は、労働力派遣事業の経営許可を行う権限を持っていたが、現在は商務部だけにその権限が付与されている。
[5] 吉林省商務庁の統計データは中国商務部のそれと一致しておらず、ここでは後者の統計による。

表１　吉林省における労働力海外派遣の実績（2004～2008年）

		契約取引高（万ドル）	実行取引高（万ドル）	新規派遣者数（人）	年末在外者数（人）
2004年	合計	12,885	14,912	13,610	28,285
	日本	1,818	1,356	1,426	2,941
	韓国	4,988	8,009	6,770	16,970
	北朝鮮	144	376	408	677
	ロシア	2,652	1,263	2,019	1,095
	シンガポール	1,437	1,550	961	2,417
2005年	合計	12,898	15,702	14,048	34,639
	日本	3,958	2,990	3,007	4,828
	韓国	5,720	7,963	6,000	21,029
	北朝鮮	−	428	256	717
	ロシア	1,620	1,104	2,010	1,320
	シンガポール	533	1,156	1,011	2,637
2006年	合計	15,988	19,599	14,124	43,251
	日本	4,077	5,159	2,821	7,100
	韓国	4,346	9,075	5,688	25,389
	北朝鮮	170	491	361	979
	ロシア	2,270	1,302	2,433	1,742
	シンガポール	598	1,431	1,310	3,979
2007年	合計	23,286	23,239	13,770	48,386
	日本	5,681	5,694	3,617	9,269
	韓国	7,402	10,517	5,092	27,480
	北朝鮮	−	592	473	723
	ロシア	1,371	1,161	1,708	1,341
	シンガポール	2,548	1,662	1,959	5,335
2008年	合計	14,486	27,642	14,516	43,679
	日本	6,059	7,953	4,442	10,784
	韓国	2,140	11,482	4,410	22,381
	北朝鮮	402	604	394	959
	ロシア	3,264	1,491	2,243	750
	シンガポール	168	3,881	2,321	5,679

表２　各省・自治区・直轄市の労働者派遣者数（2008年）

順位	省・自治区・直轄市	労働者派遣者数（人）	比率（%）
1	江蘇省	46,996	12.96
2	山東省	45,274	12.49
3	福建省	27,842	7.68
4	遼寧省	27,041	7.46
5	広東省	25,948	7.16
6	河南省	22,983	6.34
7	吉林省	19,163	5.29
8	浙江省	17,134	4.73
9	上海市	16,173	4.46
10	四川省	13,027	3.59
11	安徽省	12,749	3.52
12	湖北省	12,453	3.43
13	河北省	7,660	2.11
14	内モンゴル自治区	7,443	2.05
15	黒龍江省	7,174	1.98
16	陝西省	6,648	1.83

（出所）中国商務部の資料（URL: http://hzs.mofcom.gov.cn/aarticle/date/200901/20090106007393.html）より作成。

2005年に第４位を占めていたことから、全国における吉林省の順位は後退していることが分かる。

２．２．吉林省の労働者海外派遣事業の特徴

⑴派遣先は北東アジア諸国に集中

中国東北部の吉林省は北東アジアの中心部に位置する。そのため、北東アジア諸国との経済連携に積極的に取り込んでいる。労働力派遣事業においても北東アジア諸国を重視している。

中国全体のデータからみると、シンガポールが中国最大の労働力派遣先であるが、吉林省の場合、日本、韓国、ロシアなど北東アジア諸国が主な派遣先となっている。この５年間、日本、韓国、ロシア、北朝鮮に派遣された吉林省の労働者数は、省全体の８割弱を占めている。とりわけ、日本への派遣はこの数年大幅に増えている（表１）。

なお、日本への労働力派遣は、日本の制度上の理由により、研修生・技能実習生という形式で行われている。長期にわたって、日本は韓国、ロシアに続く吉林省の主要な派遣先であった。しかし近年、ロシア向けの労働者派遣に一時的な停滞があったため、日本の順位が上がり、2008年には韓国をも上回って首位となった。2008年の日本への新規派遣者数は4,442人で、省全体の30.6％を占めた。日本市場

が急速に成長した要因として、日本が受入規模を拡大したこともあるが、これまでの沿海部からの労働力の受け入れが吉林省のような内陸部に替わりつつあることも要因の一つだと考えられる。

吉林省にとって韓国は特別な意味をもつ労働力派遣先である。吉林省には延辺朝鮮族自治州があり、言葉や生活習慣などが韓国に近い。1992年の中韓国交樹立以来、吉林省から韓国への出稼ぎ労働者が次第に増えている。特に2000年から2007年にかけて、韓国への派遣労働者数は年間6,000～7,000人となり、吉林省労働者派遣者総数の50％を占め、全国首位の座を守った。しかし、2008年になると、韓国への派遣労働者の数は4,410人に減少し、省全体の30.4％までに下落し、日本に次ぐ２位となった。

韓国への派遣が減少した理由として、次のことが考えられる。第一に、韓国における外国人労働者の受入制度が変わり、それに相応する中国政府との調整作業が進まず、派遣延期のケースが目立った。第二に、世界金融危機の影響で大きな打撃を受けた韓国企業は、外国人労働者の受け入れを抑えざるを得なかった。電子情報工業をはじめとする製造業の稼働率が40％までに下がり、労働者需要が大きく落ち込んだ。また、韓国ウォンの為替レートが最大で50％も暴落し、韓国への出稼ぎ労働者の収入が大幅に減少した。これらの影響で、新規派遣労働者が減少したほか、韓国からの派遣労働者の帰国も増えた。

ロシアは従来から吉林省にとって重要な労働者派遣先であった。ロシアに派遣される労働者のほとんどが農業栽培、建築関係の職種に就く。しかし、1990年代後半に入ってから、ロシア政府は外国人労働者の受け入れ政策を転換して、受け入れ管理を強化した。許可制度の導入によって、労働者の受け入れを厳しく制限するようになった。雇用者数の上限を設けたほか、審査期間を長くし、受け入れ手続きを煩雑化させた。その影響で、ロシアへの労働者派遣数は停滞し、2008年には2,243人にとどまった。

一方、北東アジア地域以外の派遣先として、シンガポールの需要が急速に拡大している。2008年に吉林省からシンガポールへの新規派遣者数は2,321人（省全体の16％に相当）となり、第３位に上昇し、売上高も前年より倍増した。経済成長を背景にシンガポールの建築業が好調で、労働者需要が非常に旺盛である。そのため、今後も労働者の受入市場として拡大すると期待されている。しかし、シンガポール政府が海外労働者の受入規制を緩和したために、競争が激しくなり、労働者の任意解雇などの不正が多発し、中国側の派遣元企業に大きな影響を与えている。

⑵一般労働者が中心となっているが、技術労働者は少ない

吉林省の労働者派遣は多くの業種に及ぶが、一般労働者の派遣が最も多い。他方、ソフトウェア開発、看護師、調理師など専門性の高い技術労働者の派遣は非常に少ない。この傾向は中国全体の労働者派遣の構造とも一致している。

吉林省の場合、派遣される技術労働者対一般労働者の比率は約１：15となっている[6]。中でも農村部からの労働者が多く、そのうちの約９割は海外で建築、紡績・縫製、機械加工、電子部品組み立て、船員業務、サービス業などの労働力集約型産業に従事している。たとえば、韓国では遠洋漁業、建築業、ロシアでは建築業、農業、牧畜業、日本では主に電子、縫製、食品、農業、海産品加工、鋳造などの業務に従事する。つまり、熟練労働者が少なく、一般労働者が大半を占めることになる。

⑶労働者海外派遣事業の地域間不均衡

地域別に吉林省における労働者派遣事業を見ると、長春市、延辺朝鮮族自治州など一部の地域に集中している。表３で示しているように、2008年新規派遣の場合、省政府直属企業（大半の所在地は長春市）の比率は32.5％、長春市は26.5％、延辺朝鮮族自治州は15.9％であり、その合計が全体の74.9％を占めた。他方、松原市と吉林市はそれぞれ2,449人、1,727人となっており、長春市、延辺朝鮮族自治州に比べてかなり少ない。この他、通化市は僅か462人で、白山市と白城市には全くいなかった。今後、これらの地域において新たな派遣ルートの開拓や、人材の供給などの潜在力を引き出すことが求められている。

２．３．吉林省にとっての労働力派遣の意義

労働力海外派遣事業の拡大は、吉林省にとって多くのメリットがある。まず、余剰労働力と失業問題の一部を解決

表３　地域別にみる吉林省の海外労働者派遣者数（2008年）

	労働者派遣者数（人）	省全体に占める比率（％）
吉林省政府直属企業	6,227	32.5
長春市	5,090	26.5
延辺朝鮮族自治州	3,061	15.9
松原市	2,449	12.8
吉林市	1,727	9.0
通化市	462	2.2

[6] 候力・廉暁紅「吉林省対外労務合作中存在的問題」『東北亜論壇』2006年6期、48ページ。

することが期待される。吉林省は人口増加の傾向にあり、労働力人口の規模が拡大しつつあり、省内企業の雇用吸収能力は人口増加に追いつかない状況にある。とりわけ、1990年代以降の国有企業改革は雇用の激減をもたらした。その上、大学新卒者と農村部の余剰労働力の流入によって、都市部の失業問題がさらに深刻化した。この状態は依然続いている。したがって、この失業問題を解決するための雇用政策として、労働力海外派遣事業が大いに期待されている。吉林省に比べ、日本、韓国の賃金が格段に高いことから、２～３年間働ければ現金収入が手に入り、生活改善につなげられる。

筆者が実施したヒアリング調査によれば、３年間日本で働いて貯めた貯金で、帰国後マイホームを買ったり、ビジネスを始めたりすると答える人が多かった。つまり、派遣労働者の収入は地方経済の発展に貢献していると言える。この他、海外派遣の労働者による巨額の送金は吉林省の重要な財源となり、資金不足の解決にも役立っている。実際、延辺朝鮮族自治州の場合、海外派遣の労働者による送金額は年間7～8億ドルに達し、自治州財政収入の2倍以上に相当するという[7]。

３．吉林省の労働力派遣の問題点

吉林省の労働力派遣事業は大きな成果を遂げたとはいえ、依然としてさまざまな問題点を抱えている。これらの問題を解決しなければ、今後の事業拡大に大きな影響を与える恐れがある。

３．１．受入国の状況に左右される労働力海外派遣

前述の通り、吉林省の労働力海外派遣は北東アジア諸国に集中しており、受入国側の情勢変動に左右されることが多いため、リスクが大きい。政策の転換や労働者需要の変動などによって、北東アジア諸国の労働力の受け入れは常に不安定で、その変化が激しい。

たとえば、近年のロシアの場合、政策の転換によって受け入れが停滞している。受け入れの最も多かった韓国では、2004年８月に従来の研修生制度が廃止され、雇用許可制度が導入されたため、吉林省の対韓労働力派遣は激減した。雇用許可制をめぐる中韓政府間の交渉が難航したが、2007年にはようやく覚書（MOU）が調印された。2008年８月、韓国への労働力派遣特定地域として中国の４つの地方自治体が選ばれ、吉林省はそのうちの一つとなった。しかし、実際のところ派遣が実行されておらず、依然として低迷状態が続いている。

日本への派遣は増えているものの、既存の研修生・技能実習生制度では、本来の目的と現実の結果との間にギャップがあって疑問視されている。また、研修生の受入企業の不祥事が多発しており、研修生・技能実習生制度の改革は避けて通れない課題である。2008年６月、日本の厚生労働省が研修生制度改革について報告書をまとめた。その中で、受入企業に対して許可制を導入するとともに、企業内技能実習生の比率を制限するといった内容が盛り込まれた。今後、日本政府が新たな制度を導入する場合、中国からの派遣労働者の受入規模の大幅な減少が懸念されている。

さらに、受入国側の労働力需要は、産業構造の変化と世界経済の景気変動によって影響されている。吉林省の労働力派遣は一般労働者が多いため、その影響を受けやすい。今回の世界金融危機の影響で、日本と韓国の大手企業が大幅な生産縮小に入り、雇用情勢が一段と悪化した。中小企業の倒産も増え、海外からの労働者受け入れを中止するケースが多かった。2009年１～３月の間、吉林省の新規海外労働者派遣者数は3,539人で、前年同期比23.5％減となった。さらに、派遣先からの帰国者数は6,315人にのぼった。これまで経験したこともない厳しい状況に追い込まれている。

筆者が実施したヒアリング調査では、面接を経て派遣契約が交わされ、研修生の在留資格認定書を取得したにもかかわらず、受入側企業の突然の倒産で派遣事業を白紙に戻す事例が２つあった。一般労働者を中心とする労働者派遣事業の構図を変えなければ、今後も受入国の状況に大きく左右されるという課題が解決されない。この実態が改善されないかぎり、派遣企業が大きなリスクを負うことは避けられない。2009年春、吉林省商務庁が実施した労働力派遣企業に対する調査結果によれば、労働力派遣者数は平均45％減少しており、70％減の企業もあった。

３．２．派遣元企業数は多いが、競争力のある企業は少ない

労働者派遣元企業は経営難に陥るケースがよく見られる。それは、派遣元企業が完全に買い手市場となっており、新規契約を獲得するために悪質な競争が繰り返されているからである。そのため、同業者間の価格競争が激化し、企業の成長を阻害している。

吉林省商務庁の認可を受けた労働者海外派遣企業は、2002年の15社から2008年の37社へと急増した。この他、労働保障庁が管轄する企業は25社あり、合計で62社になる。2009

[7]『延辺日報』2005年10月28日付。

年、労働保障庁の管轄企業が商務庁管轄へと移行され、経営資格を再審査した結果、25社のうちの24社が認可された。

つまり、派遣元企業の数は多いが、競争力のある企業は極めて少ない。中国商務部の統計によれば、2008年の労働力海外派遣企業トップ20社のうち、吉林省の企業は１社のみであり、第20位を占めたが、トップの中国国際技術智力合作公司と約57倍の差が開いた（表４）。

表４　労働力海外派遣の売上トップ20社（2008年）

順位	企業名	売上高（万ドル）
1	中国国際技術智力合作公司	273,309
2	上海市対外服務有限公司	46,355
3	北京外企服務集団有限責任公司	33,949
4	広東新広国際集団有限公司	18,289
5	中国広州国際経済技術合作公司	16,948
6	広州対外経済発展総公司	13,415
7	中国山東対外経済技術合作集団有限公司	10,864
8	山東威海国際経済技術合作公司	10,461
9	中国大連国際経済技術合作集団有限公司	8,075
10	中国江蘇国際経済技術合作公司	7,451
11	江蘇省南通六建建設集団有限公司	7,278
12	中国天津国際経済技術合作公司	6,454
13	中海海員対外技術服务有限公司	6,022
14	中国上海外経（集団）有限公司	5,847
15	中国福州国際経済技術合作公司	5,611
16	中国厦門国際経済技術合作公司	5,516
17	潍坊中潍国際劳務有限公司	5,208
18	江蘇省蘇中建設集団股份有限公司	5,096
19	煙台国際経済技術合作有限責任公司	4,826
20	長春国際経済技術合作公司	4,785

（出所）中国商務部の資料（URL: http://hzs.mofcom.gov.cn/aarticle/date/200901/20090106016916.html））より作成。

吉林省の労働力派遣企業の多くは経営規模が小さく、資金力も少ないことから、技術労働者の育成やマネジメントなどの面において問題を抱えており、事業拡大は困難である。今後、労働派遣企業の再編統合、競争力を持つ企業の育成は吉林省にとって急務であろう。

３．３．売り上げが少なく、収益力は低い

吉林省の労働者派遣者数は、全国４～７位で推移しているが、売上高で見るとその順位がかなり下がる。たとえば、2005年における吉林省の新規派遣者数と在外労働者数はそれぞれ４位と５位であったが、売上高ベースでは16位となっている[8]。つまり、労働者海外派遣事業による１人当たりの収入が少なく、企業と労働者にとって収益力が低い。これは過当競争の結果であるとも考えられる。

３．４．立ち遅れる日本、韓国との経済連携

吉林省は内陸省であり、外国との経済連携を進めていく上で弱点がある。図們江地域を中心とする国際協力は積極的に推進されているが、地域経済発展への貢献はまだ少ない。とりわけ、海外からの直接投資が少なく、外資系企業の進出が少ない。

韓国からの直接投資は天津市、山東省など環渤海地域に集中している。吉林省の延辺朝鮮族自治州には韓国からの投資が少ない。日本の対中投資も沿海部中心に行われ、東北部への投資は大連市に一点集中し、吉林省の存在感は薄い。第一汽車集団とトヨタ自動車との提携が進むことになれば、日本の自動車関連企業による長春市進出が加速され、吉林省と日本の経済関係の親密化が期待できよう。

経済連携が立ち遅れて企業間の交流が少ないため、日本企業と韓国企業からの求人情報は吉林省に伝わってこないのが現状である。労働者海外派遣企業は積極的に営業活動

表５　吉林省の労働者派遣における売り上げの推移

単位：億ドル、％

年	全国		吉林省			
	契約金額	売り上げ	契約金額	割合	売り上げ	割合
2001	33.3	31.8	2.03	6.10	1.35	4.25
2002	27.5	30.7	1.53	5.56	1.39	4.53
2003	30.9	33.1	1.58	5.11	1.32	3.99
2004	35.0	37.5	1.29	3.69	1.49	3.97
2005	42.5	47.9	1.29	3.04	1.57	3.28
2006	52.3	53.7	1.60	3.06	1.96	3.65

（出所）『中国商業年鑑』各年版により作成。

[8] 候力・廉暁紅「吉林省対外労務合作中存在的問題」『東北亜論壇』2006年６期、46ページ。

を展開しているが、派遣先の確保は難題である。また、業務上の連携が少ないことから、日本での研修期間を終えて帰国した研修生が習得した技術を生かせる省内の日系企業は、ごく僅かである。一方、江蘇省などの沿海部では日系企業が数多く進出しているため、日本で3年間働いてから帰国した研修生が日系企業で再就職する機会は多い。日系企業側は日本で技術・技能を磨いた研修生の入社を歓迎するが、その事例は吉林省でほとんど見られない。

４．将来の展望

前述の通り、吉林省の労働力海外派遣事業には、様々な問題を抱えており、以下は供給と需要の両面から海外派遣事業の今後について分析していく。

４．１．安定供給が可能

中国の人口政策（一人子政策）によって出生率が急速に下がり、今後は人口減少への転換が明らかである。経済成長が続くと労働力不足の問題が生じ、海外への労働力供給が不足することが懸念されている。しかし、現状では表６と表７で示しているように、吉林省の人口増が続いており、労働力人口の比率も高い。今後もこの状況は続くであろう。

中国は膨大な人口をもち、出生率が下がったとしても、労働力人口が高い割合を占める「人口ボーナス」といわれる期間はさらに伸びる。吉林省でも例外はなく、労働力の供給はその需要を満たすことができる。

今後、中国は高度経済成長の維持が困難であっても、安定した経済成長は維持できるだろう。そして、産業構造の転換が進められており、技術集約型、資金集約型産業が奨励され、労働力人口の増加は需要を上回ると考えられる。また、上海市、江蘇省などの沿海部地域では経済発展に伴って賃金水準が上がり、日本、韓国との格差が縮小していくと思われる。したがって、沿海部にとって海外出稼ぎの魅力が薄れてきて、沿海部からの労働力海外派遣は今後減少すると考えられる。吉林省では低賃金の現状が変わらなければ、韓国、日本との賃金格差は魅力的である。そのため、労働力の安定供給は可能で、吉林省の労働力海外派遣事業の優位性を維持できると考えられる。

４．２．需要の拡大に期待

日本、韓国、ロシアなど、吉林省の労働力の派遣先国では、少子化が進んで労働力不足の問題が深刻化している。海外から労働力を受入れることがその解決策として重要視されている。制度上の制限があっても、現状では需要が増える一方だ。たとえば、日本においては、日本経済団体連合会が外国人労働者の受入規制緩和を呼びかけており、現状を見ても研修生・技能実習生の人数は増えている。日本

表６　吉林省の人口変動（2000～2006年）

	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年
総人口（万人）	2681.7	2690.8	2699.4	2703.7	2708.5	2716.0	2723.0
出生率（‰）	9.53	8.76	8.30	7.25	7.39	7.89	7.67
死亡率（‰）	5.38	5.38	5.11	5.64	5.63	5.32	5.00
自然増加率（‰）	4.15	3.38	3.19	1.61	1.76	2.57	2.67

（注）表内数字は人口調査による推計のため、表7と一致しない場合がある。
（出所）『吉林統計年鑑』2007年版より作成。

表７　吉林省人口年齢構成（2006年末現在）

単位：万人

	総人口	18歳以下	18-35歳	35-60歳	60歳以上
全省	2679.51	509.39	779.05	1070.16	320.91
長春市	739.26	131.21	228.48	291.92	87.65
吉林市	430.44	71.8	115.95	188.32	54.37
四平市	331.28	75.15	96.12	119.76	40.25
遼源市	123.22	23.6	33.81	52.46	13.35
通化市	226.87	45.31	65.50	91.89	24.17
白山市	129.97	25.49	36.58	51.65	16.25
松原市	278.24	63.39	82.79	96.24	35.82
白城市	202.44	39.86	60.79	80.72	21.07
延辺朝鮮族自治州	217.79	33.58	59.03	97.20	27.98

（出所）表６に同じ。

表８　日本研修生・技能実習生の構成（人、％）

年	JITCO支援研修生			技能実習移行申請者		
	総数	中国	割合	総数	中国	割合
2004	51,012	41,038	80.45	34,816	27,581	79.22
2005	57,050	46,678	81.82	40,993	34,095	83.17
2006	68,304	55,811	81.71	51,016	41,072	80.51
2007	71,762	58,707	81.81	60,177	47,168	78.38
2008	68,244	54,961	80.54	63,415	49,654	78.30

（出所）国際研修協力機構（JITCO）の資料により作成。

に滞在する研修生・技能実習生の約８割は中国から来ている（表８）。

５．政策的インプリケーション

これまで吉林省の労働力海外派遣について分析した。以下では、将来の事業拡大に向けた展望について議論を深めてみたい。

第一に、北東アジア地域において、労働力の自由移動の実現に向けた規制緩和が求められている。この地域では、貿易・投資が盛んに行われ、諸国間の経済関係が日増しに緊密化している。しかし､「モノ」の流れと対照的に「ヒト」の移動が厳しく制限されている。この点については、北米自由貿易協定（NAFTA）や欧州連合（EU）と比べてかなり立ち遅れている。今後、貿易・投資と同様に労働力自由移動も北東アジア諸国間交渉の重要なテーマとなろう。

第二に、労働力の需要と供給に関する情報交換のプラットホームを構築する必要がある。各地方政府は対外貿易や投資誘致について、貿易商談会や見本市、投資環境説明会などを開催して積極的に取り組んでいる。他方、労働力海外派遣事業に対してそれほど熱心ではない。情報提供、企業宣伝などのPR活動が少ないために、労働者の受入側企業と派遣元企業の情報交換は個人レベルでしか行っていない。そのため、行政側が労働力の需要と供給に関する定期的な情報交換の場を設けることが効果的であろうと考えられる。

第三に、単純労働力の派遣に比べて、人材の共同育成が一層重要であろう。経済発展を図るためには、優秀な人材を確保することが重要である。現在、人材の奪い合いが世界規模で行われ、北東アジア諸国においてもIT人材をはじめとする専門技術者の確保を図ることが取り組まれている。しかし、労働力海外派遣対象の大半は単純労働者で、受入国側のハイレベル人材の需要にマッチしていない。ハイレベルの人材育成は時間と資金がかかるため、中国の現状では極めて困難なことである。日本と韓国における人材育成の経験を生かし、共同で人材育成を推し進めることが必要であろう。

第四に、労働者の合法的権益を保護することが重要となる。労働力海外派遣事業については、その特殊性について注意を払う必要がある。労働者が一旦出国すると、派遣元企業による管理が難しくなるため、派遣先企業の管理に頼らざるを得ない傾向がある。ここ数年、韓国や日本の派遣先企業による賃金不払い、過酷労働などの不祥事が頻繁に起こっており、派遣労働者の募集に影響を及ぼしている。法律に基づいて労働者の合法的権益を保護しなければ、労働者海外派遣事業にも悪影響を与えるに違いない。

６．おわりに

内陸省・吉林省は、労働者海外派遣事業において大きな実績を遂げた。2008年の派遣者数は全国７位を占め、地方経済の成長に貢献している。特に日本、韓国、ロシアなどの北東アジア諸国への労働者派遣が多く、この地域との経済連携に重要な役割を果たしている。

吉林省は依然として労働力の余剰があり、労働力の海外派遣にとって安定供給が確保できる。しかし、労働力の受入国側の情勢変動が激しく、実力ある派遣先企業が少なく収益力が低い、などの問題が無視できない。如何に労働力海外派遣事業を拡大させるかは今後も吉林省にとって重要な課題である。問題解決に向けて、日本、韓国との経済協力をさらに強化する必要があり、北東アジア地域における人的交流を深めるために政府間協調がさらに求められるであろう。

参考文献

⑴候力・廉暁紅「吉林省対外労務合作中存在的問題」『東北亜論壇』2006年第６期。
⑵金紅梅「吉林省境外就業問題研究」『長春工業大学学報』2006年第４期。
⑶楊雲母「中国対外労務輸出分析」『人口学刊』2006年６期。
⑷趙洪君・王塁「延辺出国労務対地区居民地貯蓄的影響」『延辺大学学報』2005年第４期。
⑸李玉潭主編『中国東北対外開放』吉林大学出版社､2008年。

The Project of Dispatching Labor Overseas in China's Jilin Province

WANG, Yanjun
Lecturer, Northeast Asian Studies Academy of Jilin University

Summary

With the pressure of an increasing population as a backdrop, Jilin Province is actively working on a project to dispatch labor abroad. The relief of employment pressure and the increase of workers' incomes, etc., can be given as advantages thereof. While the opening up of Jilin Province to the outside world has lagged behind compared to the coastal areas, in its project to dispatch labor abroad it can be said to be making headway.

Since the 1990s the number of workers dispatched abroad from Jilin Province has continued to increase, and according to the figures for 2008 by province, autonomous region and municipality it was ranked seventh nationally. As regards the country dispatched to, there are many dispatches to the geographically close countries of Northeast Asia, such as the ROK and Russia. In particular, for the Yanbian Korean Autonomous Prefecture in Jilin Province the income from labor sent to the ROK exceeds tax revenues.

Meanwhile, in spite of the number of workers dispatched abroad from Jilin Province being large, there exists the issues that there are few powerful companies for dispatched labor sources, and that competitiveness is low. Moreover, within Jilin Province there is the problem of the dispatch of labor abroad being unequal between regions, and the numbers of people dispatched are concentrated in some regions, such as Changchun and Yanbian Korean Autonomous Prefecture in particular. Looking at the industrial sector dispatched to, the industries of construction, textiles and clothing, and machining, etc., predominate, and the average income has remained at a low level. For Jilin Province henceforth the striving for an upgrading of the labor force utilizing the project to dispatch labor abroad, and not only a simple increasing of incomes, is important.

Through the unchanging nature of the increase in population, it is thought that the situation of a labor surplus in Jilin Province will continue for the next 10 to 20 years. Consequently the dispatching abroad of labor can be stably provided. There is also the possibility, however, that the project to dispatch labor abroad will change greatly, affected by adjustments to the industrial structure and policy changes in the countries receiving the workers. The ROK, Japan and Russia, while having the problem of a structural lack of labor, have not reduced their cautious positions on accepting foreign workers. In the future, intergovernmental cooperation among the nations concerned will be required, including systematic moves toward the gathering of information on the demand for labor, the joint fostering of technical workers, and the movement of labor.

[Translated by ERINA]

日中間における地方経済の連携の可能性
ー新潟県と延辺朝鮮族自治州のビジネス交流事例ー[1]

ERINA 経済交流部兼調査研究部研究員　穆尭芋

1．はじめに

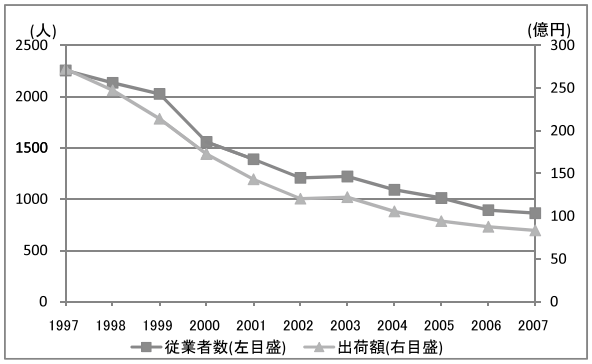
日本の地方経済は地場産業の国際化と振興が大きな課題となって久しい。一方、近隣の中国は金融危機の影響があるものの、高い経済成長率を維持し、国民の消費レベルがますます向上している。日本の地方経済にとって、地場産品の中国進出は地域経済に元気をもたらし、産業振興に貢献する意味が大きい。

現状では、中国における日本製品のプロモーション活動は北京・上海などの大都市に集中しており、地方都市への関心が薄い。その結果、中国の大都市で日本の地方間競争が激しくなり、宣伝活動に多大な資金・労力を投入したとしても、必ずしも良い効果が生まれているわけではない。また、プロモーション活動は主に視察ミッションの派遣、博覧会・展示会への参加、県産品フェアの開催の形を取っており、成約に結び付くことが難しいと指摘されている。本稿はこのような問題意識から、中国の地方都市に目を向け、中国で販売ルートを持つ現地企業と連携する重要性を指摘し、上記の課題解決に向けての一方策を探りたい。

中国吉林省の延辺朝鮮族自治州（以下延辺州）は朝鮮族が集中的に居住している地域で、言葉・文化の近似性から韓国との経済交流がさかんに行われている。朝鮮族のビジネスマンたちは韓国から製品を輸入し、中国全土に卸し売りすることにより、州都・延吉市が全国でも有名な韓国製品の集散地に成長した。近年は目覚ましい経済成長により人々の消費レベルが向上し、高価格でも品質の良い日本製品への需要が高まっている。新潟県見附市の見附商工会ではこれをチャンスとして捉え、広範な販売ルートを持つ現地の延辺大洋会社との連携を図り、延吉市で日本製品常設展示場を設立し、ニット製品の中国進出に乗り出すことになった。

本稿はこのような日中地方間のビジネス交流の事例を取り上げ、地方経済における国際連携の可能性を探りたい。また、上記事例における一連の動きを整理し、日中地方間の経済交流の課題を指摘し、解決に向けての方策を検討していきたい。

図１　新潟県見附市衣服・繊維産業関連企業の従業員数と出荷額の変化



（出所）経済産業省工業統計調査のデータより筆者作成
（URL：http://www.meti.go.jp/statistics/tyo/kougyo/、2009年８月11日アクセス）

2．新潟県見附市のニット産業を取り巻く状況

新潟県は国内有数の繊維製品の産地として知られている。県内の五泉市、見附市、加茂市を中心にニット産業の関連企業が集積し、全国トップレベルの生産技術を有している。特に見附市[2]は紳士服・婦人服の生産技術とデザイン力に強みを持ち、OEMの形でナショナルブランドの製品を数多く生産している。

近年、日本における消費の低迷と輸入品の増加[3]により、国内市場の競争がますます激しくなり、見附市のニット産業は大幅な縮小を余儀なくされている。図１は1997年から2007年までに見附市の衣服・繊維産業関連企業の従業員数と出荷額の変化を示している。出荷額は1997年の273億円から2007年の83億円に低下し、従業員数も1997年の2,256人から2007年の864人に縮小した。この10年間で出荷額と従業員数とも三分の一に減じた。さらに、大手アパレルメーカーからの要求がますます厳しくなり、ニット関連企業はきめ細かい対応が求められている。

このような状況から、見附市のニット関連企業では、見附商工会支援の下、アパレルメーカーに対するデザインの

[1] 本稿の執筆にあたり、延辺大洋会社（中国）、見附商工会などから多大なご協力いただいた。この場を借りて感謝を申し上げたい。
[2] 見附市は新潟県の県央地域に立地する地方都市で、東京都心から約300キロメートル、新潟市中心部から約50キロメートルのところに位置している。人口は平成17年国勢調査では42,668人。見附市基本計画（見附市役所）より。
（URL：http://www.city.mitsuke.niigata.jp/ctg/Files/1/00370232/attach/keikaku%5B1%5D.pdf、2009年８月11日アクセス）
[3] 見附商工会の資料によれば、2004年に日本におけるニット外衣の輸入金額は7,494億円であったが、2007年に9,588億円に拡大した。

提案力を強化するほか、自ら販路拡大を図り、積極的に海外市場を開拓するようになった。近年、上海の博覧会に出展し、中国の富裕層をターゲットにして販路拡大に乗り出している。しかし博覧会の限られた期間中に、バイヤーとの商談がまとまって成約に結び付くことは難しいという課題も存在している。

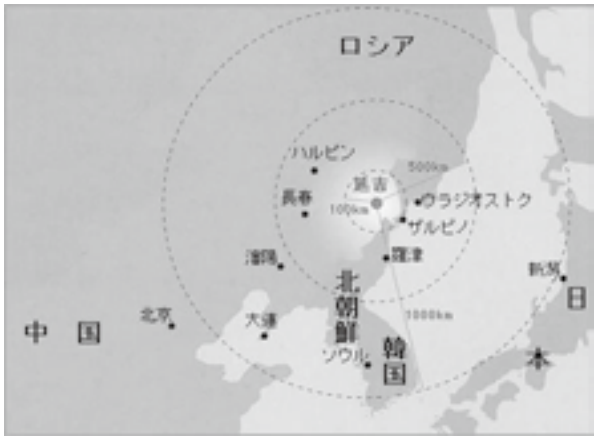
３．吉林省延辺州の経済発展と延吉市韓国製品卸センターの概況

３．１　延辺州の経済発展と国際化

延辺州は吉林省の東部に立地し、ロシア、北朝鮮と国境を接している（図２）。人口は218万人、うち朝鮮族が80.6万人を占める。延辺朝鮮族自治州は延吉市（44万人）、敦化市（48万人）、龍井市（24万人）、琿春市（22万人）、和龍市（21万人）、図們市（13万人）、汪清県（25万人）、安図県（22万人）の６市２県からなっている[4]。中国で指定された唯一の朝鮮族自治区として、言葉・生活習慣の近似性から韓国との交流が進んでいる。

2008年に延辺朝鮮族自治州（以下延辺州）の地域内総生産は前年比18％増の379.6億元に達し[5]、全国平均の同９％増を大きく上回った。東北振興政策の実施に伴ってインフラ整備が行われ、さらに外国直接投資を積極的に誘致して経済の成長に貢献した。経済の発展に伴い、人々の生活水準も向上した。2008年に延辺州の社会消費品小売額は前年比26.4％増の180.1億元に達し、全国平均の同21.6％を上回り、2007年の伸び率と比べて9.6ポイント上昇した[6]。州都・延吉市の高級デパートには、日本円にして３万円から５万円の服も並び、旺盛な消費がうかがえる[7]。

図２　中国吉林省延辺州延吉市（州都）の位置



（出所）延吉投資指南ホームページより。
（URL：http://www.searchnavi.com/~hp/yanji/index.html、2009年8月12日アクセス）

延辺州における経済の国際化が進展し、韓国、日本との経済・人的交流がさかんに行われている。2008年に延吉朝陽川空港を利用した海外旅行者数は延べ213,243人に達し、長春龍嘉国際空港を抜いて吉林省トップとなった[8]。現在、延吉朝陽川空港と仁川国際空港との間は、１日２～４往復の直航便で結ばれている。言葉・生活習慣の近似性から、延辺州朝鮮族の人々は韓国で就労することが容易で、給与所得を中国国内に送金している。2008年に延辺州の海外労務収入は８億ドルに達した[9]。さらに、留学・就労など日本で生活している延辺人は５万人に達していると言われている[10]。このように海外で生活している延辺人は延辺州の経済の国際化に大きく貢献している。

３．２　延吉市韓国製品卸センターの概要と延辺大洋会社のビジネスモデル

延辺州には朝鮮族の人々が多く、言葉・習慣の近似性から韓国との経済交流がさかんに行われている。朝鮮族のビジネスマンは韓国から製品を輸入し、中国全土に卸売を行っている。その関係で州都・延吉市は全国でも有数な韓国製品の集散地に成長した。延吉市韓国製品卸センター（成宝ビル、写真１）は韓国製品が集中する商業施設として広く知られている。

成宝ビルには、地下１階から地上６階まで食器、金属製品、服装、小型家電、靴、寝具、アクセサリーなどの韓国

[4] 吉林統計年鑑（2008年版）より。朝鮮族の人口の数は延辺州政府ホームページより。
（URL：http://www.yanbian.gov.cn/、2009年９月11日アクセス）
[5] 庄厳『树立科学发展理念，谱写延边经济发展新篇章』延辺人民出版社、2009年、76ページ。
[6] 同上、78ページ。
[7] 延辺大洋会社へのインタビュー（2009年８月30日実施）から中国における収入と消費の特徴が指摘された。収入の面では、まず、中国では夫婦ともフルタイムで働き、対等な給与所得を得ることが一般的である。つぎに、副業からも収入を得ている家庭では、その収入が本業の給与所得を大きく上回る場合がある。第三に、若い世代は親からの援助を得る場合もある。第四に、延辺州の場合は、朝鮮族の人々が日本、韓国などの海外で就労し、その所得を中国国内に送金して家庭の収入を増やしている。支出の面では、まず、若い世代が親と一緒に生活する場合、家賃は必要とせず、食費などの支出も少ないため、収入の大部分を消費に回すことができる。つぎに、消費意欲を持っている若い世代では、月給の半分または全額を使って服一着を買うこともよくあるという。インタビューの内容に関してデータの裏付けが取れないが、中国、延辺州の人々の収入と消費の特徴を理解するための一助となる。なお、一人当たりの平均給与所得が増えていることが統計データで証明されている。吉林統計年鑑（2003年版、2008年版）によれば、州都・延辺市における一人当たりの平均年間給与所得（在職者）は2002年の11,511元から2007年の22,601元に上昇し、５年間で倍増した。
[8] 延辺州口岸弁公室へのインタビューより、2009年２月23日実施。
[9] 庄厳、前掲書、注６、79ページ。
[10] 延吉空港会社（延吉机场公司）へのインタビューより、2009年２月23日実施。

商品が並び、テナント方式で商品の販売と卸売を行っている[11]。価格は中国製品の数倍で高級品として取り扱われている。テナントのオーナーである朝鮮族のビジネスマンたちは毎月のように韓国に行き、商品を仕入れて中国全土に販売している。韓国製品卸センターは全国に31ある省の内、28省まで販売網を拡大し、180ヵ所の卸売先を持っているテナントも存在するなど、中国国内に幅広い販売ルートを持っている[12]。

成宝ビルの８階に本社を置く延辺大洋会社（李明淑会長）は同ビルの運営と各テナントの輸入代行を行う企業グループである。同社は2002年に設立され、国際貿易、対外労務派遣、技術貿易、ホテル経営、航空チケット手配、移民手続き代行など多角的な経営を行っている。国際貿易の業務として、韓国製品の輸入手続きの代行を行っており、各テナントと緊密なビジネス関係を持っている[13]。同社は輸入代行の業務を拡大するために、韓国、日本へ買い付けミッションを派遣し、各テナントに海外の新商品を紹介している。

李明淑会長によれば、中国経済の成長に伴って人々の生活レベルが向上し、韓国製品より品質の良い日本製品への需要が高まっている。そのニーズに応えるために、今後は日本製品の商品開発を始めなければならない[14]。このような認識の下、延辺大洋会社は2007年10月に延辺のビジネス関係者19名を引率し、新潟などで買い付けを実施した。結果として、ビジネスマンたちは金属洋食器などの新潟県産品を2,000万円前後購入した。

延辺大洋会社の買い付けミッションは新潟の行政機関と産業界にインパクトを与えた。延辺大洋会社のような、中国国内に広範な販売ルートを持つ現地企業との連携の重要性が認識された。2009年３月、李明淑会長はERINAの招きで再度日本を訪れ、新潟県の地場産品であるニット製品、金属洋食器、食品、醤油などの関連会社を視察した。この訪問で、李明淑会長は新潟県産品を高く評価し、県内企業と安定した取引関係を構築したいと表明した。

３．３　延吉市における繊維関連のバイヤーとその販売ルート

新潟県と延辺州と繊維産業におけるビジネス交流の可能性を探るため、延辺大洋会社は見附商工会の依頼を受け、延吉市における繊維関連バイヤーの状況を調査した。調査の対象は延辺大洋会社とビジネス関係を持っているバイヤーで、主に東北地域を営業範囲としている。表１で示すように、バイヤーは幅広い販売ルートを持っていることが確認できる。ビジネスの流れは下記の通りである。各バイヤーのビジネスマンは韓国に行って仕入商品を決め、延辺大洋会社を通じて輸入する。商品がテナントに入ると地方の卸先の担当者がやってきて商品を買っていく。商品がなくなるとバイヤーのビジネスマンはまた韓国に行く。このようなサイクルで韓国の最新の商品をいち早く中国市場に提供している。

延辺大洋会社は輸入代行を行うほか、各バイヤーから市場のニーズを吸い上げ、韓国のメーカーに伝える。このような形で、韓国のメーカーが中国市場向けの商品開発を実施して市場の変化に対応できるよう寄与している。韓国のメーカー、延辺大洋会社、各バイヤー、さらにバイヤーの卸売先は連動し、中国市場における最新のニーズをつかみ、

写真１　延吉市韓国製品卸センターの外観

（出所）筆者撮影（2008年８月30日）

写真２　同センター内部の様子

（出所）筆者撮影（2008年８月30日）

[11] 日本製品も一部入っているが（例えば地下一階に新潟産の金属食器がある）、量は少ない。
[12] 延辺大洋会社へのインタビューより、2008年８月30日実施。
[13] 延辺太洋会社とビジネス関係を持っているテナントは、成宝ビルに限らず、ほかの商業施設に入っているものもある。
[14] 延辺大洋会社へのインタビューより、2008年８月30日実施。

いち早く商品化することが可能になっている。延辺大洋会社としては日本の繊維関連企業と同じようなビジネス関係を持ちたいと望んでいる[16]。

４．見附市ニット関連企業と延辺大洋会社とのビジネス交流

４．１　見附市ニット関連企業と延辺大洋会社とのビジネス交流の経緯

前述のように、見附市のニット関連企業は海外での販路拡大を図っている。ERINAは中国国内に幅広い販売ルートを持つ延辺大洋会社の事例を見附商工会に紹介し、ニット関連企業の関心を呼んだ。その後、見附商工会を中心にニット関連企業と延辺大洋会社とのビジネス連携が進められるようになった。

李明淑会長は2009年３月訪日時、見附市のニット関連製品を高く評価し、訪問先企業にサンプルの注文と取引開始の意欲を示した。特にニット製品の高いデザイン力と優れた生産技術に感心したようである。その後、ニット関連企業と延辺大洋会社との間でサンプル郵送や代金支払いなどが行われた。

2009年８月、第５回中国延吉・図們江地域国際投資貿易商談会の開催を機に、見附市のニット関連企業は延吉市を訪問し、延辺大洋会社の協力を得て同商談会に出展した。さらに、延吉市における日本商品常設展示場の設立について、見附商工会は延辺大洋会社と合意した。一連のビジネス交流により、見附市のニット関連企業と延辺大洋会社との相互理解がますます深化した。

４．２　延吉市日本商品常設展示場について

４．２．１　日本商品常設展示場の設立の背景

日本商品常設展示場の設立の考え方は、李明淑会長が2009年３月に来日した時に明かされている。その背景には日本商品を買いたい中国のバイヤーに、いつでも日本商品を紹介し、すぐ日本に注文できる場所を作りたいという考えがある。

現実には、日本のメーカーは中国の展示会に出展しても、三日ほどで帰るのが普通である。三日間で消費者に製品の良さを十分に認識してもらうことは困難である。さらに中国の消費者は「使ってみないと分からない」という認識を持っていることが多い。また、中国のバイヤー・消費者が博覧会終了後に注文したいと思っても、言葉の壁や距離の問題でなかなか難しい[17]。また、訪日ビザの問題もあり、テナントのビジネスマンは韓国ビジネスのように頻繁に日本に来ることも考えられない。中国現地で日本商品の常設展示場を設立すれば、その問題が解決される可能性がある。

表１　延吉市における繊維製品のバイヤーの状況

会社名	A社	B社	C社	D社
設立	1992年	1996年	1993年	2007年
登録資本（万元）	5,000	80	50	50
従業員数（人）	1,500	18	12	10
取扱商品	カジュアル（男女）	カジュアル（男）	カジュアル（男）、スポーツ関係	カジュアル（男女）
年間売上（万元）	20,000	1,360	1,200	360
輸入先	韓国（８工場、３商社）	韓国（５工場、４商社）	韓国（７工場）	韓国（３工場）
販売状況（万元）	大連市（4,000） 延吉市（6,000） 和龍市（1,000） 図們市（1,500） 琿春市（2,000） 敦化市（2,000） 安図県（1,000） 汪清県（1,000） 龍井市（1,500）	大連市（200） 瀋陽市（230） 長春市（20） ハルビン市（170） 延吉市（350） 龍井市（20） 和龍市（20） 汪清県（40） 図們市（20） 安図県（20） 敦化市（40） 琿春市（50）	大連市（100） 瀋陽市（100） ハルビン市（100） 長春市（200） 延辺州（700）	瀋陽市 長春市 延辺州

（出所）2008年12月に延辺大洋会社を通じて実施したアンケート調査の結果より[15]。

[15] D社に関しては筆者の直接のインタビューより、2009年６月17日実施。
[16] 現実には日本とのビジネスは韓国と同じようなモデルを構築するが難しいと予想される。言葉・ビザの関係で中国のビジネスマンたちの来日は容易ではない。また、日本の繊維メーカーはOEM生産を行っている企業が多く、このようなきめ細かい対応が難しいと指摘されている。
[17] 延辺大洋会社へのインタビューより、2009年２月22日実施。

日本商品常設展示場の設立について、延辺大洋会社はこのような課題の解決に向けての有効な方策として期待している。

４．２．２　日本商品常設展示場のビジネスモデル

常設展示場の展示スペースは、延辺大洋会社が高級デパート（新時代ビル、写真３）の一部を賃借し、出展する日本のメーカーに転貸する形である。展示場には常に日本商品を置き、販売も行う。さらにバイヤーから大量の注文があれば、延辺大洋会社を通してすぐに日本のメーカーに発注される仕組みになっている。代金の決済は最初の段階では延辺大洋会社との間で行われるが、バイヤーと日本メーカーの信頼関係が生まれれば直接決済することも可能である。延辺大洋会社は日本商品の輸入代行を行うほか、常設展示場の運営、宣伝、商品説明スタッフ教育なども担う。さらに、より多くのバイヤーを引きつけるために、販売イベントを主催し、日本メーカーの中国側代理人として営業活動を行う。

このようなビジネスモデルは日本のメーカーにかかる負担を少なくしている。メーカーは展示面積に応じた賃借料と一部の宣伝費用を負担することで、自社製品の中国進出が可能となる。さらに、県などの公的機関の支援があれば、賃借料と宣伝費用の負担が軽減されることも考えられる。日本側における生産、輸出、輸送体制が整えば、注文があった時、すぐにでも中国に製品が提供できる。

延辺大洋会社は中国国内の宣伝や営業活動を行うほか、より多くの日本企業が常設展示場に出展するよう、日本側に求めている。出展の日本企業が増えれば、日本製品集積地としての知名度が向上し、集客の拡大で取引額が増え、常設展示場としての効果が大きくなる。延辺大洋会社は将来的に日本商品常設展示場を日本製品卸センターに発展させることも視野に入れている。

写真３　日本商品常設展示場候補地の新時代ビル

（出所）筆者撮影（2009年８月28日）

５．日中地方間の経済連携における課題と解決策についての考え方

これまで新潟県見附市のニット関連企業と吉林省延吉市延辺大洋会社とのビジネス連携の事例を紹介した。現段階では、日本商品常設展示場の設立の合意までであり、ニット製品の輸出には至っていないが、ビジネス交流の拡大に向けた大きな一歩と言える。特に、中国の地方都市において、強い販売ルートを持つ現地の会社と連携し、日本商品の常設展示場を設立するという事例は、日中の地方間経済交流に大きな意味を持つと考えられる。

５．１　中国進出における内陸都市への関心

近年、中国の経済成長率は西部・中部地域が高く、東部地域が比較的低い「西高東低」の構図になっている[18]。内陸地域は経済の成長に伴い、消費市場としても発展している。本稿で取り上げた吉林省延辺州の事例で示すように、今後は中国の内陸地域の市場開拓が重要になっていく。

上海・北京などの大都市は世界の小売業者が続々と参入し、全世界からブランドが集まる激戦区となっている。上海のデパートに欧米の有名商品が並び、知名度のない製品を売るのは至難の業と言われている[19]。それに対して地方都市は近年、急速な経済成長を実現し、生活レベルが向上している。日本製品の参入は全体的に少ないが、人々の消費力が増強して日本の商品をほしがっている[20]。延吉市の例を考えると、韓国製品は進出しているが、日本製品はほとんどない状況である。一方、日本製品の品質･デザイン･安全性に対する評価は地方都市の延吉市においても高く、日本商品の常設展示場の設立に地元のマスコミから大きな関心が寄せられた。東洋学園大学の朱建栄教授が指摘したように、「今後の注目市場は中国内陸部、その上で、両国の地方都市間の経済交流が鍵を握ってくる」[21]。日本の地方経済にとって中国の内陸都市の重要性はますます高まっていく。

[18] 関志雄「中国における国内版雁行形態の展開」『世界経済評論』Vol.53、2009年８月、31ページ。
[19] 佐藤千歳「中国市場開拓、道半ば」『北海道新聞』2008年12月９日。
[20] 莫邦富「地方にチャンスがあるのに」『朝日新聞』、2009年３月21日、土曜版。
[21]「地方都市交流が鍵」『山形新聞』2009年７月30日。

５．２　強い販売ルートを持つ現地会社との連携の重要性

本事例で示すように、延辺大洋会社は各テナントを通して全国に幅広い販売ルートを持っている。延辺大洋会社と連携すれば、そのルートが利用可能となる。日本の地場産業の中国進出は、最初から販路を意識し、幅広い販売ルートを持つ現地会社との協力が有効であろう。

日本の地場産業の中国進出は一般に､不特定のバイヤー･消費者を対象しているため、具体的な商談に結び付けることが難しい。それに対して延辺大洋会社のような販売ルートを持つ会社と連携することが可能な場合、確実で安定的なルートを利用することが可能となる。さらに本事例では、各テナントのビジネスマンが商品と市場に精通しており、プロフェショナルな立場での助言も期待できる。日本のメーカーは延辺大洋会社を通じ、各テナントから伝えられる市場の情報とアドバイスを吸収し、中国の市場変化に対応する商品生産を行うことができる。

以上の事例から、中国で販売ルートを持つ会社との連携の重要性が確認できる。中国で販売ルートを持っているのは卸センターのほか、大型デパート、量販店、商社も挙げられる。このような商業組織は全国の地方都市に存在している。アプローチの仕方として地方の政府や国際貿易促進委員会を通じてコンタクトを取る可能性が考えられる。

６．むすびにかえて

今回の延辺州と新潟県見附市の見附商工会とのビジネス交流事例に関し、筆者は延辺大洋会社との連絡業務を中心に携わってきた。本稿では、この事例を通して見えてきた日中間の地方経済の交流に関し、中国内陸都市への関心と販売ルートを持つ現地会社との連携の重要性について述べた。中国の大都市では競争が激化し、経済の成長が内陸部に及んでいる。日本の地場産業にとって、地方都市への視点と販売ルートを考える意味で、今回の事例は従来の課題の一部を克服する形で提示されており、今後の発展を見守っていきたい。また、本稿では新潟県見附市のニット産業が中心であったが、金属洋食器、食品などほかの県産品、他県産品に関しても同様なアプローチが可能であり、日本商品常設展示場の発展を期待する。

The Potential for Regional Economic Coordination between China and Japan: The case example of business exchange between Niigata Prefecture and Yanbian Korean Autonomous Prefecture

MU, Yaoqian
Researcher, External Relations Division and Research Division, ERINA

Summary

The internationalization and stimulation of local industry in the regional economies of Japan has long existed as a major issue. In the meantime, although there is an impact from the financial crisis for neighboring China, that country has maintained a high economic growth rate, and the level of consumption of its people has been rising ever-increasingly. For Japan's regional economies the expansion into China of local products will bring vitality to regional economies, and without doubt contribute to the stimulation of industry.

Currently, promotion campaigns for Japanese manufactured goods in China are concentrated in major cities, such as Beijing and Shanghai, and the interest in regional cities is low. Accordingly, the competition among Japan's regions in the major cities has grown intense, and even if they invest considerable money and effort in publicity campaigns, it doesn't necessarily mean a good outcome will result. Additionally, promotional campaigns mostly take the form of the dispatch of inspection missions, participation in trade fairs and the staging of fairs for a prefecture's manufactured goods, and it has been highlighted that the signing of agreements is difficult, even with an interface of business talks. In this paper I seek a universal measure for the solution of the above problems, moving from an awareness of the issues to looking at China's regional cities, and pointing out the importance of coordinating with local firms which have sales routes in China.

In the Yanbian Korean Autonomous Prefecture in China's Jilin Province—being an area where concentrations of ethnic Koreans live—economic exchange with the ROK, from the proximity in language and culture, is actively taking place. To date the importing of ROK manufactured goods, and the selling thereof wholesale throughout China has grown into sales centers for well-known ROK manufactured goods all over the country. In recent years, people's consumption level has risen, through the spectacular economic growth, and the demand for better-quality Japanese manufactured goods, even though high-priced, has increased. The Mitsuke City Chamber of Commerce and Industry in Niigata Prefecture has seized this as an opportunity, coordinated with the local Yanbian Dayang group of companies which possesses a broad range of sales routes, established a permanent space to display Japanese manufactured goods in the prefectural capital of Yanji City, and launched expansion into China of the city's knitwear products.

In this paper I seek possibilities for international coordination in regional economies, raising a case example of such business exchange between regions in China and Japan. Moreover, in addition to having summarized the series of moves in the above-mentioned case example and having investigated the division of roles by the parties concerned, I would like to point out the future challenges. Of course, the importance of interest in the regional cities of China which I have raised in this paper, and of coordination with local firms which possess sales routes, is not the only way of thinking for solving the problems, and I anticipate many more findings.

[Translated by ERINA]

中国東北三省における優先開発区の現状と課題
－吉林省の事例を中心に－

中国人民大学 区域与城市経済研究所博士課程　常艶

【要旨】

優先開発区（Priority Development Zones）という概念の提起は、中国地域政策において大きな革新である。現在、優先開発区について政府の積極的な推進・取り組みが見られると同時に、社会科学研究分野においても注目されつつある。

吉林省は中国東北三省の中心部に位置し、2007年から同省の優先開発区の策定に取り組み始めた。しかし、優先開発区の策定は極めて複雑かつ総合的な作業のために、現在なお策定作業の促進を図る段階にあり、長期的なプロセスを要する。

本稿は、まず吉林省の優先開発区の全体計画を俯瞰した上で、同計画が直面している主な課題として、①基礎的かつ技術的な内容が雑多であること、②関連政策の具体化及び施行が困難であること、③行政の機能分担関係が複雑であること、④他の事業計画との関連付け、調整が困難であることなどを指摘している。

吉林省の優先開発区計画が抱える課題は、中国東北部の各省において共通しており、優先開発区計画には未熟な部分がある上、中国地域政策の体制的な要素もあって、吉林省のみで解決可能な課題ではない。そのため、優先開発区の策定作業は段階を追って進めるべきである。今後、理論的･政策的な諸課題に対して、全面的かつ深く掘り下げて研究する必要がある。長期的には、中国地域政策の抜本的改革に向けて取り組むことが重要である。

１. はじめに

「優先開発区」という概念は、2005年の「中共中央国民経済･社会発展の第十一次五カ年規劃の制定に関する意見」及び2006年の「中華人民共和国国民経済・社会発展第十一次五カ年（2006～2010）規劃綱要」において初めて提起された。

2007年７月に、中国国務院（中央政府）は「全国優先開発区規劃の編制に関する意見」（以下、「意見」とする）を公表した。その中で、「第一に、各省・直轄市･自治区は各地域の優先開発区計画の編制を取り込み､異なる地域資源･環境制約への対応能力、既存の開発密度及び発展の潜在力に基づき、国土空間を最適化開発、重点開発、開発制限、開発禁止の４種類に分け、優先開発のレベルを確定し、開発の方向を明確にすること。第二に、開発レベルをコントロールし、開発の秩序を規範化すること。第三に、開発政策を完備させ、人口･経済・資源環境と協調できる開発空間の分布を次第に形成させること」と明記された。そして、「優先開発区」が提出されてから、国家レベルで積極的に進められるとともに、研究分野においても注目されつつある。

吉林省は地理的に北東アジアの中心部にあり、北は黒龍江省、南は遼寧省、西は内モンゴルに隣接する。2003年の「東北地区等旧工業基地振興戦略の実施に関する若干意見」及び2007年の「東北地区振興計画」により、東北振興の重要な対象地域として、吉林省の経済は近年大きく成長した。

中国の優先開発区計画は、国家レベル（国家優先開発区計画）と省レベル（省優先開発区計画）によって構成される。そのため、市レベルには優先開発区がなく、また東北三省を１つの優先開発区として編制する必要もない。優先開発区計画は、東北振興に地域開発の枠組みと方向性を提示するだけでなく、さらに地域経済政策の制定・実施の目標を明確化させることができる。吉林省の優先開発区計画は、同省または東北三省の経済発展に大きな影響を与えており、すでに具体的な策定プロセスに入っているものの、抱える課題や困難も多い。

２. 吉林省優先開発区建設の現状

前述のように、優先開発区には国家レベルと省レベルがある。このうち、省レベルの優先開発区計画には、主に２つの機能がある。第一に、国家優先開発区の計画にしたがって、当該行政区域（省・直轄市・自治区）範囲内にある国家優先開発区計画と一致させ、国家優先開発区の数、立地とエリアと抵触させないようにする機能である。第二に、該当行政地域にある国家優先開発区以外のエリアについて、国が定めた原則に基づき、該当地域の実状に合わせて省レベルの優先開発区として区画する機能である。したがって、省レベルの優先開発区計画は、機能的に国家優先開発区計画の指導と利権の調整に従わなければならない。また、空間的には省レベルの優先開発区計画が国家レベルの優先開発区計画と互いに補い合い、最終的に優先開発区の計画を中国全国に普及させる必要がある。

2009年４月現在、国家優先開発区計画の編制は概ね完成されているが、訂正・改善作業が続いており[1]、その公表が先延ばしされている。他方、吉林省は2007年より省内の優先開発区の策定作業に取り組んだ。この作業は経済、社会、資源・環境などの分野と行政機関にかかわるため、複雑性、総合性の特徴を有している。そのため、吉林省の優先開発区は依然として計画の推進段階にとどまっており、今後長期的なプロセスが必要となる。

２．１．優先開発区計画の基本的な考え方

優先開発区計画は、主に評価指標の確定、国土空間の評価、優先開発区の区画、機能の位置づけの確定、政策措置の明確化という５段階に分けられる。その中には、基本ユニットの選択、指標システムの設定、優先開発区の区分、関連政策の策定などの重要な内容が含まれる。その詳細については、表１を参照されたい。

２．２．吉林省優先開発区計画の初歩的配置

発展潜在力、環境制約への対応能力、既存の開発密度という指標を総合的に考慮し、マクロ政策と実行可能性に基づき、吉林省の郷・鎮を基本ユニットとし、９つの「地級市」、42の県（県級市）を４大優先開発区に区画する[2]。うち、最適開発区と重点開発区は開発機能区に、開発制限区と開発禁止区は保護機能区に分類されている。

省レベルの最適開発区とは、省内にある国土開発の密度が高くて資源・環境制約への対応能力が低下している地域を指し、次の２種類に分けられる。一番目は開発密度が高い都心部である。たとえば、長春市、吉林市の都心部、旧工業基地振興に伴って産業構造の調整が行われる中心エリア、または「棚戸区（スラム街)」の改造が必要とされるエリアである。二番目は産業構造の転換を図る資源型都市である。たとえば、遼源市、延辺朝鮮族自治州、白山市、通化市などの鉱山、森林地域である。

表１　優先開発区のキーポイント

キーポイント	内　容	備　考
基本ユニットの選択	国家レベル上の４種類の優先開発区は原則として県レベルの行政区を基本ユニットとする。「開発禁止」区域は法的に規定されているエリアあるいは自然境界によって確定される。省レベルの優先開発区計画は原則として県レベルの行政区を基本ユニットとする。	優先開発区計画の策定は、行政区域の境界を打破し、行政区に基づく地域政策と業績評価方法を変える必要がある。そして、優先開発区計画の実施は、一定レベルの行政機関が行うべきである。
指標システムの設定	全国統一の指標システムを採用し、資源・環境制約への対応能力、既存の開発密度、発展潜在力という３つの要素を総合的に判断する。	⑴資源・環境制約への対応能力とは、自然生態環境が被害を受けず、良好な生態環境を維持できるという前提で、特定区域の資源賦存と環境容量によって経済と人口規模を受け入れる能力である。主に水、土地など資源の豊富さ、水と大気などの環境容量、水と土の流失と砂漠化など生態、生物の多様性と水源の蓄積量などの生態重要性、地質･地震･気候･あらしなど自然災害の発生頻度である。⑵既存の開発密度は、主に指定地域の工業化･都市化のレベルを指す。土地資源と水資源の開発強度も含む。⑶発展潜在力は、一定の環境対応能力に基づく特定の地域の潜在的発展能力である。具体的には、経済･社会発展の基盤、科学教育レベル、立地条件、歴史と民族など地政学要素、国家と地方の戦略選択が含まれる。
優先開発区の区分	指標システムが設定されてから、地理情報システム（GIS)を使って、国土空間を総合的に分析・評価する。最適開発区、重点開発区、開発制限区、開発禁止区の数、立地、範囲を確定する。	⑴最適開発区は国土開発の密度が比較的高く、資源・環境制約への対応能力が低下しているエリアである。⑵重点開発区域は資源・環境制約への対応能力が強く、規模経済と人口集中の条件がよいエリアを指す。⑶開発制限区域は資源・環境制約への対応能力が弱く、規模経済と人口集中の条件が悪く、広範囲の生態安全に影響を与えるエリアである。⑷開発禁止区は法律に基づいて設立した各種の自然保護エリアを指す。
関連政策の策定	優先開発区の立地と区分によって地域政策とその効果を評価し、開発秩序を規範し、合理的な開発案を策定する。	優先開発区の機能設定に従って、財政政策、投資政策、産業政策、土地政策、人口管理政策、環境保護策、政策と行政評価制度を整備する。

（出所）「中華人民共和国国民経済・社会発展第十一次五カ年（2006～2010）規劃綱要」、「国務院関於編制全国主体機能区規劃的意見」（国発[2007]21号）より作成。

[1]「国家主体機能区規劃為何遅遅未能推出」『人民網』（URL：http://gd.people.com.cn/GB/123946/9109672.html、2009年４月10日アクセス）。
[2] 馬明印・林航「関於吉林省主体機能区規劃的思考」『経済視角』2007年第12期、48ページ。「吉林省主体機能区規劃専欄」2002年３月10日付（www.jlgis.net/gh/ ６K）。

省レベルの重点開発区は、省内にある資源・環境制約への対応能力が強くて、規模経済と人口集中状況が比較的高い地域を指す。重点開発区には、一定の都市化と工業化の基盤を有し、少なくとも一つの省内中心都市を有する次の２種類の地域が含まれている。一つは省内中部の中心都市の密集区であり、具体的に中部都市群と交通幹線沿線にある一部の地域である。もう一つは、経済発展が比較的速くて産業基盤が相対的に優位性かつ潜在力を持つ「東北東部鉄道沿線地域」及び「図們江地域開発区」である。

省レベルの開発制限区は、資源・環境制約への対応能力が比較的弱い地域、生態環境の悪化が深刻化している地域、または省内の生態系と食糧安全保障に関わる地域を指し、主に次の３種類が含まれる。一つ目は、生態環境が脆弱で大規模な開発に適しない吉林省西部の一部地域である。二つ目は、生態保護区の周辺地域であり、長白山生態保護区の周辺にある延辺朝鮮族自治州、白山市の一部の県（県級市）も含まれる。三つ目は、水源保護地などの開発制限区である。

省レベルの開発禁止区は、法律に基づき設立された省レベルの自然保護区、歴史文化遺産、重要観光地、森林公園、地質公園と重要水源地などを指しており、西部の草原湿地、東部の長白山生態保護核心区などが含まれる。

３. 吉林省優先開発区の直面する主な困難と課題

優先開発区は中国地域政策において大きな革新であるが、推進プロセスに様々な問題や困難を伴う。吉林省の優先開発区計画が直面する主な課題として、①基礎的かつ技術的な内容が雑多であること、②関連政策の具体化及び施行が困難であること、③行政の機能分担関係が複雑であること、④他の事業計画との関連付け、調整が困難であることなどが指摘される。

３．１．繁雑な基礎的、技術的作業

全国の総体的要求に基づき、吉林省の優先開発区計画の任務は、主に環境への対応能力、現在の開発強度と将来の発展潜在力の指標から構成される指標システムを用いて、同省の国土空間を評価するものである。これらの指標は、自然、経済、社会などの要素に関わっており、空間の資源、環境、人口、経済、社会などに関する大量の基礎データを要するため、複雑で膨大な数の基本作業が求められる。

吉林省が郷・鎮を選んで優先開発区区分の基本ユニットとしているのは、①地域の特徴を最大限に抽出すること、②優先開発区内の地域間格差を軽減させること、③違う地域に対してさらに有効な分類指導・管理を実施することに効果があることによる。一方、区分作業が膨大な量になるという課題がある。また、現場状況からみると、郷・鎮レベルでは人口、面積、地域内総生産などのデータを除いて統計資料がそろっていない。つまり、優先開発区の区画に必要とされる経済、社会、資源、環境など各方面の指標が欠乏しており、優先開発区の活動展開に大きな困難を招くことになる。

この他、「資源・環境制約への対応能力と将来の発展潜在力」という項目は数量化されにくい。数量化しても主観的な判断が必要なので、区分の科学性と権威性についての論争が起きる。手間隙のかかる基礎的、技術的業務を着実に行っておかなければ、主観的な区分になってしまう。同時に、編制の主体は吉林省の発展・改革に関わる行政部門であり、経済社会発展とマクロ政策の運営に偏重しているため、空間区分の問題に対して経験が不足している。そのため、基準が統一されておらず、空間の境界が画定されにくい[3]。

３．２．分類管理に関する政策策定の難しさ

優先開発区計画の実施のキーポイントの一つは、関連政策・措置の策定と施行である。優先開発区の具体的な状況に応じ、財政、投資、産業、土地、人口管理、成績評価など一連の政策システムを構築する必要がある。

国家レベルにおいて、優先開発区の関連政策及び評価基準については、既に基本構想が備えられた。しかし、７つの関連政策（財政、投資、産業、土地、人口、環境と実績・効果の実証）は、複数の行政部門に及んでおり、既存の政策体系と相互交錯しているため、短期間での調整が難しく、さらにそれを細分化して実行可能な具体案を提出することは困難である。とりわけ、開発制限区、開発禁止区の場合は補償メカニズムの必要性も生じる。現在、生態補償、資源供給、開発、消費に関わる利益均衡メカニズムは、主に中央政府による財政移転支出という縦割り行政の補償方式に頼っている。しかし、補償基準は比較的低く、政策的には一部の部署とのかかわりが強く、利益関係者による十分な参与が不足している。科学的かつ合理的な業績評価と監理のメカニズムも欠如している。なお、横の補償、すなわち受益側が損失を受けた側に対して補償を提供するメカニズムはまだ樹立されていない[4]。関連の実行可能な奨励メ

[3] 汪勁柏、趙民「論建構統一的国土及城郷空間管理框架」『都市規劃』第32巻、2008年第12期、42ページ。
[4] 方忠権「主体機能区建設面臨的問題及調整思路」『地域研究与開発』第27巻、2008年第６期、30ページ。

カニズムを発表する前に、中央政府の働きかけと説明だけでは、中央政策の有効な施行を保障することは困難である。

吉林省は東北振興政策の対象範囲内にある。経済振興策に関して中国政府は一連の優遇政策を発表しており、吉林省は省を挙げて発展しようという期待感が高まっている。しかし、優先開発区の区分は空間開発の秩序に対する管理・制限であり、最適化開発区、開発制限区、開発禁止区はいずれも経済・産業発展に対して制限やマクロコントロールを設けている。このため、どちらの政策を取るか、如何にその政策の実効力を高めていくかは、省レベルでの優先開発区計画の策定に大きな影響を及ぼす。また、国家の優先開発区を関連政策が明確化・具体化する前に、省レベルの関連政策システムを設けることは極めて困難で、優先開発区計画の進行に影響を与えている。

３．３．複雑な行政関係、高い調整リスク

理論上、優先開発区の基本区分ユニットは、行政単位にこだわらず、主に資源・環境制約への対応能力、既存の開発密度と発展の潜在力によって区分する必要がある。しかし、現実に行政区域を跨った場合、政策実行、監督・管理を行う主体がないために、有効な政策実施が困難である。したがって、多くの優先開発区の区分作業は依然として行政区分に依存せざるを得ない。

吉林省の優先開発区計画は、「省内の優先開発区計画の取りまとめ」、「全国及び隣接各省・自治区の優先開発区計画との調整作業」が重要である。その具体的なイメージについては、図１をご参照されたい。３つのレベル（①吉林省内各地域間の調整、②東北三省とその他の省・自治区・直轄市との関係調整、③吉林省と中央政府間の関係調整）の行政関係の調整が必要である。

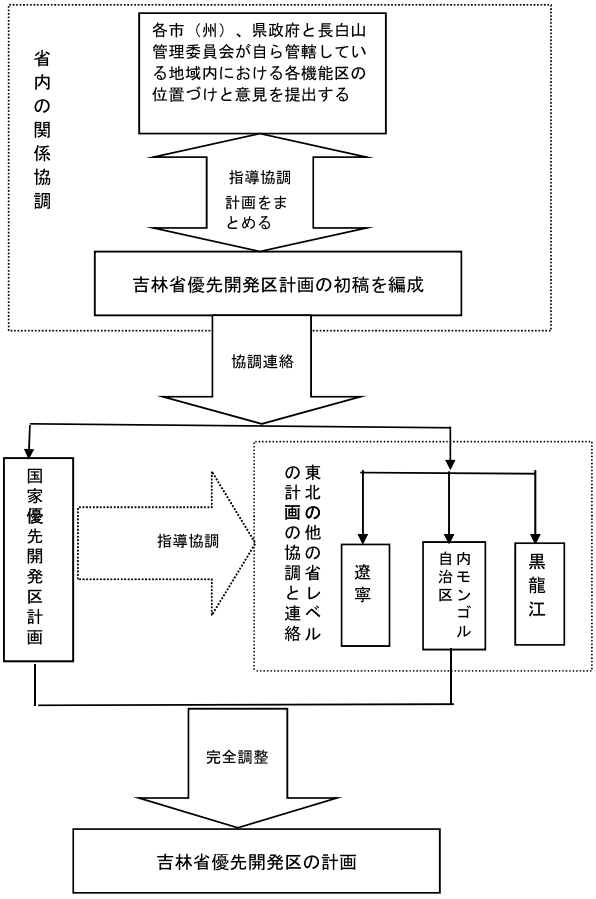
第一に、吉林省内各地域間の調整については、省レベルの優先開発区計画は吉林省政府主導で、各県・市政府が各郷・鎮をまとめる。そのため、優先開発区の数、立地と範囲を定める際に、多くの地方政府が管轄地域を重点開発地域として認定されることを期待し、地方保護を重視する結果、優先開発区計画をねじ曲げてしまう状況が生じやすいく、各地方行政の間では、優先開発区の計画をめぐって激烈な競争が展開されるものと予想される。

第二に、吉林省の優先開発区計画は、同省と隣接する遼寧省、内モンゴル自治区、黒龍江省との調整が必要である。各省・自治区との間では、重複建設、産業構造の類似傾向などの問題が深刻化しており、地域間の分業・協力が欠けている。また、同じく東北振興政策の対象エリアなので、競争関係にあって「各地方政府による独自計画の強行実行」といった事態は避けられないだろう。

第三に、関連政策はまだ具体化、明確化にされておらず、とりわけ開発制限区、開発禁止区では利益の共同享受及び補償のメカニズムが確立されていない。各地方政府はいずれも重点開発区に指定されるように懸命に努力しているが、中央政府による全体の関係調整と地方政府による名誉・利益の追求との間には大きなズレが見られる。そのため、吉林省と全国の優先開発区計画と整合には、利益関係の調整も含まれる。優先開発区計画に必要なデータ収集、処理業務が多いため、たとえ片方が調整に同意したとしても、なおかなり高い人的・物的コストを費やさなければならない。

総じて言えば、１つの行政区域（たとえば、郷・鎮・県・市）の内部調整を実施することは比較的容易だが、一旦行政区域の境界を跨って全省範囲内での協調を実現しようとすると難しくなる。省内の行政区域間での関係調整に比べ、省間調整作業が一層難しく、コストも高い。また、一つの優先開発区が幾つか同レベルの行政区域を跨ぐ可能性があるため、地域内の公共サービス、インフラ整備などをどちらの行政区が負担するか、または同レベルの行政部門間との

図１　吉林省優先開発区計画のプロセス及び行政関係の構成



（出所）筆者作成。

役割分担や共同分担は、地域発展が直面する利益衝突の問題である。このように複雑な行政間関係、利益調整のプロセスにおいて、優先開発区計画の難しさが理解できよう。

３．４．その他の計画との整合や調整の困難

吉林省では、優先開発区計画のほか、４つの地域計画が重要な空間管理の役割を果たしている。すなわち、東北振興計画、生態機能区計画、空間管制区計画および土地利用計画である。表２が示しているように、これらの計画はそれぞれ特徴を有し、各部門に区分され、異なる機能や手段を持っている。そのため、具体的な空間利用及び開発順番などについて、ジレンマやトラブルが生じることは避けられない。

「国務院関於編制全国主体機能区規劃的意見」では、全国の優先開発区計画が地域計画、都市計画、土地利用計画、環境保護計画、生態建設計画などの基本的な根拠となる。全国の優先開発区計画の編制はこれらの計画の指針となり、かつ政策、法規および実施管理など整合業務を行うことを明記した。しかし、それらの計画の整合方法やトラブル解決の手続きなどは明確に規定されていない。空間計画システムの全体設計や関連制度の整備が不十分な状況において、この種の「整合」に対する法律・規定は文献レベルにとどまっており、現場では多くのトラブルに遭う。

「東北振興計画」は、中国政府によって正式に審査、許可された中国最初の地域発展計画である。その中では、初めて東北経済戦略の全体目標が提出された。そのため、重要性と影響力は言うまでもない。東北振興計画と優先開発区は、共に総合的計画であるとはいえ、重視される要点が異なる。すなわち、優先開発区計画は空間的指導、制限を重要視しており、開発秩序への規範及び分類管理の区域政策の実施により、人口、経済、資源環境が調和のとれた空間開発を次第に形成させていく。一方の東北振興計画は、地域開発の最適化、優先開発区の推進に触れたものの、現段階では中国東北部が直面する主要問題の解決に焦点を当て、東北振興を主要な目標として計画を実施していくことを強調している。

また、優先開発区計画は「東北三省」のように大きな範囲の区分方法を変え、空間分布では連続状態も分割状態も可能である。そのため、空間的に開発類機能区と確定された大きな地域には保護類機能区が含まれることもあり得る。行政上の実績審査・評定システムでは、産業の振興、地域内総生産の成長促進といった内容が歓迎されており、具体的な発展内容や方式においては、意見の不一致や対立が生じてくる。

その他、吉林省の優先開発区計画のプロセスにおいて、同じ分類の優先開発区のエリアは、いくつの県・市を跨る可能性がある。このため、内部均質性は相対的に低い。これらの地域には非優先開発区（従来の開発区、工業パーク、保護区などの具体的な機能）が存在するが、優先開発区計画のサポート状況からみると、付属的な地位に降格すべき

表２　空間管理に関連する５つの計画の比較一覧表

	特性	所属部門	関連法律	機能	手段
優先開発区	総合機能区分	発展改革委員会	－	空間開発の秩序を規範し、４種類の優先開発区に対して分類指導と管理を行う。	財政、人口、土地、投資、環境、金融、政策、業績評価などの政策措置
東北振興計画	総合機能区分	発展改革委員会東北振興司（元国務院東北振興弁公室）	－	中央政府の戦略意図を説明し、政府活動の重点を明らかにする。市場の主体行為を牽引する。全体的な振興ビジョン、主要目標、発展方向を確定する。地域発展の重要な部分を調整し、東北振興策を進展させる。	都市社会保障システム、財政税収政策を完備させ、投資体制の改革を深化させ、地域調整と計画実施のメカニズムを構築する。
生態機能区	特別機能区分	環境保護部	中華人民共和国環境保護法	生活環境と生態環境を保護・改善し、汚染・公害を防止する。	自然と環境ファクターの評価
空間管制区	全体計画または都市計画における特別計画	住房城郷建設部	中華人民共和国城郷規劃法	国土開発のマクロコントロールを強化する。	計画水準の条例と規則
土地利用計画	特別機能区分	国土資源部	中華人共和国土地管理法	土地需要を調整し、限られた土地資源を合理的に利用する。特に農業用地の保障を行う。	年度計画の管理、計画編制と成果管理、計画実施・管理、開発プロジェクトの管理、計画の追跡監視・効果測定

（出所）「中共中央、国務院における東北地区等旧工業基地振興戦略の実施に関する若干意見」、「東北地区振興計画」、「土地利用の全体計画修正に関する前期作業の意見」より作成。

である。そのことにより、具体的な機能強化、一部機能の弱体化が可能となろう。これらの調整は具体的な利益・トラブルの問題に関わる。

４．現段階の結論と今後の展望

既述したように、優先開発区計画を策定するプロセスにおいて、吉林省は依然として大きな困難に直面している。この点は、東北三省と他の省・直轄市・自治区においても普遍性を持つ。その原因については、優先開発区計画の未熟さに加えて中国の地域管理体制にも起因する。そのため、決して吉林省一省だけの力で解決できる問題ではない。このことは、優先開発区の建設は、「漸進的に推進する」プロセスであり、優先開発区計画の理論と政策の問題については総合的に、深く掘り下げて研究すべきであることを意味している。長期的な観点で、中国の地域管理体制を根本的に改革し、完備していくことを提案する。

第一に、優先開発区計画に関連する理論や政策問題を掘り下げて研究し、優先開発区の建設を漸進的に推進する。優先開発区計画の提出は、中国地域管理政策の一つの大きな革新であり、大きな進歩でもある。しかし、学界においては、優先開発区に対する研究はまだ少ない上、理論や方法、政策に関する研究は遅れており、計画と政策のニーズに答えていない。したがって、最近の状況からみると、専門家、政府役員、NGO組織が共同して地域政策研究院を設立する必要がある。各地域、とりわけ試験地域（江蘇省、浙江省、湖北省、河南省、雲南省、重慶市、新疆ウイグル自治区、遼寧省）の経験と照り合わせながら、優先開発区の基本ユニットの区分、指標の選択、地域のレベル、関連政策、調整メカニズム及び立法の理論・実践問題を体系的に研究する必要がある。優先開発区の建設を着実かつ漸進的に推し進めていくために、優先開発区計画を編制する科学性と合理性を充分に保障すると同時に、空間の管理と分類の調整・コントロールを実現し、人と自然と調和のとれた発展を促進し、開発秩序の政策を規範化することが求められている。

第二に、区域管理体制を改革し、完備させる。先進国の地域管理の経験、教訓とその理論化によると、優先開発区とは、単に地域管理体制を整備するプロセスの一環であり[5]、現段階において中国の地域管理の主な問題とジレンマに合わせて提出した政策措置の一つであるにすぎない。長期的にみると、地域間協調発展という戦略目標を実現するために、地域管理は最終的に地域政策に働きかけられるものとして、「標準地域」、「問題地域」という２つの枠組みを導入する必要があると考えられる。標準地域とは、地域名称が標準化・コード化され、その範囲が比較的固定され、地域政策と計画策定の基礎となる多層の計画地域システムである。他方、問題地域（Problem Regions）または問題エリア（Problem Areas）とは、中央政府の区域管理機構が一定の原則と順序によって確定した援助対象地域であり、一つ（あるいは多数）の問題を抱え、中央政府の援助なしでは立ち直れない地域である[6]。今後、標準地域と問題地域の枠組みを明確にした上で、地域政策、監督・評価メカニズムを確立し、科学的かつ合理的な地域管理体制を次第に形成させていくことが重要である。

【2009年６月付の中国語原稿をERINAにて翻訳】

[5] 張可雲「主体機能区的操作問題与解決方法」『中国発展観察』2007年３月、27ページ。
[6] 張可雲『中国区域経済政策』商務印書館、2005年３月、13ページ。

The Current Status of and Challenges for the Priority Development Zones in the Three Northeastern Provinces of China: Taking Jilin Province as an example

CHANG, Yan
Ph.D. Student, Institute of Regional and Urban Economics,
Renmin University of China

Summary

The raising of the concept of priority development zones is a major innovation in China's regional policy. Currently, at the same time as the government's active promotion and efforts regarding priority development zones being visible, they are continuing to be a focus of attention in the research sector also.

Jilin Province is located in the middle of the three northeastern provinces of China, and they began tackling the formulation of a priority development zone for that province in 2007. As the work for the formulation of a priority development zone is extremely complicated and comprehensive, however, they are currently still at the stage of trying to advance the formulation work, and it requires a long-term process.

This paper, after first giving an overview of the integral plan for the Jilin Province priority development zone, points out as the principal challenges which the plan is facing: 1) that the fundamental and technical content is a mish-mash; 2) that the substantiation and implementation of the associated policy is complicated; 3) that the relationships for administrative functional burden-sharing are complex; and 4) that the forming of links and coordination with the plans for other projects is complicated.

Regarding the challenges for the Jilin Province priority development zone, as well as there being an undeveloped portion in the priority development zone plan, common to each of the provinces in China's Northeast, there is also a governmental component in China's regional policy and it is not an issue solvable by Jilin Province alone. Consequently, the work to formulate the priority development zone should proceed on a step-by-step basis. It is necessary to do complete and deep-delving research on the various theoretical and political issues in the future. In the long term the making of efforts aimed at radical reform of China's regional policy is important.

[Translated by ERINA]

会 議・視 察 報 告

第３回太平洋経済会議

ERINA調査研究部部長代理　新井洋史

2009年７月25日、26日の２日間、ウラジオストク市（ロシア連邦沿海地方）において、第３回太平洋経済会議（The Third Pacific Economic Congress）が開催された。沿海地方行政府が主導して実施しているもので、2007年から毎年この時期に開催している。実際の会議自体は７月25日で、７月26日はロシア海軍記念日の記念行事見学などのプログラムとなっている。以下では、初日の会議について報告する。

会議は、全体会議（13:00～15:00）と４つの分科会（16:30～19：30）から構成されていた。分科会はそれぞれ別々の会場で開催された。配布された会議参加者名簿によれば、参加者は300名弱であり、外国からの参加者としては日本が最も多く参加していたようである。筆者は、前回の太平洋経済会議にも参加したが、参加者の顔ぶれから、より一層「沿海地方の会議」という色彩が強まったように感じた。

全体会議は、「アジア市場におけるロシアのポジショニング」というテーマで行われた。冒頭、プーチン首相、ミローノフ連邦院議長からのメッセージが披露された後、セルゲイ・ダリキン知事及びエリミーラ・グルバコーフスカヤ国家院保健委員会副委員長があいさつを行った。開会セレモニー終了後、セルゲイ・ダリキン知事、ウラジーミル・クヴィント教授（モスクワ国立大学経済校金融戦略講座主任）、アンドリュー・ブッシュ氏（モンリアル銀行金融グループ銀行部門エコノミスト・ストラテジスト）、ミハイル・シネリン氏（国家企業「開発・対外経済活動銀行」副会長）及び齋藤大輔氏（ロシアNIS貿易会ロシアNIS経済研究所研究員）が順次、発言した。

ダリキン知事は「アジア市場の転換下における沿海地方の2025年までの発展戦略」と題して発表を行った。その中で、沿海地方の重要戦略として、化石燃料加工センターの構築、運輸・ロジスティクス機能強化、都市機能の強化、国内市場志向産業の強化を指摘した。特に、化石燃料の加工に関しては、ナホトカ近郊に計画されている石油精製・石油化学工場や、７月31日のハバロフスク～沿海地方間天然ガスパイプライン起工式などを実例として挙げながら、ロスネフチ、トランスネフチ及びガスプロムの３社が合計２兆ルーブルもの投資を行う計画であることを強調した。クヴィント氏は、既存の「発展途上国」、「エマージング市場」などの定義には問題があるとして、独自の定義による「形成中市場（エマージング市場）」を提起している。ロシアを含めたこれらの国に共通しているのは「水」資源が重要であること、汚職が平等を阻害していることなどを指摘した。その上で、科学技術潜在力を活用すべきであると述べた。ブッシュ氏は、中国やインドの最近の経済情勢分析を紹介しつつ、今回の経済危機においてBRICｓは輸出依存型のもろさを示したと結論付けた。米国の経済回復は予想より早いかもしれないとの見方を示しつつ、問題はドルの信認がどうなるかであり、これには中国、インド、ロシアの外貨準備も絡んでくる点を指摘した。シネリン氏によれば、開発・対外経済活動銀行（略称：対外経済銀行）は、極東の資源プロジェクトを有望視しているほか、スホイの旅客機プロジェクトなどにも融資を行っている。中国の国有銀行や日本の大手各行などとも協力関係にある。今後、地方自治体が行う上下水道やごみ処理などのプロジェクトへの協力を強化する方針であり、10月から希望自治体の募集を行う予定である。齋藤氏は、近年日ロ間の貿易額が急速に増加してきたことを紹介したうえで、さらなる経済関係強化には物流の円滑化が欠かせないことなどを指摘した。

全体会議終了後は、４つの分科会が開催された。それぞれのテーマは、「燃料エネルギー産業と石油ガス精製：市場発展の予測と主要プロジェクト」、「極東の運輸ロジスティクスシステムとトランジット輸送：成長と発展の展望」、「人々に魅力的な都市＝未来の都市　アジア太平洋地域における都市化」、「金融及び実物経済セクター：競争的可能性と現存する協力の諸問題」であった。会場は市内に分散しており、筆者は極東大学図書館で開催された運輸分科会に参加した。

分科会のモデレーターは、極東海運研究所のヤロスラフ・セメニヒン所長が務めた。冒頭、主催者を代表して沿海地方行政府のイーゴリ・フルシチョフ産業運輸部長が挨拶を行い、引き続き同氏が沿海地方の運輸部門の概況を説明した。その後、ウラジオストク商業港のアレクセイ・トカチェンコ戦略発展部長、「APL CIS社」のウラジーミル・カシタノフ極東支社長、「ウラジオストクヴネシトランス社」

のタチアナ・コンコ社長、極東海運研究所のミハイル・ホロシャ海運振興部長らの地元関係者、さらには韓国交通研究院のコン・ヨンイン北東アジア北朝鮮交通研究センター長及び筆者の２名が外国からの参加者として発表を行った。全体を通じて、最も印象に残ったのは、運輸分野、中でも特にトランジット輸送に関わる法制度の不備を何人もの発言者が指摘していたことだ。会議での議論の要点は何らかの形でモスクワの連邦政府に伝えられるはずだが、是非、現場の声を踏まえた政策が展開されて欲しいものである。

ウラジオストクでは、2012年秋のAPEC首脳会合開催に向け、さまざまなインフラ整備が進んでいる。この「太平洋経済会議」も一連の流れの中で重要な役割を果たすべき会議のはずである。主催者の沿海地方行政府もそのように位置付けていると思うが、現実には縮小傾向にあるように感じられる。インフラ整備を進めることだけが、国際拠点都市に向けての準備ではないはずである。２年連続参加した者として、この会議には少し思い入れも湧いてきている（前回会議については、ERINA REPORT vol.84において、厳しい評価を含めて報告した）。次回、並びにそれ以降の会議がより充実したものになることを期待したい。

会議HPアドレス　http://www.pacific-congress.ru/

2009（フホホト）日中経済協力会議

ERINA特別研究員　鈴木伸作

日本と中国東北三省、内モンゴル自治区との資源・エネルギー、省エネ・環境及び緑色農業など各分野における日中経済協力の推進と、貿易投資の促進を目的に、内モンゴル自治区フフホト市において、８月６日～７日の２日間にわたって「日中経済協力会議」が開催された。

この会議は2000年に瀋陽市で第１回が開催されて以来、長春市、ハルビン市、仙台市など東北三省と日本を二巡し、昨年は新潟市で開催。今回で９回目を迎え、はじめての内モンゴル自治区での開催となった。

主催団体は、日本側が（財）日中経済協会と日中東北開発協会、中国側は内モンゴル自治区人民政府と東北三省（遼寧・吉林・黒龍江）各政府である。

会議には日本から両主催協会とその会員企業、経済団体、新潟県や秋田県、宮城県、北海道、新潟市などの地方自治体、中国駐在の経済団体、企業などから総勢170名、中国からは中国国家発展・改革委員会、商務部関係者や各自治区・省政府代表や企業など400名を超え、両国合わせて約600名が参加した。

写真：日中東北開発協会提供

会議は日中両国の主催者代表や地方政府首脳によるラウンドテーブルを皮切りに、資源・エネルギー、省エネ・環境、緑色農業、運輸･観光をテーマに４分科会が行われた。またこの会議に参加した日中地方政府間の会談も行われ、ビジネスデーとして主要市政府代表による各市のプレゼンテーションが組まれた。また会場内では併行して投資プロジェクト商談会、日中双方の産業・企業紹介などのパネル展示やパンフレットコーナーも設置され、中国側地方政府の積極的なPR活動が目立った。

最終日には、会議の概要と成果を盛り込んだ「2009日中経済協力会議備忘録」の調印式が日中双方の代表者により行われ、次回の2010年の会議は遼寧省で開催することが決定した。

会議終了後は、工業開発区や主要企業の視察が東ルート（ホロンバイル市、ハイラルの地下資源地域、ロシア国境地帯の満州里などの物流基地）と西ルート（包頭市、オルドス市などの経済開発区）に分かれて行われ、参加者が各地を視察した。

2007年秋以来、日中両国首脳の相互訪問と会談が頻繁に行われ、両国の政治的相互信頼の深まりとともに、中国国家プロジェクトである東北振興策の具体的な進展により、東北三省政府と日本との各分野における協力関係が緊密化してきた。特に、中国東北地域においては新幹線や高速道路などの交通インフラ整備が急速に進み、物流面での改善が東北地方の潜在的なポテンシャルを一層高めている。

今回の開催地である内モンゴル自治区は面積118万m2で日本の約３倍、人口は2,400万人でモンゴル族が500万人、

漢族1,600万人、その他少数民族300万人で構成されている。特に注目すべきは、域内総生産の伸び率が2002年から連続して中国トップとなっており、一人当たりの域内総生産は全国第８位、東北三省のトップである遼寧省も抜く高成長を続けている。中でも自治区内のオルドス市は2007年の一人当たりの域内総生産が75,021元で上海市の66,367元を大きく上回っている。

内モンゴル自治区は大草原や砂漠、牧畜業などの印象が強いが、石炭や天然ガス、レアアースなどの鉱物資源が豊富で、多大な投資の誘因となっている。

以下会議の概要について報告する。

１．日中東北首脳ラウンドテーブル

ラウンドテーブルは日中両国・東北地域の首脳により、「資源・エネルギー、省エネ・環境、緑色農業」など、具体的経済協力の可能性がある分野についての発言と意見交換がなされた。

発言では双方が各地域の経済現況と主要産業・分野などを紹介するとともに、日本側からは各地域が有する技術協力可能案件やその方法、中国側からも日本への経済協力案件など具体的な提案が多く出された。

以下、中国政府代表、日本側主催者代表のあいさつ及び中国東北三省一自治区の代表者の発言を紹介する。

⑴中国商務部参事官　牛興茂

ここ数年の日中首脳の頻繁な相互訪問によって中日間の戦略的互恵関係は新しい局面を迎え、相互に利益を勝ち取る互恵的な経済貿易協力構造が形成された。その結果2008年の両国間の貿易総額は2,668億ドルに達した。中国は日本の最大の貿易相手国であり、日本は中国にとって貿易では第３位、投資で第は２位となっている。特に東北地区は東北アジアの中心に位置し、経済発展において優位性と良好な条件を有しており、東北振興策の進展に伴い戦略的価値が一層高まっている。今後「共同発展、互恵Win-Win」の理念に基づき日中経済協力会議をプラットホームとして利用し、経済協力を進展してほしい。

⑵日中東北開発協会副会長　清川祐二

170名にのぼる日本側代表団が会議に参加することは、中国東北地方との交流の進展に日本側が強い関心と大きな期待を持っていることの表れである。厳しい世界経済の状況下ではあるが、日中両国はアジア、ひいては世界経済の回復の牽引役として、経済協力のさらなる推進を求められている。

昨年11月からの中国政府による４兆元の迅速かつ積極的な財政・金融策は、内需拡大や中国東北部の新幹線や高速道路などの交通インフラ整備を推進し、物流面で大きな効果が期待できる。

一方日本側としては、日本海横断国際フェリー航路が就航され、日本と中国東北部や周辺諸国間の貿易や観光の拡大が期待されている。日本と東北地方は連携協力して発展する新しいステージを迎えており、経済協力の推進は益々重要なテーマとなっている。フフホト会議はこれまでのテーマに「資源・エネルギー」と「緑色農業」分野を加え、両国間の新たな協力プロジェクトが誕生すること期待する。

⑶内モンゴル自治区主席　バトル

1947年５月、中国でも最も早く成立した自治区として、内モンゴル自治区は広大な土地と豊富な資源に恵まれ、地理的にも南北の結節点となっている。

西部大開発や、一部東地域は東北振興策などの国家プロジェクトに含まれ、少数民族地区への優遇政策も受け、2002年以来７年連続で全国１位の経済成長を続けている。

2008年の地区総生産量は7,761.8億元で全国第16位に上昇し、一人当たりの域内総生産は4,638ドルで全国第１位となり、投資をするための潜在力は大きい。

内モンゴルと日本との経済交流・合作を期待する分野は次のとおりである。

① エネルギー分野を利用した企業進出

石炭など10種類の鉱物資源の埋蔵量は中国のトップであり、天然ガス、非鉄金属やレアアース（希土）などの鉱物資源埋蔵量が豊かである。この資源を利用してエネルギー、石炭、天然ガス化学などの化学工業、鋼鉄や有色金属を利用した冶金工業が発展しており、この分野の企業の進出や先進技術の導入に期待している。

② 農畜産品の加工産業への協力強化

中国の食糧と農業畜産品の基地であり、食肉や牛乳の優良な緑色ブランドを持っている。日本企業の緑色農業畜産品生産基地、加工基地の建設と日本と中国国内への輸出力の強化に期待している。

③ 風力発電と高度先端技術の協力

④ 観光地の建設と近代的サービスの向上、日本の物流企業や金融保険業などの支店の進出や業務提携

⑤ 自然保護、森林・草原・湿地の保護・再生など、省エネルギー・環境保護面での協力と技術指導。

⑷黒龍江省副省長　孫堯

北東アジアは世界の中でも豊富な鉱産物、土地、森林、水資源、エネルギー資源を有しており、日・中・韓・露・朝・蒙の人口が世界の25.3％を占める大消費地でもある。中でも中・日・露・韓の４カ国のGDP総額は11億ドルで世界のGDPの20％、アジアのGDPの73％を占め、北東アジア

域内の関係強化は戦略的選択である。そして、中国東北３省・内モンゴル地区、ロシア極東、日本の北海道・東北にまたがる地域は「黄金の三角地帯」である。

中国では「東北地域旧工業基地振興戦略」、ロシアでは「ロシア極東ザバイカル発展プログラム」、韓国では「北東アジア自由貿易区」構想、日本では「北東アジア協力メカニズム構想」を打ち出している。

黒龍江省と日本の貿易額は全省の7.1％であり第６位、投資額も780項目3.79億ドルで第６位と低調である。黒龍江省と日本は相互補完性が強く潜在力も高い。共同で実務的な協力関係を築くべきだ。そのための積極的な協力分野として４点をあげる。

① エネルギー関係分野の協力
石油・石炭などのエネルギー資源の二次加工面の協力関係構築、新エネルギー・新材料・省エネ環境協力、循環経済、低炭素技術

② 日本のハイテク技術の譲渡

③ 日本企業の黒龍江省への協力関係構築の拡大

④ 日本の中小企業の黒龍江省進出

⑸吉林省副省長　陳偉根

吉林省は中国重要な加工製造、穀物生産、新興牧畜業の基地である。吉林省の全国での位置づけは、面積が中国全体の1.95％、人口は2,734万人で2.07％、2008年のGDPは6,424億元で2.1％と、３つの「約２％」で表現できる。昨年の金融危機の対応として①経済成長の促進、②工業発展、③不動産開発の促進及びハイテク産業の発展の支持、④全民創業の激励の政策措置を打ち出し、し09年の上半期の成長率は前年同期比11.5％の成長を遂げた。

吉林省には次の優勢がある。

① 工業の優勢

自動車、石油化工、農産品加工、電子情報、医薬、冶金建材、新材料及び設備製造の八大産業に力を入れている。中でも自動車産業だけで吉林省の総生産額の30％を占め、第一支柱産業である。

② 農業の優勢

2008年の農業生産は568億斤、全国１/25の耕地、１/10の穀物商品化。牧畜加工業ではアジア最大の肉牛加工企業（毎年50万頭の加工能力）を有し、農畜産品の付加価値加工は重要な発展項目である。

③ 生体と資源の優勢

自然資源が豊富であり、オイルシェル、珪藻土、珪灰石、ミネラルウォーターの生産埋蔵量は中国トップクラス、朝鮮人参、漢方薬、バイオ製薬の生産と研究は全国をリードしている。

④ 地理的位置の優勢

中国華北・東北地区、北朝鮮、韓国、日本、ロシア極東地域の中心部分に位置し、ロシアや北朝鮮と国境を接し、両国の港や税関とも通じて越境輸送が可能である。琿春～ザルビノ～新潟～東草の航路も開設された。モンゴルのチョイバルサンと内モンゴルのアルシャンを連結する中国～モンゴル鉄道が建設されれば鉄道、道路、海で繋がる北東アジア輸送回廊を作り上げることができる。

今後日本と期待する協力分野については下記の通りである。

① 電子情報産業

② バイオ産業

③ 新材料産業

④ 省エネ・排出削減およびエネルギープロジェクト

⑤ 環境保護

⑹遼寧省常務副省長　趙国紅

遼寧省は世界金融危機下、中国政府の内需拡大と東北振興策により、経済は安定してきた。09年上半期の総生産額は前年比11％増、消費財小売総額は同17.5％増、外国直接投資は同11％増と全国平均を上回る。遼寧省と日本との輸出入総額は147.7億ドルで前年比16.7％増、日本の出資企業設立数は6,400社、累計直接投資は96.84億ドルに上り、日本は重要なパートナーである。日本との経済協力で期待するものは、

① 遼寧省三大開放ブロックの投資建設への参加
沿海経済帯（大連、丹東、錦州、営口、盤錦）、瀋陽経済区（瀋陽、鞍山、撫順、本渓、営口、阜新、遼陽を含む中部都市群）、遼寧西部建設への投資・開発

② 工業分野での協力
設備製造、冶金、石油化学、農産物加工分野での日本産業技術の導入

③ サービス業の発展と育成

④ インフラ建設への参加
2,000キロ以上の鉄道線路、1,000キロの高速道路建設、瀋陽および大連空港の拡張建設工事と営口空港の建設工事への参加。大連港の30万トン油埠頭工事などへの資金供与と技術協力。

２．各分科会

会議は４分科会に分かれ、日中双方から問題提起と提案がなされた。

以下、各分科会での総括報告をもとに会議備忘録に盛り込まれた会議概要を紹介する

（2009（フフホト）日中経済協力会議備忘録から原文のま

ま紹介)。

⑴ 省エネ・環境分科会

中国側は風力発電、汚染物排出削減などを含む省エネ環境面での事業進捗状況及び需要について紹介し、日本側は先端技術や設備について紹介し、双方は協力プロジェクト推進のために広く意見交換した。今後は日中双方がビジネスマッチングや技術交流を通じて、協力プロジェクトを掘り起こし、投資拡大と協力機会の創出に力を入れる。

⑵ 緑色農業分科会

近年、日本は中国からの農産物輸入拡大が増加しており、その数量はすでに日本の年間消費量の10%前後を占めているため、食品の安全性などの問題を含め輸出入農産物の品質に対する日中両国の関心が高まっている。会議では、日中双方が有機農産物の栽培技術、循環型農業、商品の流通管理、販売ルートの開拓、食品の安全性確保などについて幅広く意見交換した。今後はさらに日中緑色農業協力を推進する。

⑶ 投資貿易分科会

日本側は主に中国東北地方で活躍している企業が、資源・エネルギー分野を含めて交流の協力の拡大について提言を行い、中国側は地域の優位性、資源の優位性を拠り所として、国の産業政策計画及び協力可能な分野について詳細な説明を行った。

今後は日中双方の地域間協力の分野を一層拡大し、投資貿易取引を強化する、

⑷ 運輸・観光分科会

日中双方は、各々の交通運輸業と観光業の発展状況、今後の展望について発言を行い、特に中国東北地方における貿易回廊の拡充、また水上シルクロードに続き日本海横断国際フェリーの就航などの日中間の交通輸送ルートの整備を重点として討論を行った。双方が日本と中国東北及び内蒙古地域の交通輸送網、観光業の発展と協力の推進に力を入れる。

３．所感

今回の会議に、日本からはこれまで以上に地方の自治体関係者や企業団体関係者が参加し、積極的に各地域のプレゼンテーションを展開した。地方自治体にとって、地域間競争の激化と地方経済活性化のために、国際経済交流、特に中国との経済交流拡大は高い関心と期待がある。

今回の会議は初めての内モンゴル自治区での開催でもあり、東北地方の主産業であり潜在的な重要課題であるエネルギーや環境問題、緑色農業分野について、活発な発言があった。特に省エネや環境分野については日本の高い先進的な技術力をもとに経済協力の具体的案件の成立への期待が双方にあった。また、緑色農業については日本の中国食品へのアレルギーを背景に、そのイメージの払しょくと日本の農産品の栽培技術や流通システムの導入など喫緊の課題について、共通した現状認識を持ち議論したことは次の会議につながる成果であったと考える。

特にこの２分野は日本側の参加者、特に東北地方自治体からも協力・交流可能な関心ある分野であり、積極的なプレゼンテーションがあったことも意義があった。

また、中国東北地域の物流・交通網の急速な整備により、両地域間の貿易の拡大と人的交流面で国際観光振興への期待が一段と高まっていることも感じた。

中国側からは日本側の中国への投資や企業進出が他国と比較してまだ少数・小規模に留まっていることへの不満と、同時に今後の投資・合作、技術交流の進展への要請が随所で表明され、日本への経済協力の期待の高さと熱望を改めて認識した会議であった。

中国黒龍江省チチハル市産業調査

ERINA調査研究部研究員　朱永浩

2009年８月２日～15日の間、チチハル市地域産業研究訪問団の一員として中国黒龍江省チチハル市を訪問した。今回の視察団（団長：一橋大学大学院商学研究科の関満博教授）は、一橋大学、島根県立大学、専修大学、ERINAの中国地域経済・産業研究の専門家・関係者10余名からなっている。

今回の視察は黒龍江省政府外事弁公室とチチハル市政府外事僑務弁公室のご協力[1] を得て、行政機関（商務局、招商局、発展改革委員会、経済委員会、農業委員会）、大学・研究機関（チチハル大学、チチハル市社会科学院）、現地

[1] 一人一人の名前は挙げられないが、とりわけチチハル市政府外事僑務弁公室の辛華氏と曹万嵐氏には、移動、調査手配とアテンドを対応して頂き、この場を借りて深甚な感謝を申し上げる。

写真１　建設ラッシュに沸き立っているチチハル

写真２　綏満高速道路（G10）の建設現場

企業（商業、機械、食品・飲料・日用品関連企業）を対象とする現地調査を通じて、チチハル市の産業発展状況及び日本を含めた北東アジア諸国との協力可能性を図ることを目的としている。

建設ラッシュに沸き立つ東北辺境都市

中国東北辺境の最大都市・チチハルは、７つの区と８つの県から構成され、全体の面積が４万2,400平方キロメートル、人口569万人（うち市内人口は143万人）を抱える黒龍江省第二位の都市である。日本ではまだ馴染みの薄い名前だが、現地のダフール語の「辺境」または「天然牧場」に由来するという。

かつての社会主義計画経済期には、大型国有企業の集積地としてチチハル市経済は成長してきた。しかし改革開放期以降､市場経済への移行という変化にうまく適応できず、同市は沿海部に比べて大きく出遅れた。近年、経済改革の深化に伴い、チチハル経済は伝統産業（工作機械、鉄道貨物車両製造、軍需産業、化学工業）に加え、緑色食品の生産も好調に推移している。

さらに、黒龍江省経済振興プランの目玉とも言える「哈大斉工業走廊建設区（ハルビン･大慶･チチハル工業回廊）」の具現化により、チチハルは同省経済発展の重要都市として注目されつつある。好調な経済を反映して、高層ビルの建築工事（写真１）、高速道路（写真２）といった社会インフラの建設ラッシュに沸いている。

写真３　チチハル第二機床集団有限公司の大型旋盤とプレス設備工場

企業形態の多様化が進む工業都市

チチハル市は、計画経済期において国内の重要な機械・軍需・化学工業の集積地だったが、現在もその工業基盤が色濃く残っている。全国に名を知られる大型国有企業として、中国第一重型機械集団（原子力発電設備の生産経験を持つ国内最大規模の機械設備メーカー）、東北特鋼集団北満特殊鋼工場（鉄鋼メーカー）、チチハル軌道交通装備有限責任公司（鉄道貨物車両製造メーカー）、斉重数控装備股份有限公司とチチハル第二機床集団有限公司（工作機械メーカー）などが挙げられる。

今回の視察では、国有企業のチチハル第二機床集団有限公司（写真３）のほか、輸出急増で注目されるチチハル市精鋳良鋳有限責任公司（鉄道用鋳造部品メーカー）のような民営企業数社も訪問した。近年における国有企業の再編と民営化及び非国有セクターの育成によって、多種多様な企業形態が形成されつつあることを実感した。

大きな可能性を秘める農業・農産品加工業

チチハルの土地は世界三大黒土帯の一つで、郊外を流れる「嫩江」は中国国内で汚染されていない数少ない河川の一つである。澄んだ空気、良質の土壌と綺麗な水を有するチチハルは、緑色食品産業を生産する理想の土地とされている。

チチハル市の耕地は18万ヘクタールを超え、年間食糧生産高が500万トンにのぼる。また、同市の草原面積は55万

写真４　甘南県興十四村の展示ホール

写真５　北大倉集団のプレゼンテーション

ヘクタール、家畜飼育量は800万頭に達している。さらに、15カ所の「特産之郷」（国家認定の「特産の里」で、日本の「一村一品運動」に相当する）が存在している。

今回視察した黒龍江省農業観光モデル地区の「甘南県興十四村」（写真４）、製酒メーカーの「北大倉集団」（写真５）、緑色食品メーカーの「龍江県興旺米業」、製乳メーカーの「光明松鶴乳品」等を通じて、農業・畜産業、農業観光及び農産品加工業を地域産業振興の基幹的な部分にしていくチチハル市は大きなポテンシャルを持っていると認識させられた。

なお、今回の産業調査の詳細については、チチハル市産業の発展に向けた現状と課題ならびに今後の可能性を分析し、2010年の夏をめどに書籍にまとめる予定である。

ERINA・JRIワークショップの開催

ERINA調査研究部研究主任　中島朋義

８月19日、韓国の静石物流通商研究院（英語名称：Jungseok Research Institute of International Logistics and Trade、略称JRI）の研究スタッフがERINAを訪問し、両研究機関の合同ワークショップが開催された。

JRIは2003年に、韓国の運輸物流関連の大手企業グループである韓進グループの支援によって、仁川広域市に立地する総合大学、仁荷大学校に併置する形で設立された研究機関である。国際物流と通商を研究領域とし、北東アジアにおける経済協力も関連する研究分野として重視している。研究体制は７～８名程度の専任研究スタッフを擁する他、仁荷大の経済学部、通商学部、物流専門大学院などの多くの教員が研究スタッフを兼任している。

昨年、FTAなど通商政策を専門とする鄭仁教経済学部教授（写真右から二人目）がJRIの院長に就任し、現在、研究機関としての活動内容をさらに高度化することを目指している。鄭院長は以前、政府系シンクタンクである対外経済政策研究院（KIEP）の研究委員をつとめ、韓・チリFTA、日韓FTAなど、韓国のFTA交渉に専門家として参画してきた。また、二回にわたって北東アジア経済発展国際会議（NICE）に、パネリストとして参加するなど、これまでもERINAの研究活動に協力いただいている研究者である。

今回のワークショップでは、通商と物流の二つのセッションが設けられた。

通商セッションでは、鄭院長が、“A Critical Review on Regional Integration Processes in East Asia”と題し、最近の東アジアの経済統合の動きを包括的な視点から整理、分析した内容を報告した。これに続いて中島から、“East Asian Economic Integration and US East Asia Trade Policy”という内容で、東アジア経済統合と、米国の対外政策の関係に焦点を当てた報告を行った。二つの報告は期せずして内容的に補完性を持ち、フロアからの活発な質疑も含めて、充実した議論が行われた。

物流セッションでは、まず金泰勝 仁荷大物流専門大学院教授から、“Effects of Low Cost Carrier's Entry on Airline Rivalry”と題し、韓国の航空規制緩和による新規航空会社の参入の経済効果に関する分析結果が報告された。続いて新井洋史 ERINA調査研究部部長代理から、“Development of International Transportation Corridors in Northeast Asia”と題し、ERINAのこれまでの北東ア

ジアの物流問題に関する研究成果と、政策提言を踏まえた報告が行われた。これに対しJRI側の参加者から、北東アジアの現状について、多くの質問、意見が出され、内容の濃い議論が交わされた。

今回のワークショップはERINAとJRIが組織として共同して行った初めての活動である。この催しを通じ、両機関の研究領域が多くの部分で重なり、また補完性を持つことが認識された。北東アジアの物流及び通商問題に取り組む研究機関として、両者の協力関係がさらに緊密さを増し、永続していくことを期待する。

北東アジア動向分析

中国（東北三省）

2009年上半期の東北三省経済、10.8％成長

国家発展改革委員会東北振興司が７月24日に発表した『東北地区2009年上半期経済形勢分析報告』によれば、2009年上半期東北三省の地域内総生産が前年同期比10.8％増の1兆1,724億元に達し、全国平均の同7.1％より3.7ポイント上回った。そのうち、遼寧省が同11.5％増の5,921億元、吉林省が同11.7％増の2,572億元、黒龍江省が同8.9％増の3,231億元に達した。中国国内において東北地域の回復が速いペースで進んでいる。

2009年上半期の一定規模以上工業企業（国有企業及び年間売上高500万元以上の非国有企業）の工業付加価値は前年同期比で11.5％増の6,127億元に達した。そのうち、遼寧省が同12.7％増、吉林省が同13.1％増、黒龍江省が同8.1％増となり、いずれも全国平均の7.0％より高かった。工業生産の動向とリンクする物流の量も回復し、2009年上半期に大連港の取扱貨物量が前年同期比11.1％増の１億９万トンに達し、過去最高となった。

投資動向を示す全社会固定資産投資額の伸び率をみると、2009年上半期に遼寧省が前年同期比48.9％増、吉林省が同42.4％増、黒龍江省が同45.0％増と、いずれも全国平均（同33.5％増）を上回った。2009年上半期に東北三省の都市部において、１億元を超えた投資プロジェクトは前年同期より382件増の2,739件に達し、投資金額は2,932億元に達した。このうち工業による固定資産投資の割合が高く、遼寧省が48.7％、吉林省が58.3％、黒龍江省が51.2％をそれぞれ占めた。

2009年上半期の社会消費品小売総額は、東北三省が前年同期比18.1％増の5,639億元に達し、全国平均より1.2ポイント上回った。このうち、遼寧省が同17.5％増の2,745億元、吉林省が同18.4％増の1,348億元、黒龍江省が同18.9％増の1,547億元となった。東北三省では、いずれも農村部の伸び率が都市部の伸び率を超え、遼寧省が0.3ポイント、吉林省が4.7ポイント、黒龍江省が0.6ポイント、それぞれ上回った。

2009年上半期の対外貿易に関して、東北三省の輸出入総額は前年同期比21.1％減の388.5億ドルにとどまった。うち輸出額は同23.2％減の205.5億ドルとなった。省別輸出額の伸び率では遼寧省が同25.6％減、吉林省が同41.6％減、黒龍江省が7.9％減となった。外資誘致の面をみると、2009年上半期に東北三省の誘致額は同9.7％増の100.7億ドルとなり、全国平均の同17.9％減を大きく上回った。東北地域に対する外資の関心がますます高まっている。

遼寧沿海経済帯発展計画、国家の発展戦略に昇格

2009年７月１日、遼寧沿海経済帯発展計画が国務院常務会議で採択された。2005年に「五点一線」として打ち出された中国最北の沿海地域開発計画が今後国家の発展戦略として進められることになった。

遼寧沿海経済帯には丹東、大連、営口、盤錦、錦州、葫蘆島の６都市が含まれる。東北新聞網2008年11月３日付の記事によれば、遼寧沿海経済帯の陸上面積は5.65万平方キロメートル、遼寧省全体の38％、東北三省の７％を占める。人口は1,769.9万人で遼寧省全体の41.8％、東北三省の16.2％を占める。地域総生産が遼寧省の51.6％、東北三省の24％を占める。

発展計画では造船、石油化学、先端装備産業、高付加価値の原料加工、農産品加工等の産業を重点的に発展させ、丹東港・大連港・営口港・錦州港・葫蘆島港等の良港を利用して北東アジアに向けた成長センターを目指している。域内ではインフラ整備を加速し、進出企業に対して用地、税金、融資、技術開発、市場開拓等の優遇策が講じられている。

遼寧沿海経済帯発展計画の国家発展戦略への採択に伴い、今後インフラ整備や工場建設のスピードがますます加速することが予想される。施設の重複建設、港湾間の過当競争および産業構成の同質化を避けるために都市間の協調的発展が求められる。また、遼寧省･東北三省のみならず、北東アジア全体を視野に入れ、開発を進める必要がある。今後、遼寧沿海経済帯がどの程度まで、どのような形で遼寧省と東北三省の経済成長をけん引していくかを注目したい。

（ERINA調査研究部研究員　穆 尭芋）

		2006年				2007年				2008年				2009年1－6月			
		中国	遼寧	吉林	黒龍江	中国	遼寧	吉林	黒龍江	中国	遼寧	吉林	黒龍江	中国	遼寧	吉林	黒龍江
経済成長率（実質）	%	11.6	13.8	15.0	12.1	13.0	14.5	16.1	12.1	9.0	13.1	16.0	11.8	7.1	11.5	11.7	8.9
工業総生産伸び率(付加価値額)	%	16.6	20.0	18.5	15.4	13..5	21.0	23.6	15.8	12.9	17.5	18.6	13.1	7.0	12.7	13.1	8.1
固定資産投資伸び率	%	23.9	34.8	55.6	29.1	24.8	30.7	42.8	28.1	25.5	34.7	40.1	28.1	33.5	48.9	42.4	45.0
社会消費品小売額伸び率	%	13.7	14.5	14.7	13.5	16.8	17.3	19.3	16.7	21.6	22.0	24.3	21.8	15.0	17.5	18.4	18.9
輸出入収支	億ドル	1,775	82.5	▲ 19.2	40.2	2,622	111.8	▲ 25.8	72.4	2,955	116.8	▲ 38.0	102.5	969.3	28.5	▲ 23.1	27.2
輸出伸び率	%	27.2	20.8	21.5	38.9	25.7	24.7	28.7	45.4	17.2	19.1	23.7	35.1	▲ 21.8	▲ 25.6	▲ 41.6	▲ 7.9
輸入伸び率	%	20.0	14.2	21.1	26.3	20.8	20.3	31.0	13.8	18.5	25.8	33.0	25.7	▲ 25.4	▲ 18.5	▲ 20.4	▲ 16.7

（注）前年同期比
工業生産伸び率は国有企業及び年間売上高500万元以上の非国有工業企業の合計のみ。
固定資産投資伸び率は中国における社会全体の数値。
2007年の経済成長率は、2009年１月14日に中国国家統計局が発表した数値。
（出所）中国国家統計局、中国商務部、国家発展と改革委員会、遼寧省統計局、吉林省統計局、黒龍江省統計局、ハルビン税関、『新華網』、『遼寧日報』、『吉林日報』、『黒龍江日報』ウェブページより作成。

ロシア

経済概況

ロシア経済は、依然として厳しい状況にある。上半期の実質GDPは、対前年同期比10.4％減（暫定推計値）であった。また、固定資本投資、鉱工業生産や小売売上高なども減少している。ただし、経済発展貿易省は、独自に行っている推計に基づき、６月及び７月は２か月連続で実質GDP（季節調整済み）が対前月比プラス成長したとの評価を行っている。これに従えば、ロシア経済は下げ止まりの段階にあると言うこともできそうである。

貿易の状況を見てみると、上半期の輸出総額は1,246億ドル（前年同期比46.9％減）、輸入総額は717億ドル（前年同期比42.6％減）という低い水準にある。ただし、月次の動向をみると、徐々に回復している。主要な輸出品目である原油の輸出量は対前年比0.2％増であり、原油価格の回復傾向と併せて考えると、ロシア経済には明るい材料であるといえる。輸入面では、設備投資の減少を反映して、機械設備輸送機器類の輸入は53.7％の大幅な減少となった。

2010年予算原案

ロシア連邦財務省は2010年から３年間の予算の基本方針を公表した（以下、「2010年予算原案」という。）

09年予算は策定時点では、経済危機の要素を織り込んでいなかったため、09年4月に大幅な変更を加えた補正予算が組まれた。歳入を大幅に引き下げる一方、歳出を増額したため、3.0兆ルーブル（補正予算策定時における09年の名目GDP推計値比7.4％）という赤字予算となっている。

2010年予算原案においても、歳入6.6兆ルーブルに対して、歳出9.8兆ルーブルを計上しており、赤字幅は2009年補正予算をやや上回る3.2兆ルーブル（2010年予算原案策定時における10年の名目GDP予測値比7.5％）とされている。さらに、赤字幅は縮小するものの、11年、12年とも赤字予算を続ける案となっている。

2010年予算原案策定の前提とした経済成長率は、09年がマイナス8.5％と推計されており、その後の２年間は１、２％程度のプラス成長と予測している。その他の主な経済指標に関する09年～11年の間の予測値をみると、原油（ウラル）の価格は54～56ドル／バレルとなっており、09年８月の水準（約70ドル／バレル）からみて、控え目な予測であるといえる。これは、おおよそ05年下半期から07年上半期ころの水準である。また、輸出額の予測は2,740～2,820億ドルとなっており06年をやや下回る水準、輸入額は1,900～2,050億ドルと07年とほぼ同じレベルであると予測されている。

以上をまとめると、2010年予算原案においては、次のようなシナリオを想定しているといえよう。すなわち、「この先２年間、ロシア経済を支える最大の柱である原油などの資源輸出は、06年とほぼ同じ水準でありながら、自律的な経済成長の力は弱く、財政出動による経済の下支えによりプラス成長を確保する」というものである。筆者としては、06年の成長率が7.7％であったことと比べて、かなり悲観的なシナリオであるように感じられる。確かに06年時点より輸入額が大きくなってしまっているために、輸出による経済成長への寄与が相殺されて小さくなるという面はある。とはいえ、政府の立場であまり明るい未来を描いてしまうと外れた時の政治的リスクが大きいので、あえて悲観的な予測をしているのではないかという印象を受ける。

なお、財政赤字の補てんのために「予備基金」、「国民福祉基金」を取り崩す計画であり、予備基金は09年初時点での残高が４兆ルーブルであったものが10年末までに底をつき、国民福祉基金は09年初の2.6兆ルーブルが12年末には0.9兆ルーブルへと減少する。もし、このままの傾向が続けば、14年にも基金が底をつくことになってしまう。ただし、現時点でそこまで見通すのは困難である。少なくとも今後３年間は基金を利用して景気刺激型の積極財政を展開できるだけの財政余力があるということを評価すべきであろう。

（ERINA調査研究部部長代理　新井洋史）

（前年同期比％）

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	
										1Q	上半期**
実質GDP	10.0	5.1	4.7	7.3	7.2	6.4	7.7	8.1	5.6	▲ 9.8	*▲ 10.4*
固定資本投資	17.4	10.0	2.8	12.5	13.7	10.9	16.7	21.1	9.8	▲ 15.6	▲ 18.8
鉱工業生産高	8.7	2.9	3.1	8.9	8.0	5.1	6.3	6.3	2.1	▲ 14.3	▲ 14.8
小売売上高	9.0	11.0	9.3	8.8	13.3	12.8	14.1	16.1	13.5	▲ 0.1	▲ 3.0
実質可処分所得	12.0	8.7	11.1	15.0	10.4	12.4	13.5	12.1	2.9	▲ 0.2	0.0
消費者物価*	20.2	18.6	15.1	12.0	11.7	10.9	9.0	11.9	13.3	5.4	7.4
工業生産者物価*	31.9	8.3	17.7	12.5	28.8	13.4	10.4	25.1	▲7.0	4.4	10.0

*前年12月比。
**斜体は暫定推計値
出所：『ロシアの社会経済情勢（2009年６月号）』、『同（７月号）』ほか、ロシア連邦国家統計庁発行統計資料

モンゴル

2009年上半期には、世界経済・金融危機によるモンゴル経済の収縮に、若干緩和の傾向が見られるようになった。第2四半期の実質GDPは拡大し、インフレ率は低下し、通貨の増価と同時に、貿易活動は活発化している。しかし同四半期に、失業者数は増加し、国家財政収支は悪化し、産業生産額は減少している。7月の経済状況もほぼ同様である。

国内総生産（GDP）

上半期のモンゴルの実質GDPは、2005年価格で1兆6,090億トゥグルグであり、前年同期比1.3％減となった。第2四半期の成長率は前年同期比0.7％増であった。GDPの減少は、鉱工業、建設業、卸・小売業の生産活動の減少によるものである。上半期の鉱工業、建設業の付加価値額はそれぞれ前年同期比6.5％減、農業は3.6％増、サービス業は2.1％増となっている。同時期の各部門の生産物に対する純課税額（補助金を除く）は、前年同期比7.5％減となった。

インフレ・為替レート・失業

消費者物価を基準としたインフレ率は、6月は前年同期比6.3％、7月は同4.9％に低下した。これらの低下は主に、消費者物価指数の中で大きなシェアを占める食料品・非アルコール飲料の動きによるものである。

6月末時点で通貨トゥグルグの対米ドル為替レートは、1ドル＝1,436トゥグルグで、3月から5.8％増価したが、7月には同1,455トゥグルグとなり、1.3％減価した。これは前年同月比26％の減価である。またトゥグルグは同時期に、中国元に対しては前年同期比26％減価し、ロシアルーブルに対しては同7.2％増価した。

6月末の登録失業者数は39,500人で、7月末には40,700人に増加した。これは前年同月を29.4％上回っている。新規登録失業者のうち、44％はウランバートル市で登録したものである。また全国の新規登録失業者のうち、67％が16～34歳で、67％が高校または中学卒、16.6％がそれ以上の学歴となっている。

国家財政

2009年上半期の財政収支は、2,610億トゥグルグの赤字となった。これは前年同期の赤字額を2,560億トゥグルグ上回っている。7月には赤字額がさらに200億トゥグルグ拡大している。上半期の財政収入は前年同期を20％下回り、財政支出は前年同期を4.8％上回った。上半期に租税収入は前年同期比28.8％減少した。これはもっぱらモンゴルの主要輸出品の国際市場における価格低下により、臨時収入税が減少したことと、所得税の減少によるものである。財政支出の増加は主に前年同期を12％上回った賃金･給与と、同じく4％に上回った補助金よるものである。

産業生産額

産業生産額は2009年に7か月連続で減少を記録している。上半期の産業生産額は前年同期比8％減となり、7月には同15％減となった。累計すると1-7月の産業生産額は前年同期比9％の減少となった。

部門別に見ると製造業の落ち込みが最も大きく1-7月は前年同期比で4分の1減少、鉱業が同2.3％減となった。一方、エネルギー･水供給部門は同1.5％の成長を達成した。

7月末時点で産業部門の雇用は46,200人であった。これは前年同月を4,100人、率にして8.2％下回っている。

外国貿易

2009年上半期のモンゴルの貿易総額は17億ドルで前年同期を39.6％下回った。このうち輸出は前年同期比40％減、輸入は同39.3％減となった。貿易収支の赤字額は1億3,000万ドルに拡大した。7月にはさらに3,400万ドルの赤字が発生した。1-7月にモンゴルの輸出先は56か国、輸入先は96か国であった。同時期にモンゴルの主要な鉱産物（金、蛍石、錫精鉱等）の輸出は、数量、金額の両方で減少した。また、家畜製品の輸出は数量では拡大したが、金額は低下した。

一方、銅精鉱およびモリブデンの輸出数量は、増加または横ばいであるが、それらの輸出金額は前年同期のほぼ半分にとどまっている。例として、1-7月の銅精鉱の輸出数量は2008、2009の両年とも、335,000トンで変わらないが、輸出金額は2008年の5億2,000万ドルから、2009年には2億2,900万ドルに減少している。

モンゴル・ロシア関係が新たな段階へ

8月25～26日にメドベージェフ・ロシア大統領がモンゴルを訪問し、“モンゴル・ロシア間の戦略的協力関係の発展に関する宣言”に調印が行われた。さらにこの他に、両国間で二国間協力に関する下記の4件の文書が調印された。

・モンゴル鉄道庁とロシア連邦鉄道輸送庁の間の協力に関する覚書
・ウランバートル鉄道、ロシア鉄道、トランスマシュ持株会社[1]の間の協力に関する覚書

[1] ロシアの鉄道関連機械メーカー

・モンゴル総選挙委員会とロシア中央選挙委員会の間の議定書

・モンゴル-ロシア国境地帯のウラン鉱脈を探査するドルノド・ウラン会社の設立に関する合意書

また両国は、両国間の天然ガスパイプラインの建設の可能性についても議論した。

（ERINA調査研究部研究主任　Sh. エンクバヤル）

	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年1Q	2Q	1－6月	2009年６月	７月
実質GDP成長率（対前年同期比：%）	7.3	8.6	10.2	8.9	▲ 4.2	0.7	▲ 1.3	-	-
産業生産額（対前年同期比：%）	▲ 4.2	9.1	9.7	2.8	▲ 8.3	▲ 6.7	▲ 7.9	▲ 10.1	▲ 14.8
消費者物価上昇率（対前年同期比：%）	9.5	6.0	15.1	22.1	16.3	6.3	6.3	6.3	4.9
登録失業者（千人）	32.9	32.9	29.9	29.8	34.8	39.5	39.5	39.5	40.7
対ドル為替レート（トゥグルグ）	1,221	1,165	1,170	1,268	1,524	1,436	1,436	1,436	1,455
貿易収支（百万USドル）	▲ 113	107	▲ 114	▲ 710	▲ 72	▲ 58	▲ 130	▲ 29	▲ 34
輸出（百万USドル）	1,064	1,542	1,948	2,535	322	441	763	170	160
輸入（百万USドル）	1,177	1,435	2,062	3,245	394	499	893	199	194
国家財政収支（十億トゥグルグ）	73.3	123.4	133.2	▲ 305.7	▲ 107.0	▲ 154.0	▲ 261.0	▲ 70.0	▲ 20.0
国内貨物輸送（百万トンキロ）	10,268	9,693	9,030	9,051	1,777	2,404	4,181	-	-
国内鉄道貨物輸送（百万トンキロ）	9,948	9,226	8,361	8,261	1,686	2,061	3,748	644	653
成畜死亡数（千頭）	677	476	294	1,641	598	840	1,438	405	-

（注）消費者物価上昇率、登録失業者数、為替レートは期末値。
（出所）モンゴル国家統計局『モンゴル統計年鑑』、『モンゴル統計月報』各号 ほか

韓国

マクロ経済動向と展望

韓国銀行（中央銀行）が、９月３日に公表した第２四半期の実質GDP（改定値）は、季節調整値で前期比2.6％（年率換算9.5％）の伸びで、2003年第４四半期の同2.6％以来、５年半ぶりの高い成長率となった。需要項目別に見ると、最終消費支出は前期比3.0％増と高い伸びを記録している。固定資本形成は前期比4.3％増で、そのうち、設備投資は第１四半期の前期比11.2％減から、同10.1％増に大きく回復している。また財・サービスの輸出も、ここまで３四半期続けてマイナスだったが、前期比2.9％増とプラスに転じている。こうしたGDPの動きからは、韓国経済は力強い回復を見せているといえる。

産業生産指数（季節調整値）も同様に回復の動きを見せており、第１四半期は前期比2.7％減であったが、第２四半期には同11.3％増と大幅な増加に転じた。さらに、月次データでは７月に前年同月比でプラスに転じている。

貿易収支は2008年第４四半期に黒字に転じ、2009年第１四半期は83.5億ドル、第２四半期は176.3億ドルの黒字となった。月次データでも７月まで。６か月連続して黒字となった。

物価の動向は、消費者物価上昇率は５月に前年同月比2.7％、６月に同2.0％、７月に同1.6％と低下している。また、生産者物価上昇率は５月に前年同月比マイナス1.3％を記録した後、６月に同マイナス3.1％、７月に同マイナス3.8％と、急速な低下を示している。

為替レートは３月には１ドル＝1,453ウォンであったものが、５月には同1,256ウォンとウォン高の方向に戻り、その後同1,200ウォン台で安定している。しかし昨年９月のリーマン・ブラザースの破綻以前の１ドル＝1,000ウォン前後の水準から比較すれば、中期的なウォン安の傾向が持続しているといえる。

雇用状況を示す失業率は、季節調整値で１月に3.3％であったものが、６月には4.0％まで上昇したが、７月には3.8％と若干低下している。

こうした足元の経済の回復基調を受けて、今後の見通しについてもこれまでの予測を上方修正する動きが見られる。これまで主要シンクタンク等の予測では、経済対策の効果などによって、第２四半期の成長率は高まるが、第３四半期はその反動で、再び前期比マイナスに転ずるという見方が多かった。いわゆる景気の“二番底”という経路である。しかし直近の輸出をはじめとする需要の回復によって、第２四半期からは減速するものの、前期比１％程度のプラス成長が実現できるのではないかという見方が出てきている。後述する最近の企業業績の好転も、こうした見方に根拠を与えている。

また第２四半期の成長率についても、速報値の前期比2.3％から同2.6％に改定され、特に設備投資は大きく上方修正されている。

一部の外国金融機関は、これらの要素を考慮し、2009年通年の経済成長率が０％前後まで回復するとの楽観的な見方を示している。しかし一方で、二番底に対する懸念が完全に払しょくされたわけではなく、政府（企画財政省）は、現状ではマイナス1.5％との見通しを維持している。

輸出企業の業績回復

上場企業の第２四半期の営業利益を見ると、エレクトロニクス、自動車など主要輸出業種の大手企業の業績回復が顕著である。

エレクトロニクスでは、サムソン電子が、前期比7.2倍となる１兆600億ウォン、LG電子が同63％増の7,100億ウォンで、12月期決算の上場企業の１、２位を占めた。これは主に半導体、液晶パネルのなどの市況の改善と、海外市場での薄型テレビなどのシェアの拡大によるものである。この背景にはウォン安によって、ライバルの日本企業に対し、価格競争力が強まったことがあげられるが、それ以外にも経済危機下での積極的な経営戦略が功を奏しているケースもある。例えばサムソン電子が発売した発光ダイオード（LED）を使用した省エネ型の液晶テレビが、欧米の市場で好評となっている。この高付加価値の新商品によって米国市場でのサムソン電子の薄型テレビの平均販売単価は、ソニーを上回った。

自動車業界では最大手の現代自動車が、前期比4.3倍となる6,500億ウォンの営業利益を上げている。ウォン安を背景に米国市場でのシェアを拡大、また中国、インドなど新興市場でも大きく売り上げを伸ばしている。トヨタなどのライバルと比して、小型車中心であった車種構成が、経済危機下では結果としてプラスとなった。米国市場ではグループ企業の起亜自動車を合わせた８月の販売台数が10万台を突破し、ビッグスリーの一角であるクライスラーを凌いだ。

こうした輸出企業の好調を、内需の拡大につなげていけるか否かに、韓国経済の本格的回復がかかっているといえよう。

（ERINA調査研究部研究主任　中島朋義）

	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	08年7-9月	10-12月	09年1-3月	4-6月	09年５月	６月	７月
実質国内総生産（%）	4.7	4.2	5.1	5.1	2.2	0.2	▲ 5.1	0.1	2.6	-	-	-
最終消費支出（%）	0.4	3.9	4.8	4.7	1.3	0.2	▲ 3.4	1.2	3.0	-	-	-
固定資本形成（%）	2.1	2.4	3.6	4.0	▲ 1.9	0.1	▲ 6.5	▲ 0.4	4.3	-	-	-
産業生産指数（%）	10.3	6.4	8.4	6.9	3.0	▲ 1.9	▲ 11.9	▲ 2.7	11.3	1.5	5.7	2.0
失業率（%）	3.7	3.7	3.5	3.2	3.2	3.2	3.2	3.5	3.9	3.9	4.0	3.8
貿易収支（百万USドル）	37,569	32,683	27,905	28,168	5,994	▲ 3,476	4,967	8,350	17,626	4,882	6,612	6,165
輸出（百万USドル）	253,845	284,419	325,465	371,489	422,007	115,000	93,071	74,418	91,056	28,118	32,607	32,023
輸入（百万USドル）	224,463	261,238	309,383	356,846	435,275	122,901	91,528	71,356	73,356	23,234	25,393	27,617
為替レート（ウォン／USドル）	1,144	1,024	955	929	1,103	1,066	1,364	1,418	1,286	1,256	1,262	1,262
生産者物価（%）	6.1	2.1	0.9	1.4	8.6	12.0	8.0	4.2	▲ 1.0	▲ 1.3	▲ 3.1	▲ 3.8
消費者物価（%）	3.6	2.8	2.2	2.5	4.7	5.5	4.5	3.9	2.8	2.7	2.0	1.6
株価指数（1980.1.4：100）	896	1,379	1,434	1,897	1,124	1,448	1,124	1,206	1,390	1,396	1,390	1,557

（注）国内総生産、最終消費支出、固定資本形成、産業生産指数は前期比伸び率、生産者物価、消費者物価は前年同期比伸び率、株価指数は期末値
国内総生産、最終消費支出、固定資本形成、失業率は季節調整値
国内総生産、最終消費支出、固定資本形成は2000年基準、生産者物価、消費者物価は2005年基準
貿易収支はIMF方式、輸出入は通関ベース
（出所）韓国銀行、統計庁他

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）

平壌国際建築図書展示会開催

2009年８月12日付『朝鮮新報』によると、平壌国際建築図書展示会が８月３日～５日、平壌市内の人民大学習堂（国立中央図書館）で行われた。

同展示会にはロシア、中国、フランス、ドイツ、ポーランド、インドネシアをはじめとする10余カ国から20あまりの代表団が参加し、2006年以降、各国で発行された最新建築科学技術図書5,000点あまりが展示された。展示会を主催した対外文化連絡委員会の関係者によると、展示図書はすべて朝鮮に寄贈されるという。

2012年までに平壌市に10万世帯の住宅建設誓い決起集会

2009年８月12日付『朝鮮新報』によると、平壌市の建設者が2012年までに10万世帯の住宅を建設することを誓い、８月７日、金日成広場で決起集会が行われた。

金英逸首相、崔永林最高人民会議常務委員会書記長と武力機関、勤労者団体、省、中央機関の責任幹部、平壌市内の党、政権、行政経済機関の活動家、建設者、勤労者が集会に参加した。

2009年度版アリラン公演開始

2009年８月22日付『朝鮮新報』によると、大マスゲームと芸術公演「アリラン」の2009年度版公演が８月10日始まった。「アリラン」は毎年、さまざまな場面が修正、改作され、その時々の北朝鮮の政策や、社会のあり方を写す鏡となっている。

ERINAによる2009年度版のアリラン視察では、今年の経済政策の目玉である「150日戦闘」の場面や、「朝鮮は世界に向かって進む」などのメッセージが追加されているのが確認された。

南北赤十字会談開催

2009年８月26日～28日、北朝鮮の金剛山で南北赤十字会談が開催された。同会談の合意文によると、南北離散家族再会事業を９月26日～10月１日に実施することが決まった。南北の面会家族は各100人である。

開城工業地区（開城工業団地）の現状

韓国・統一省は2009年９月１日、開城工業地区（開城工業団地）への南側からの通行が正常に戻ったと発表した。これは、南北関係の悪化を受けて、2009年12月１日に北側が通行の制限措置をとったものが解除された結果である。

８月31日にERINAが行った現地調査では、通行制限解除の前日だったためか、車の通行量は多くなかった。第１段階の本団地の分譲は基本的に終了しており、基盤施設や工場の建設が進んでいた。今後、南北関係が再び好転すれば活気が戻ってくると見られる。ただし、北朝鮮側の予測よりも入居企業の労働者需要が高いため、今後は人材の不足や通勤問題（管理委員会運営のバス以外に、各企業が自前でバスを運営している例も見られた）など、実務的に解決しなければならない問題は案外多いように感じられた。

開城・南北経済協力協議事務所再開

韓国・統一省によると、2009年９月３日、南北朝鮮は、９月７日から開城工業地区内にある南北経済協力協議事務所を再開させることで合意した。同省によれば、同事務所は、2008年12月１日から北側の一方的措置により閉鎖されたものが、正常運営に入るもの。

（ERINA調査研究部研究主任　三村光弘）

研究所だより

役員の異動

〈退任〉

平成21年６月26日付け

評議員　海輪　誠（前東北電力株式会社新潟支店長）

セミナーの開催

▽　平成21年度第５回賛助会セミナー

【北東アジア経済セミナーシリーズ　４】

平成21年９月９日㈬　NICOプラザ会議室

テーマ：日本経済

講　師：日本政策金融公庫総合研究所副所長

柴山清彦氏

共　催：財団法人にいがた産業創造機構

▽　平成21年度第６回賛助会セミナー

平成21年10月２日㈮　万代島ビル６階会議室

テーマ：東北三省と近隣諸国の経済状況と国際情勢

講　師：中国・遼寧社会科学院朝鮮半島研究センター

秘書長　金哲氏

編　集　後　記

中華人民共和国が誕生して60周年を迎えた10月１日、北京の天安門広場で盛大な軍事パレードと大規模な祝賀イベントが行われ、国内外に中国の「国力」を示した。現に、中国の経済規模は今年中に日本を超える世界2位の経済大国に浮上すると予想されている。

他方、９月中旬に出張で北京を訪れた際、08年の北京五輪開催中と同様に、地下鉄駅ではすべての手荷物が対象となって安全検査が強化されていた。さらに、バスなどの公共交通を含めた自動車の交通規制も実施されており、祝賀行事のために市民が多大な犠牲を払っていることを実感した。

このような中国経済の目覚ましい成長と様々なジレンマをどう評価するか。現代中国研究において、これは言うまでもなく避けて通れない検討課題である。13億の人口を抱える中国についての理解は、その多様性と多元性がある故にかなり異なっている。

たとえば、中国は「世界の工場」としての競争力を兼ね備えた巨大な市場として世界の注目を集めているが、政治面では覇権的大国だという「中国脅威論」がしばしば日本で唱えられている。一方、一人当たりGDPでみると、中国は依然として途上国に分類される。拡大する地域間格差、都市・農村の所得格差、深刻な環境問題等によって、中国が政治的・社会的に崩壊すると予想する「中国崩壊論」も議論されている。

それゆえ、中国経済･社会を的確に捉えて評価するには、常に複眼的なアプローチで研究に取り組むことが必要かつ有効であろう。本号特集で取り上げる吉林省経済に関する研究ももちろん例外ではない。本誌88号に続き、今号も多様なアプローチによる吉林省経済の特徴および北東アジアとの協力可能性の分析を行った。そして、編集作業が進む中で、編集者自身もまた中国地域経済・社会の分析ならびに北東アジア地域協力研究の視座を定めることの大切さを改めて認識させられた。（Z）

発行人　吉田進
編集委員長　中村俊彦
編集委員　新井洋史　中島朋義　三村光弘
Sh. エンクバヤル　伊藤庄一　朱永浩
発行　**財団法人　環日本海経済研究所©**
The Economic Research Institute for Northeast Asia（ERINA）
〒950－0078　新潟市中央区万代島５番１号
万代島ビル13階
13F Bandaijima Bldg.,
5-1 Bandaijima, Chuo-ku, Niigata City,
950-0078, JAPAN
Tel: 025－290－5545（代表）
Fax: 025－249－7550
E-mail: webmaster@erina.or.jp
URL: http://www.erina.or.jp/
発行日　2009年10月15日

（お願い）

ERINA REPORTの送付先が変更になりましたら、お知らせください。

禁無断転載